

フィールドで出会う

風と人と土 6

田中樹・宮寄英寿・石本雄大 編















使用写真

- 表紙 橋のない河にかかる虹
[2017 年 7 月 ラオス 撮影＝田中樹]
- P.1 沢水を引いた洗い場
[2017年 8月 タンザニア 撮影＝田中樹]
- P.2 山岳少数民族の村の在来ブタ
[2017年 7月 ラオス 撮影＝田中樹]
- P.3 道路工事のため片側通行
[2018年 7月 タンザニア 撮影＝田中樹]
- P.4 エーゲ海に浮かぶサントリーニ島の家屋
[2011年 8月 ギリシャ 撮影＝田中樹]
- P.5 咲き乱れるブーゲンビリア
[2011年 12月 ナミビア 撮影＝田中樹]
- P.6 夕暮れの海とダウ
[2012年 11月 ザンジバル 撮影＝田中樹]
- 裏表紙 バナナ園を通り抜ける
[2018年 3月 ラオス 撮影＝田中樹]

「フィールドで出会う風と人と土」の第六巻をお届けします。

2020年は、コロナ禍により誰もが自由を大きく奪われた年になりました。

アフリカやアジア、日本国内などにフィールドを持ち、そこに住まう人びととともにさまざまな活動を行ってきた私たちにとっても試練の年でした。そんな中で、私たちは何をし、どのように振舞えばいいのか。フィールドでお世話になった人びとや自分自身の健康を祈りながら、さらにもう一步踏み出すにはどうしたらいいのか。そんなことを考える一年でもありました。

フィールド調査を行うとき、「待ち」の時間を持つことがよくあります。約束した人が来ない、自身の体調が悪い、交通手段の手配がつかない、悪天候で身動きが取れない、身の回りを整えるので手一杯、その土地の人びとからどことなく疑われたり嫌われてしまう、調査の仮説や思惑が外れてしまう、考えが煮詰まり行動に移せない。そんなときは、ひたすら何かを待っていたような気がします。とはいえ、ただ漠然と時をやり過ごすのではなく、自身の中のバネに力を蓄えるような時間のすごし方をしていました。このエッセイの記事もその一つです。

もっと昔を思い起こすと、若い頃の私たちは、それほど簡単にアフリカやアジアに行くことができませんでした。いつか訪れるであろうあこがれの土地でフィールドワークすることを何度も夢想し、その時が来るのを待ちました。いまはそんな状況にとてもよく似ています。

このエッセイのタイトルは、「フィールドで出会う風と人と土」です。いつも書いていることですが、「風と人と土」とは「風土」という言葉、そしてその二文字の間には常に「人」が隠れています。この一年、それぞれが出会った「人」は自分自身だったかもしれません。

そろそろ目線を上げて、懐かしい友人らや未知の人びとに会いに行く時期がきたようです。

田中樹、宮寄英寿、石本雄大

目次

- 010 中山間地域で「生活」する 千葉 智史
- 016 アフリカの河童 中村 亮
- 020 インド（人）の”魅力” ～南インドのとある村にて～ 関 真由子
- 027 フィールドの「余白」にあるもの 澤崎 賢一
- 033 半農半漁のシジミ汁 庄子 元
- 039 木は植えるべきだったのか 關野 伸之
- 051 ソフィのヨーグルトさん 遠藤 聡子
- 056 東と西から考える未来－暮らしてみても考える社会主義－ 寺田 匡宏
- 061 健康と栄養不良、飽食と飢餓のはざまで－東南アジアの食事を見て－ 砂野 唯
- 068 マルーラの季節－南アフリカ北東部におけるマルーラの利用と商品化－ 藤岡 悠一郎
- 075 なにげない、ひとこと 岸上 光克
- 079 ケニアルオの人々の「死」にまつわる話 山根 裕子
- 083 タンザニアに行ったフィールドワーカーが感じること 加藤 太
- 088 コロナ禍で生まれる新しい交流 植田 淳子
- 094 魔法のことば 神代 ちひろ
- 104 Gorontalo on my mind - 発展と人々の意識の変容- 菅原 久誠
- 112 南極での調査生活 林 昌平
- 120 おばあさんの灰皿 村田 周祐
- 125 アートに発見！世界の共感性 川尻 優子
- 130 地方での「アート」。その一年。 田名邊 元
- 144 「屋号うた」のものがたり 石山 俊
- 153 ウガンダに学ぶ 大平 和希子

中山間地域で「生活」する

私がいまいる場所

昨日は久しぶりに夜から雨が降りました。この原稿を書いている2020年12月は、先月からほとんど雨が降っておらず、久しぶりの雨。まさに恵みの雨でありがたい限りなのですが、降るときは大量に降り、降らないときはまったく降らない傾向は、年々強くなっているように感じます。さながら雨季と乾季のようで、確実に進む気候変動に思いを馳せずにはられません。

天候に限った話ではありませんが、「何が正常かわからない」そんな不確かさは加速していくのかもしれない……。翻って自分の生活という小さな視点に立ち戻ると、毎日の天気予報や実際の天候に一喜一憂するくらいには、土地に根ざした生活を送れるようになったのかなあと、自分たちなりのペースではありますが、少し誇らしく感じる部分もあります。

いま私が住んでいる場所は、紀伊半島東南端に位置する和歌山県那智勝浦町という町。生マグロや熊野古道をはじめとした世界遺産で知られるこの町の中心から、車で30分ほど山の中へ分け入った、色川地区(旧色川村)という場所が、生活の場です(写真1)。棚田をはじめとするこれまでの営

みが集積された地域の雰囲気やここで生活するみなさんとの波長が合ったことが大きな理由となり、こちらに移り住んで6年になります。上水道は山から引いた水、下水はなし(汲み取り)、肉は自分あるいは人が捕獲した鹿や猪が中心、自分たちの食べるものは少しだけでも生産したいと猫の額ほどの田畑を耕すなど、自給比率を1パーセントでもあげようと、できることを実践しているさなかです。



写真1. 旧色川村・口色川区の風景

自己紹介

生まれと育ちは、北海道・千歳市。大学進学時に上京後、そのまま東京で就職し、12年ほど大都会で過ごしました。望んでの生活だったはずなのですが、いつからか、都会での生活に疑問を抱

くように。その大元を探ると、自分の思う人間性（人が人らしく生きること）と都会での生活の乖離が大きくなりすぎたことが要因のようでした。そこから、都会を離れる方法を探し始めます。

いったんふるさとに戻る道も考えましたが、生まれ育った町は順調に住民が増えており、順調に中規模の都市として面白くない町になりつつありました。「自分が戻る意味はない」そう思い、北海道は選択肢から外れることに。加えて、「海」よりも「山」、都会から行きにくい場所といった見えてきた自分なりの条件をふまえつつ、自分の編集という経験を生かしながら地域コミュニティにどっぷりと入っていける場所はどこだろう？と探してたどり着いたのが、色川地区の地域おこし協力隊の募集でした。初めて訪れた際に先述した印象を強く持ったことやご縁もつながりトントンと話が進み、色川への移住を決断します。大きな高揚感はありませんでしたが、不思議とそこに迷いはなく、妙にしっくりときた感覚があったことはよく覚えています。

地域おこし協力隊での活動、そして現在の生活

協力隊で行っていた活動は、主に地域活動のサポートでした。地域の行事に参加し、お話を聞いて記録させていただいたり、地域新聞の編集をしたり、聞き書きがメインの冊子製作（写真2）

をサポートしたり。色川で現在起こっていることはもちろん、かつてのこと、大きさに言えばこれまでの歴史を自分に染み込ませていく貴重な3年間でした。この時間は、任期が終わったあともここで生活を営むための重要な素地になったことは間違いありません。とくに、地元の方が話す昔の出来事は興味深く、「ドジョウやフナが田んぼのなかにおった」、「うなぎ釣りによく出かけた」、「学校まで1時間半かけて山を歩いて通った」、今では見られないそんな話を聞くたびに、なんと豊かな生活だろうか、勝手に感動していました。実際は、生きるために子どもの時から働いていた方も多く、決して楽しいばかりではなかったと思いますが、昔を語る口調はみなさんどこか楽しげで、充実していたであろう暮らしぶりを垣間見る瞬間でもありました。



写真2. 地元住民の聞き書きを中心に年一回発行されている「色川だより」

協力隊の任期が満了したのちは、複数のなりわいを重ね合わせながら生活しています。家族は、妻と娘と私の3人。大きな柱となるなりわいは、夫婦で営む編集や記事を執筆する仕事です。それ以外に、週3日はよろず屋さんという日用品や酒・タバコを売る商店に併設したらくだ舎喫茶室という場を運営し(写真3)、そのほか、棚田の保全活動や地域の草刈りなどの季節労働(写真4)、区の役員や消防団員などなど、対価を得る仕事だけに限らなければ、10以上の役割を持っています。



写真3. 喫茶室の内部



写真4. 5月にはお茶刈りを手伝うことも

とても乱暴に分けると、私たちのなりわいは、1 編集や記事執筆を通じた外のお金を稼ぎ外部との関わりを持ち続けるもの。2 得たお金を地域に投資し、住民や色川の外から訪れた人同士が出合える接点を作る(喫茶室の運営)。3 これらが続けながら、地域コミュニティを維持するために必要不可欠な仕事の担い手として働く。以上の3つに分けられ、それぞれが有機的に循環しながら生活していくことをめざしています。

次年度以降は、自分たちの衣・食・住にもう少し目を向けて、エネルギーの自給や食糧の自給率向上、自力で生きていける術の習得などに時間を割いていきたい算段ではありますが、どうなることやら。

いずれにしても、都会では感じづらかった「個」として認められているような安心感や稼ぎは少ないけれどどうにか生きていけるだろうという変な自信が付き、生きやすくなったように思います。基本的には、自分たちで自分たちの生活を作る、とても充実した日々を過ごしていますが、実際のところは「小忙しい」という言葉がぴったりで、日々忙殺されながらなんとか暮らしているのが正直な感想です。

生活の場としての棚田の未来

色川に移り住む決め手のひとつは、「棚田の美し

さ」にありました。休耕田も多くなっていますが、石垣を初めて見たときは本当に美しさを感じ、ちょうど旅で訪れたマチュピチュを彷彿とさせました。今ではそれ以上だと思っています。



写真5. 地元の方の稲刈りをお手伝い

その美しさの根源を考えると、先人たちが生活を営んできた地層ともいえるような「集積」にあるような気がしています(写真5)。きわめて具体的で実用的で個人的な要因。そして、今もここで糧となる米を作り続けている人がいる。現在進行形で具体的な生活の場になり得ていることは、人の心を動かす欠かせない要素ではないかと思うのです。マチュピチュは本当に綺麗な遺跡でした。しかし、現在暮らしの場になっていない遺跡からは、綺麗さ、しか感じられなかったことが体感として残っています。

色川で生活を続けていくならば、棚田の耕作は欠かせない。そう思い、15年以上棚田の保全活

動を続ける「棚田を守ろう会」という団体での米作りに年間を通じて関わり、その報酬として米をいただいています。自分が関わった田んぼから米が収穫でき、お腹を満たすことができる。この充実感は何とも言えないものがあります(写真6)。



写真6. 収穫した稲穂は、ハザがけして天日で干す

しかし、体力的にも技術的にも私ひとりでは広い面積の棚田を維持していくことはできません。現在会には20名ほどのメンバーが在籍していますが、参加するメンバーは少しずつ減っており、昔のような一面田んぼの風景を取り戻すことはなかなか難しいのが現状です(写真7)。



写真7. 保全活動のイベントでデモンストレーション的に披露される牛耕体験

「具体的な生活の場として棚田を守っていけるのか」この問題は、色川という地域がこれから先も残り続けられるのか、という問題と不可分です。そして、過疎高齢化の進行、移住者の増加数、町の状況など総合的に考えて、これから5年くらいが、かなり重要な分かれ目になる予感がしています。

実際の生活レベルから少し離れてしまっていますが、そんななか、昨年国が棚田地域振興法を制定し、指定された地域を中心に、保全活動を各省庁を超えてバックアップしていこうという動きが立ち上がりました。色川も保全を続けてきた会の活動が評価され、指定棚田地域というものに選定されています。

これからの棚田保全を考える上で必要不可欠な国のバックアップ。これは心強いと感じ、新しい

協議会作りのサポートや、各区の区長や役員が中心となった棚田の活用を話し合う場に事務局として参加しています。まだまだ、話し合いは端緒についたところではあるのですが、蓋を開けてみると、現実的に生活の場として棚田を維持する地域と、町や県、国との認識の齟齬は大きく、調整はなかなか難航しています。

具体的な「担い手不足」が深刻な地域課題なのに、国や県はその課題を解決するために、まずは様々な試行栽培や新たな協議会の設立、非常に難解な事務作業を要する補助金の申請などをしなさい、という話になる。本当に地域が必要としているのは、いままさに棚田を耕すあてになる担い手です。それすら不足しているのに、新たな仕事を増やせというのは、なかなか無茶な話です。

ソフト部分の支援の充実は訴えていくしかありませんが、担い手の確保は各地域で行っていくほかありません。わたしのように都会での暮らしに疑問を感じ、生きづらさを抱えている人は大勢いるはず。結局のところ、こうした方々にいかに情報を届け、棚田を自分の生活の場として想像できる人を増やし、具体的に動ける仲間を草の根的に増やせるか、という大変月並みな行動指針に行き当たります。例えば、福祉施設との情報共有や連携、都会の仲間たちへの情報発信、そのほか講演活動などもその具体的な活動になりそうです。

結び

『しなやかで強く暖かい「個」であるために、今一度自分自身の原点に向き合いたい』第5巻の前書きにあったこの言葉に誘われて、この寄稿文を書きました。これまで培われてきた色川の風土を少しでも受け継ぎながら、新たな風土を築いていく。紡いできた先人たちの棚田を、自分たちの代で終わらせない。そのためには、移住者、地元住民、若手も高齢者もその立場を超えて、ゆるやかに「個」が連帯し、居心地の良い生活の場を形成していくこと。私たちの住む色川だけでなく、全国の中山間地域で同じことが求められていくのだろうと思います。国や県などの大きな大義名分に踊らされることなく、生活の具体的な場所として棚田を守るために、本当に微力ですが、活動を続けていきます。

千葉 智史（ちば さとし）

アフリカの河童

4歳の息子が「妖怪」にはまっている。アニメの「妖怪ウォッチ」や「ゲゲゲの鬼太郎」がきっかけであろう。家の本棚にあった『妖怪ひみつ大百科』（村上健司、2015年）を見つけ出して、ページがボロボロになるまで読んでいる。そんな姿は、妖怪に憑かれているかのようなのだ。

私も昔から妖怪に興味があった。今の息子と同じくらいの歳に河童を見たことがあるからだ（正確には池から勢いよく出てきた何かに驚き、すぐに逃げ出したのでその姿は見ていないが…）。そこで、より専門的な『日本妖怪大全』（水木しげる、2014年）を息子に買い与えたところ、妖怪好きに拍車がかかり、暇さえあればページをめくっている。4歳児には難しい漢字があるので読み聞かせるうちに、私もあらためて妖怪の面白さに魅せられてしまった。

日本の妖怪の多様性は驚きである。『日本妖怪大全』にはなんと750以上もの妖怪が、イラストとともに500文字程度で個性豊かに紹介されている。そもそも「妖怪とは何か」について、妖怪研究の大家である小松和彦氏は、「恐怖に結びついた超越的現象・存在、それが妖怪である」（小松2015）としている。日本人が感じてきた多種多様な恐怖が、これほど多様な妖怪を生み出してきたのだ。そし

て、そのような妖怪たちが「イラスト化」されることで、われわれは妖怪についてある程度共通のイメージをもっている。

例えば「一反木綿」と聞けば、多くの人が、ひらひらと空を飛ぶつり目の白布を思い浮かべるのではなからうか。これは、水木しげるの「ゲゲゲの鬼太郎」に登場する一反木綿のイメージである。このように、漫画やアニメというマスメディアが、日本に広く共通する妖怪のイメージを生産してきた。中世後期の『百鬼夜行絵巻』、江戸時代には鳥山石燕の『図画百鬼夜行』もあり、日本では古くから妖怪がイラスト化され流通してきたのだ。とらえがたい妖怪を可視化し、認識可能なものとすることで、見えざる恐怖を克服しようとしてきたのだらう。このことが、日本に多種多様な妖怪が存在し、また、時代に応じて新たな妖怪が誕生してきた要因の一つである。

では、アフリカにはどんな妖怪がいるだろうか？ 私はタンザニア南部のイスラーム海村キルワ島で20年ほどフィールドワークをしているが、この島にはどんな妖怪がいたかなと思い返してみた。ぬり壁や座敷童子、ろくろ首といった「これぞ妖怪！」という話は聞いたことがない。しかし、キルワ島の精霊（ジニ *jini*）がそれにちかそうだ。

キルワ島のジニは、アラビア語の「ジン *jinn*」から派生した言葉である。ジンは7世紀のイスラーム成立以前からアラブ社会で崇拝されてきた霊

的存在である（アラジンと魔法のランプに登場する魔人がジンである）。一神教のイスラームでは、ジンへの信仰は異端として傍流におしやられてしまったが、古くからアラブ地域とインド洋交易で結ばれてきたタンザニアを含む東アフリカ沿岸部では、憑依をともなう「ジン」として今も信仰されている（中村 2011）。

『コーラン』には、「煙のない火」から神が創造したのがジンであると書かれている（ちなみに光から天使が、泥から人間が造られた）。したがって、日本の妖怪とは誕生が異なる。しかし、「恐怖に結びついた超越的現象・存在」としてキルワ島のジンを「妖怪的存在」と考えてもよいだろう。ジンの多くは超人的能力をもち、中には人の血を吸いつくして殺してしまう凶暴なものもいるからだ。

ジンも多様である。キルワ島で私は 22 種類のジンを確認したが、未確認のものもたくさんいるはずだ。このようなジンは大きく、海に住むイスラームで人型霊の「海のジン」、山や内陸部に住む動物霊・部族霊の「山のジン」、そしてそれらの子供である「混血のジン」の三つに分類できる（図 1）。各々が名前をもち、好きな音楽や色、服装、匂い、供物なども異なっている。ジンは、個性豊かな霊的存在としては日本の妖怪とよく似ている。しかし、不可視である点が大きく異なる。日本の妖怪のようにイラスト化されることもない。もしも鳥山石燕や水木しげるのような人がキルワ島にいて、

個性豊かなジンがイラスト化されれば面白いのだが、偶像崇拝を禁じるイスラーム社会ではそれは難しいだろう。

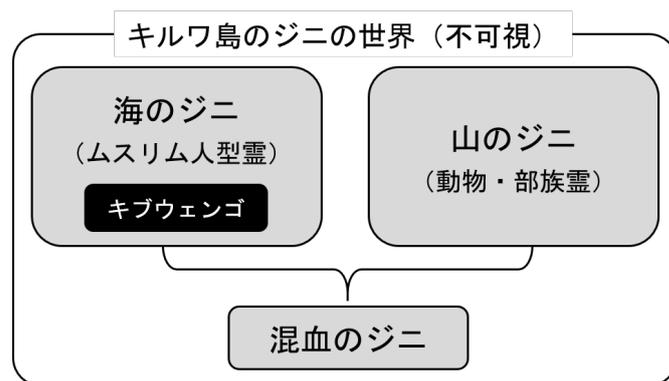


図 1. キルワ島のジンの分類

そんな中、例外として目に見えるジンがいる。それは「キブウェンゴ *kibwengo*」と呼ばれる海のジンである（図 2）。夜の海やマングローブ周辺でキブウェンゴの目撃例は多い。人びとはキブウェンゴを、具体的な特徴とともに語ってくれる。その特徴を、話に出てくる頻度の高い順にあげると、

- ①ケラケラとよく笑う
- ②手足が細長く、座ると膝頭が耳より高い位置になる
- ③指がヤットコのように二本しかなく、その指で巻貝を割って食べる
- ④目が大きい
- ⑤皮膚はしわくちゃ
- ⑥右足一本のこともある

⑦背中に袋があり中に秘薬や財宝が入っている

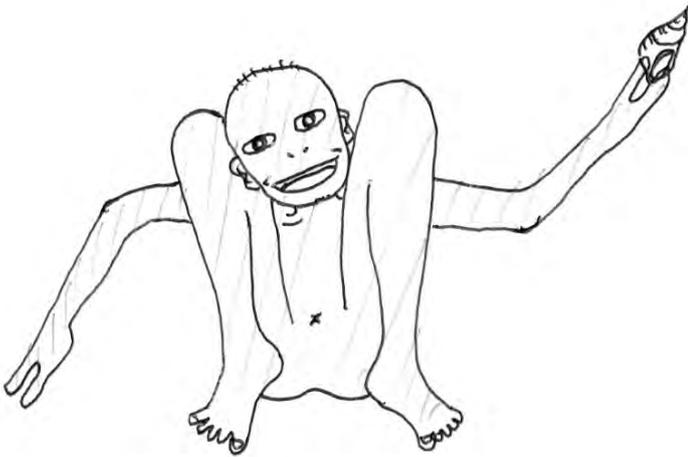


図2. 複数の証言をもとに再現したキブウェンゴ
(2004年の調査ノートより)

これらのうち、①②③が頻繁にあげられる特徴である。キブウェンゴはキルワ島だけの存在ではない。私は、キルワ島を含むタンザニアの沿岸部（タンガ州、ザンジバル島、リンディ州、ムトゥワラ州）とケニア北部のラム島・バテ島にもキブウェンゴがいることを確認した。どの地域でも「キブウェンゴ」といえばたいてい①②③の特徴があげられる。その他に共通するのはキブウェンゴの両義的性格である。いたずら好きなキブウェンゴは、夜に小舟で漁をする漁師を遭難させてしまう悪い側面をもつ一方で、「魚の守り人 *mchungaji wa samaki*」として大漁をもたらす水神的な側面ももっている。

こういったキブウェンゴについては、10年以上

前に調査していたので、最近では忘れてしまっていた。しかし、息子のために買った『日本妖怪大全』が、久しぶりにキブウェンゴを思い出すきっかけとなった。「ガラッパ」のページを読んだときである。そこには、「ガラッパというのは、奄美大島とかトカラ列島といった南の島にすむ河童の一種で、体が細くて手足が長く、座ると膝頭が頭より高くなるという足長河童である。」（水木 2014: 220）と書かれていた。

なんとガラッパは、キブウェンゴの②とほぼ同じ身体特徴をもつ河童であった。実は私は、キブウェンゴの調査中に、「座ると膝頭が耳より高い位置になる」という説明がどうも解せなかった。そういった体形については想像つく。足が極端に長いということだろう。しかしなぜ、「足が長い」ではなく、多くの人が「座ると膝頭が耳より高い位置になる」と説明するのかが不可解だった。「指が二本しかない」や「背中に袋がある」ではなく、「座ると膝頭が耳より高い位置になる」がキブウェンゴの代名詞のように語られるのである。

ガラッパも同様に、『日本妖怪大全』でも『妖怪ひみつ大百科』でも、「座ると膝頭が頭より高い位置になる」ことが身体特徴の代表としてあげられている。ひょっとしたら私が気づかないだけで、「座ると膝頭が耳（もしくは頭）より高い位置になる」という言説には、現地の文脈において何か大切な意味が隠されているのかもしれない。

それにしても、キブウェンゴとガラッパには、身体的特徴以外にも似ているところが多い。両者はどちらも南の島に住む「妖怪」である。ガラッパも、いたずら好きだが「友達になると魚が良く釣れる」(水木 2014: 220) という両義的な性格をもっている。また、キブウェンゴは人に憑依するが、ガラッパも人に憑くことがあるようだ。今はまだ、地理的にも文化的にも遠く離れたタンザニアのキブウェンゴと日本のガラッパの共通点を発見したことを単純に喜んでいるだけだが、将来的には、海辺に住む妖怪的存在の比較研究もあり得るかもしれない。

ふとしたことからキブウェンゴとガラッパの共通点を知ったことで、私の「河童熱」がふたたび盛りあがってきた。それは、子どもの頃に見た(と信じている)河童に、40年ぶりに邂逅したかのようである。河童との浅からぬ縁を感じつつ、次回のキルワ島訪問では、「アフリカの河童」ともいえるキブウェンゴについてじっくりと話を聞いてみたいと思う。

中村 亮 (なかむら りょう)

参考文献

- 小松和彦 2015 『妖怪学新考』 講談社学術文庫。
中村亮 2011 「スワヒリ海村社会のジニ信仰：キルワ島の場合」 嶋田義仁編 『シャーマニズムの諸相』 勉誠出版、pp. 168-192。
村上健司 2015 『妖怪ひみつ大百科』 永岡書店。
水木しげる 2014 『決定版 日本妖怪大全』 講談社文庫。

インド(人)の”魅力”～南インド のとある村にて～

私は、半乾燥熱帯地域の南インドで、貧栄養な土壌の肥沃度を向上させるための研究を行っています。初めてインドに行ったのは、学部4年時の2016年、卒業論文の調査でした。その後も縁あって、修士・博士課程の研究でも同じ調査地の畑で作物の栽培試験を継続させてもらったため、3年間で短期・長期滞在含み計9回ほど調査でインドに行っていることとなります。「よく行くね」と多くの人に言われます。もちろん、土壌の調査で行っているため、本来私自身の好き嫌いは関係ないはずですが、振り返ってみるとやはり私自身インドという国や人に“魅せられて”研究を続けている部分もある気がします。ここでは、私が思う「インド(人)の面白さ」について、研究と日常生活を通して感じたことを書きたいと思います。といっても、インドには多様な宗教・言語・文化があり、貧富の差も大きく、「インド」と一言でまとめるわけにはいきません。私がここで話すのはあくまで、栽培試験で滞在した、南インドのタミルナドゥ州・マドゥライという都市から車で1時間ほど離れたとある村とそこに住む人々についての話です。

生活に密着したヒンドゥー教とその“寛大さ”?

インド人の8割はヒンドゥー教を信仰していて、1割強はイスラム教、残りの人はキリスト教、シク教、仏教、ジャイナ教、と続きます。南インド・タミルナドゥ州の場合、インドの平均と比べて、ヒンドゥー教の割合が増える一方、イスラム教の割合が減ります。イスラム教信者はある決まった場所に住んでいることが多く、私の滞在した村では村人の多くがヒンドゥー教を信仰していました。そのため、私は村人との交流を通し、ヒンドゥー教が生活と密着している様を度々感じました。

まず、一日はお祈りから始まります。村にある小さなお寺にお祈りに来る人、家で神棚に向かってお祈りをする人、あるいはしない人、信仰の度合いによって人それぞれですが、毎朝いろいろなところでお祈りをしている人を見かけます。そして家の玄関の前にヒンドゥー教の「コーラム」を描きます。コーラムとは家庭の繁栄・魔除けを目的としたヒンドゥー教のおまじないのようなもので、「今日1日が良い日になりますように」との願いを込めて描いているそうです。これは女性の朝の日課で、基本的には毎日違う模様を描きます。模様は写真1のような幾何学模様で、ヒンドゥー教のお祭りがあるときや祝日には色をカラフルに使って豪華に描かれることが多いです(写真2)。滞在先のお母さん(70歳)が、どんなに疲れた日の翌朝もコーラムを描いてその日の幸福を静かに

祈っている姿は、日本で毎朝ばたばたと家を出る私には考えさせられるものでした。



写真1. ヒンドゥー教のコーラムは模様と色の種類が無限にありきれい



写真2. お祭りのときには豪華なコーラムがよく見られる

私が村人との交流を通して一番驚いたことは、ヒンドゥー教の行事の多さです。11月の新年を祝う祭り（ディーワーリ）や、1月の収穫祭（ボンガル）は有名です。しかしそれ以外にも、たくさん

のお祝いやお祈りが行われていました。自分の使っている物に感謝する日には、冷蔵庫やテレビに始まり、携帯・トイレの壁・ノートに至るたくさんの物にお祈りの粉をつけて感謝をします。部屋の角や階段に小さなろうそくを灯し、良いことを呼び込む日もあります。ろうそくの明かりが幸運を招くとされているからです。夕方薄暗くなって、各家にたくさんの小さなろうそくが灯されている様子は、とてもきれいなものでした。自分の誕生日は盛大には祝いませんが、神様の誕生日にはお祝いをします。村に新しい寺院ができれば、その寺院がどんなに小さくてもお祝いをするし、その寺院ができた48日後にも特別にマトンなどを食べ豪華にお祝いをします（写真3）。



写真3. お祝いの時は村人がお寺に集まり無料で豪華な食事を食べる

12月になると毎朝5時頃、とても音の大きな音

楽で起こされると思ったら、12月から1月はお祈りの期間だから村では毎朝ヒンドゥー教の音楽が流れるとの話でした。この期間、信仰の強い人は不殺生を守り、お肉やお魚をいっさい食べません。そればかりか、朝から晩までサンダルを履かずに裸足で過ごし、自分の信仰する神様の祀られている寺院へ何時間も歩いてお祈りにいきます。ヒンドゥー教では、お寺でお祈りをするときに裸足になる必要があるからです。子供たちは、朝まだ日が昇り始めていないうちに、お寺に祀られている神様に水をかけ掃除をします。このように、滞在している期間だけでも月に1回以上はヒンドゥー教に関するお祭りがありました。その度に、子供たちは楽しそうに、大人もどこか嬉しそうに、また、何か気持ちを噛みしめているかのように、お祈りをします（写真4）。



写真4. お寺で神様のまわりに集まりお祈りをする村人

生活の様々な部分がヒンドゥー教とつながり、あるいはヒンドゥー教に影響を受け、「お祈りをする」と「生活（生きる）」を支えていると感じる場面がとて多かった。この地域では、農業が生活の中心を担っていますが、半乾燥地に属するため毎年の降水量の変動が大きく、安定して食べるものを確保することが難しいです。水不足で生活用水が十分に得られないこともあります。生活が貧しく、テレビも冷蔵庫もない家庭もあります。そのような厳しい環境で、「祈る」という行為がいかに重要か、村人の生活を支えているかを考えさせられました。

最後に、私が意外だと思ったことはヒンドゥー教の「寛大さ」です。村でもヒンドゥー教とキリスト教を信仰している人がいたり、ヒンドゥー教徒でない私が寺院にお参りに行ったときに何の問題もなく歓迎してくれたり、信仰する神様が家族内で異なっていたり、信仰心の強さも家族内であればらだったり。この多様さ・それを許容する寛大さこそが多神教の「ヒンドゥー教」であると、とても興味深く思いました。

人付き合いの濃さと距離の近さ

調査地の村に滞在し数週間が経つと、栽培試験の作業や日々の生活を通して、人付き合いの濃さや距離の近さを感じるようになりました。

栽培試験では、耕耘や播種・収穫などの作業をレイバー（日本語名称は労働者）に手伝ってもらうのですが、彼らのフレンドリーさにまず驚きました。レイバーとは、日給をもらって仕事を行う日雇い労働者のことで、日々様々な種類の仕事をしてお金を稼いでいます。滞在した村では、男性で1日200～300ルピー（日本円で300～450円くらい）、女性で150～200ルピーの少ない給料が定められていました。最初の作業から、彼らは初対面とは思えないほどのフレンドリーさで話しかけてきてくれました。休憩中でも作業中でも構わず、家族のことや日本のことについて質問をします。自分の家族のことや周りの村人のことも、こちらが何も聞かなかったとしても話してくれます。村であるため各家庭間の距離感はとても近く、相手の家族についてもよく知っているということ、また、いろんな情報があつという間に村人に知れ渡ることがすぐに分かりました。想像通り、私の話したことや行動などが、その日のうちに村人に知れ渡ることもよくありました。最初は困惑したし、プライベート空間がほしいと思いましたが、徐々にその距離感の近さが面白くもなっていました。栽培試験を始めて2年目・3年目と月日が経っても、レイバーはとてもよく話しかけてきてくれました。次の作業の日程や作物の生育の様子を聞いてくれたり、雨の降り方について教えてくれたり、とにかく面倒見が良いのです（写真5、

6）。また、村の人はすぐに家族の輪に入れてくれます。滞在して間もない頃から、「家族に会いにおいで」、「家に遊びにおいで」と初対面の村人が声をかけてくれ、どこまで本気か分からないようなフレンドリーさで距離感を縮めてきます。滞在先の家では、滞在し始めて2週間も経たないうちに生後すぐの赤ちゃんに会いに連れて行ってくれたり、親戚の結婚式に参加させてくれたりしました。



写真5. 毎年耕耘を手伝ってくれるレイバー
（日中は暑いので木の陰で休憩している）



写真6. 手際よく播種を手伝ってくれているレイバー

村の人はとてもフレンドリーで、まるで人見知りという概念がないかのように、子供も大人も関係なく話しかけてきます（写真7、8）。



写真7. 村の子供たちはとてもフレンドリー



写真8. 学校帰りの子供たち（カメラを向けるとポーズをとってくれる）

言語が通じなくても関係ありません。何度も同じ単語を使って話しかけてくれるため、おかげで生活を通して現地の言葉（タミル語）の意味を覚えることができました。

さらに印象的だったことは、私がデング熱にかかり入院した際、村でお世話してくれたお姉さんとお兄さんが泊まり込みで面倒を見てくれたこと、また、インド人の共同研究者の兄弟家族が日替わりで会いに来てくれたことです。

これは、共同研究者である Jegadeesan 博士のあたたかい人柄ゆえだと思いますが、それでも、研究で一時滞在している自分のためにそこまで親身になってくれることに感激すると同時に、正直驚き、戸惑いもしました（写真9）。実際入院していた際は全く余裕がなかったため、親身になってくれればくれるほど調子が戻らない自分と葛藤し、絶不調の時に慣れていない言語で不調の程度を伝える難しさを痛感していました。しかし後になって思い返すとやはり、そこまで親身になってくれたことに感謝すると同時に、それはインド人特有の人付き合いの濃さや、時に日本人が「おせっかい」だと感じるほどの優しさがもたらしたことなのだと思います。



写真9. 共同研究者と親戚の子供たち

“No problem”精神がもたらす極端さ

インド人がよく「No problem」という言葉を使うことは日本でもお馴染みだと思います。では実際はどうでしょうか。私が短期・長期滞在をした総括として言えることは「とてもよく使われている」ということです。正直、慣れるまではこの言葉を聞くたびに苛立ちを覚えてしまったことも多いです。というのも、私たち(少なくとも私)が考える「No problem」以上の範囲を彼らは「No problem」と笑って言うからです。例えば、除草作業を行うと約束した朝、手伝ってくれるレイバーが誰も畑に来なかったため帰ってから理由を聞いたところ、返事は「No problem」。「今日できなくても明日やればいいでしょ。今日は突然別の仕事が入ったから…」とのことでした。栽培試験を行った最初の年、穀実の大部分が鳥害に遭い、収穫できずに落ち込んでいたときも、「No problem」と言われました。「そういう年もあるよ、今年収穫が少なくても仕方ないよ」と慰めてくれたのだと思います。日本と連絡をとるために必要なSIMカードのリチャージをしてくれる約束だったのになかなかしてくれなかったため怒り気味で催促したときも、返事は「No problem」。リチャージとは、電波が繋がるようにカードを使用可能にすることで、日本人がインド国内で行うのはほぼ不可能なので、あらかじめ頼んでおいたのです。空港で荷物が出

でなくてロストバゲージした時も、係員に言われたのは「No problem」でした。私にとっては「problem以外の何物でもないのに！」と叫びたいときでも、インドの人はよく「No problem」と言います。もちろん、あまりにもポジティブに聞こえるその口癖に最初はとても困惑しました。しかし、何度も聞いているうちに「確かに何とかなるな」と思えるようになってきて、私自身が彼らに「No problem」と言うように(時々ですが)なりました。さらに、彼らにとっての「No problem」が私の考えるものとは全く違うということにも気が付きました。彼らは、「これから何とかすること」「何とかなるか分からないけれど、何とかなるかもしれないこと」全てに、「No problem」と言います。そして、その精神ゆえに多方面で極端な出来事を起こしながらも、インド人特有の創意工夫をしてなんだかんだやってのけているのです。

「No problem」という言葉自体は、あまりにも多用されすぎて聞いた時に困惑するのですが、その裏にある「何とかなる」「何とかする」という精神と、その精神ゆえに成し遂げてきたことを考えると、これこそがインド人の面白さだと思います。

伝えたいこと

生活に密着したヒンドゥー教とその「寛大さ」、人付き合いの濃さ、「No problem」精神のもたらす

極端さ。一見ばらばらに見えますが、その全てがインド(人)の「面白さ」だと思います。何でもありで、距離の近さに辟易することもあるくらい優しく、「No problem」と言って笑いながら想像できないようなことも成し遂げる。ここでは思い切った項目分けしてまとめてみましたが、このまとめきれない感じ・無茶苦茶で繋がらないような感じこそが、あまりにも多様で濃くて極端な「インド」という国なのではないか、と私は思います。

ただ、私がここで紹介したのは、ごく僅かな部分です。冒頭でも述べましたが、研究で滞在した、タミルナードゥ州マドゥライという市にある一村で経験し、感じた話です。共同研究者の親御さんの家というありがたい環境にいたからこそ、感じることができた部分もあります(写真10)。



写真10. 滞在先でとてもお世話になったお父さんとお母さん

というのも、本当は、このようにしてまとめて語るにはインドはあまりにも広く複雑すぎるのです。宗教・言語・女性に関する問題は数えあげるときりがありません。人口増加と都市部の経済発展が進む一方で、農村部の水不足や困窮、食料不足は未だに顕著で、貧富の差は拡大するばかりです。ですが、それだけではないのです。テレビやネットで語られていることとは別で、その土地で思い、工夫し、生きている人々がいて、そのことはやはりその場所に行って初めて感じるができると思います。私は、研究を通して限定的ではありますがインドの人々と接し、ありえないと思うこと・計画通りにいかないこともたくさん経験した上で彼らを「面白い」と思いました。

もちろん感じ方・考え方は人それぞれですが、現地での研究と日常生活を通してみてきたインド(人)の「面白さ」が少しでも伝われば幸いです。

関 真由子(せき まゆこ)

フィールドの「余白」にあるもの

学術研究のフォーマットからこぼれ落ちる「余白」的なもの

僕は近年、「暮らしのモンタージュ」というプロジェクト¹で、様々な研究者のフィールド調査の過程を映像や写真で記録している。アフリカ、アジア、日本各地など、訪れる場所は多いが、それぞれの調査地を訪れる回数は少なく、数回フィールド調査を記録したくらいでは、個々の研究者の研究内容を深く理解することは難しい。

けれども、僕が同行した多くの研究者たちのあいだでひとつだけ共有されていたことがある。それは、研究に直接関係していなくとも、フィールドには豊かな出会いや出来事が溢れていて、そういった出会いや出来事における気づきや閃きの多くは論文を中心とした研究成果では殆どこぼれ落ちてしまい、共有することができない。しかし、そのこぼれ落ちるものの中には、研究を深めるための潜在的な可能性を秘めているものがあるのではないか、ということである。

もちろん、今日の映像人類学の動向などを鑑みても分かるように、すべての研究成果が「論文」



写真1. ケニアのオルカリアで水浴びから戻る農学者の田中樹さんたち

¹ 「暮らしのモンタージュ」は、一般社団法人リビング・モンタージュが主催するプロジェクトである。様々な研究者のフィールド調査の過程を映像や写真で記録し、研究者とアーティストなどの異なる文化・専門性の相互触媒的な再編を誘いなが

ら、暮らしの中で見出すことのできる「余白」を共有する「場」を創出するために、さまざまな取組みを実践している。
公式ウェブサイト：<https://livingmontage.com/>

というフォーマットに集約されるものではない。しかし少なくとも、僕が同行した研究者たちは、彼ら／彼女らの学術研究のフォーマットからはこぼれ落ちてしまう「余白」的なものへの関心がある。だからこそ、まったくの門外漢であるにも関わらず、僕のような映像作家が調査に関わることができたのである。

置き換えることのできない撮影体験

研究者にとって「余白」にあるものへの関心が高まっているが、僕にとっては、そのフィールドでの「余白」＝フィールドでの撮影体験は、僕の人生の方向性を大きく左右するほどに豊かな可能性を秘めているように思われた。だから僕は、フィールドにおける学術研究のプロセスからこぼれ落ちていく何かを、むしろ中心的なものとして扱うことができるような方法はないだろうかと思案し、具体的な実践へと活動の幅を広げていくことになる。

最初のケニア訪問からして既に、フィールドでの撮影体験は「余白」や「中心」といったものを越えた置き換えられない大切なものとなっている。今回は、その最初のケニア訪問での出来事を綴りたいと思う。この置き換えることのできない撮影体験を他者と共有するために、フィールドでの「余白」を中心化するための映像メディアの活用方法の探求が、ますます僕の関心の中心に存在するようになっていった。

初めての 아프리카、ケニアのオルカリア

² 「砂漠化をめぐる風と人と土」は、準備段階を含めると2010年～2017年まで足掛け8年間にわたって展開された地球研の研究プロジェクトで、資源・生態環境の荒廃と貧困問題が複雑に絡み合う砂漠化の最前線と言われるアフリカやアジアの半乾燥地を対象地としている。地域の風土への理解を深めながら、現

僕にとって最初の大きな経験は、「アフリカ」を知ったことであった。農学者の田中樹さんと初めて訪れたケニアは、滞在期間が5日間程度ととても短い撮影ではあったが、今にいたるまで何度も僕の頭の中に訪問当時の様子が思い出される。

僕がケニアを訪れたのは2016年10月であった。若い頃からアジアやアフリカなどで研究・調査を行ってきた研究者とは違って、僕は初アフリカ渡航の数年前まではアフリカを訪れることなど考えたことすらなかったが、田中さんに導かれてケニアの首都ナイロビの北西約100kmに位置するオルカリア近辺を訪問した。ケニア渡航の主な目的は、総合地球環境学研究所(地球研)のプロジェクト「砂漠化をめぐる風と人と土」²の活動を映像で記録することであった。



写真2. 田中さんとマサイのジェレミーさん

オルカリアでは最初に、同地で調査を行っていた文化人類学者のペノワ・アザールさん、日本学術振興会ナイロビ研究連絡センターの溝口大助さんから数名の研究者たちとマサイの集落を訪問した。

地の人々ともに、暮らしの安定や生計の向上につながり、同時に環境保全や砂漠化抑制が可能となるようなアプローチを探っていた。その基本的な発想は、砂漠化に対処するためには、「ヒトVS自然」ではなく「ヒトも自然も」という発想の転換にある。

真っ赤な布を身体に巻き付けた集落の家長であるジェレミー・サイタバウ・タニンさんは、昔ながらの牧畜をしつつ、農業や観光にまつわる仕事も生業としていた(写真2)。

都市部で暮らすマサイが観光客相手に商売するという構図は、テレビやネットで見ることができるが、ここはジェレミーさんの集落以外、360度見渡す限り遮るものもない大平原である。僕が直接聞いた限りだと、実際は「観光」という単語を使ってはいなかったのだが、ジェレミーさんは、僕が彼の集落を訪れた際に、ヨーロッパから訪れた友人を案内しなければならないと忙しそうにしていた。ヨーロッパからこんな僻地に観光気分て人が訪れる時代になっていたことに大変驚かされたのを思い出す(写真3)。

牛糞でできた家屋とスマートフォン

ジェレミーさんの集落では、周囲に遮るものが何もないので、夜になると広大な宇宙を感じる丸い星空に包まれることになった。僕の感動が筆舌に尽くしがたかったことは想像に難くないと思うが、このとき満天の星空の下、ジェレミーさんの息子と雑談する機会があった。ジェレミーさんの民族衣装とは対照的に、彼はジーンズにTシャツといった洋服を来ており、手にしていた最新のスマートフォンでいくつか写真を見せてくれた。

光に包まれた暗闇の中で、牛糞で建てられた家屋の前にスマートフォン(スマホ)の画面をスワイプする彼のこなれた指先を目の当たりにしたとき、その指先の動きが僕の常識を軽々と逆する出来事のように感じられて、僕は苦笑しながら「綺麗な写真だね」などと答えるしか仕様がなかった。



写真3. ジェレミーさんの集落

澁澤龍彦(1928-1987)の小説『高丘親王航海記』(1987)の中で、天竺を目指す高丘親王(799-865?)が旅の道中で大蟻食いに会おう場面がある。ここで澁澤は、高丘親王と同行していた儒良じゆこんに「大蟻食いという生きものは、いまから約600年後、コロンブス船が行きついた新大陸とやらで初めて発見されるべきものです。そんな生きものが、どうして現在ここにいるのですか。」と語らせている。スマートフォンは、近代化の進んだ都会で使用されるべきものである。電気も通わぬ牛糞の家屋に暮らす青年が、どうして最新のスマートフォンを流暢に操っているのか。僕の心境は、まさに儒良と同じであった。

インスタ映えしそうな成人儀礼の聖地

このときマサイの青年が最新のスマホで見せて

くれたのは、成人儀礼のための聖地の写真であった。まんまるに広がる満点の星空の下での最新のスマホというコントラストが記憶に強く残っていることは先に述べた通りだが、青年が見せてくれた聖地の写真が僕の複雑な驚きを増幅させていた。その理由は、同じ日の日中に、まさにその聖地を目指して田中さんらと一緒に出かけていたからである。

ジェレミーさんの案内でサバンナの平野をしばらく歩いて行くと、火山でできた巨大なクレーターが目の前に広がった。クレーターの真ん中の島の部分がどうやら目的地のようだった。その目的地に至る道と言えるようなものはなく、岩石のあいだを縫うようにクレーターの溝の底部分まで下ることになった。しかしながら、片道2時間半程



写真4. 成人儀礼の聖地を目指す一行

で目的の聖地に到着するだろうというジェレミーさんの言葉とは裏腹に、4時間たってもまだ片道の半分も進まない(写真4)。

殆どロッククライミング状態の中、僕は重い撮影機材を抱えて、ジェレミーさんらにどうにかくっついて撮影を試みていた。しかし情けないことではあるが、研究者の皆さんは余裕豊饒と目的地へと歩みを進めていたのに、僕がリタイア第一号となってしまったのである。仕方がなく、ジェレミーさんに機材バックを背負ってもらい、撮影もままならぬままヨロヨロと途中で引き返すことになった。

最短ルートで戻るために、ジェレミーさんは刀を振り下ろしながら枝を刈り、道を切り開きながら引き返す。その頼もしい背中を朧気に追いながら、己の体力不足を心の底から反省したことが思い出される。

ちょっと判断を間違えば、水も食料もなく、一晚クレーターの溝の底で過ごすことにもなりかねないような過酷な道程を、マサイの青年は、まるで近所の観光地に散歩に出かけるかのように訪れ、インスタ映えしそうな写真をスマホで撮影して暮らしを彩っているのだ。満点の星空の下での僕のアナクロニスティックな感動が、なんとも形容しがたい複雑な驚きを伴っていたことは、想像に難くないだろう。

自分の外側のフレームを壊す サバンナの水浴び

汗だくになり息を切らしながら、どうにかジェレミーさんの集落まで戻ることができたのだが、彼の集落には電気も下水道も整備されていなかっ

た。ゆえに、風呂もなかった。ケニアでは数日間風呂に入っていなかったので、水浴びをするため、水場まで歩いて行くことになった(写真1)。

何もないサバンナの平原を30分か40分程は歩いただろうか。ようやく水場に到着したが、そこは元々、地熱による水蒸気が湧き上がっていた場所であった。オルカリアには、いくつもの火口からなる火山体があるため、このエリア近辺にはたくさん水蒸気の噴出口があり、その水場はそのひとつであった。ジェレミーさんたちは、噴出口に金属パイプを差し込み、水蒸気を冷やして水を作っていた。その水を飲み水や水浴びなどの生活用水として利用しているのである(写真5)。

ただ「水浴びする」というだけで、こんなにもその「水浴びする」という行為に至るプロセスが都会的な暮らしと異なるものなのか。「暑い日差しを浴びながら、サバンナを30分近く歩く」とこと、ただ「水浴びする」ということが、意味の上ではどう考えても結びつかない。しかしながら、自分の常識的な感覚だと目的のために必要な手段がどこかで捻れて引き伸ばされているような状況が、



写真5. 水場のジェレミーさん

実際に目の前で当たり前展開されているのを見ると、自分自身を形作っている外側のフレームみたいなものまでが壊されるようで、とてもワクワクしたものである。

澤崎 賢一(さわざき けんいち)

半農半漁のシジミ汁

ジャガイモ入りシジミ汁

調査地で出会う「食」は、フィールドワークの楽しみの一つである。地域の「食」には、その地域の人々の生活を支えてきた郷土料理もあれば、地域を盛り上げるために押し出されているB級グルメもある。これらはどれも素晴らしい「食」だが、地理学者である私が最も惹かれるものは、地域の環境と人々の営みの関係を感じることができる「食」である。これまでに私が出会ってきた「食」のなかで、今回は青森県東北町で食べられている「ジャガイモ入りシジミ汁(写真1)」を紹介しよう。



写真1. シジミ汁とゴリの飯寿司

青森県東部に位置している東北町には、東北新幹線の七戸十和田駅で下車し、レンタカーを使えば、約15分で行くことができる。東北町の低地は七戸川や砂土路川^{さどろがわ}といった河川沿いに限られ、町の大部分は八甲田連峰から続く丘陵地と台地である。また、東北町には夏にやませが吹く。そのため、稲作に適しているとは言えず、丘陵地や台地では長芋やニンニク、ゴボウが栽培されている。



写真2. 小川原湖

東北町を流れる河川は、東端に位置する小川原湖(写真2)に流れ込む。一方で、潮が満ちると太平洋から海水が流出河川である高瀬川を逆流し、小川原湖は汽水となる。こういった環境から、小川原湖ではシジミやウグイ、ウナギ、ワカサギなど様々な水産物が水揚げされ、地域住民からは「^{たからこ}宝湖」と呼ばれている。

小川原湖のシジミ漁

ここからは小川原湖でシジミ漁を営む蛸名郁子さんへのインタビューから、シジミ漁の歴史や方法、ジャガイモ入りのシジミ汁が地域の食文化として活用されるようになった経緯を紹介しよう。



写真3. 鋤簾を使ったシジミ漁

蛸名さんが旦那さんとシジミ漁を始めたのは1983年である。それ以前は、東北町では地域コミュニティのなかでシジミ漁を行う漁業者が選ばれ、38戸だけがシジミ漁を行っていた。当時のシジミは、現在と比べて商品価値が低かった。しかし、シジミを取り扱う業者が訪れるようになると、東北町では「シジミ御殿」が建つようになった。漁業者それぞれがシジミ漁を行っていたため、蛸名さんがシジミ漁を始めた際、周囲の漁業者から技術や漁具について教えてはもらえなかった。こう

いった状況が変わったのは、小川原湖漁協で卸売魚市場や水産物荷捌施設の供用が始まってからである。漁協単位でシジミが取り扱われるようになると、組合員間で技術が共有され、鋤簾（^{じょれん}写真3）や通し籠などの漁具も共通したものとなった。また、シジミという資源を守るために、漁の制限も行われるようになった。この制限は当初、シジミ漁の実施日を制限するという形で行われた。しかし、1日に100kgも採る漁業者がいたため、量での制限に変更された。現在は1日に38kgがシジミを採取してよい量の上限である。

現在、小川原湖漁協ではシジミ漁をしてよい時間帯が設定されており、4～11月が7時から12時まで、12～3月が7時30分から12時30分までの間となっている。しかし、シジミの選別に多くの時間がかかるため、ほとんどの漁業者は漁を行なってよい5時間のうち3～4時間だけ漁を行う。また、小川原湖では漁業者ごとに漁場は設定されていない。そのため、7時になると漁業者は一斉に船のエンジンをかけ、我先に漁場へと向かう。漁場に着くと、漁業者は船の錨を下ろし、漁協に届け出た鋤簾の使用者がシジミを採取する。小川原湖では船の動力を使用して鋤簾を引くことが禁止されており、鋤簾の採貝作業は重労働である。特に冬になるとシジミが湖底深くに潜るため、一層大変な作業となる。

シジミを採取したら、次は選別作業である。ま

ずは洗い籠を使用してシジミを洗浄し、その後に通し籠でシジミを大きさによって選別する。そして、選別したシジミを、水を張った籠に入れ、ゴミや中身の入っていない貝を取り除く。当然ながらシジミは殻に包まれているため、見た目では中身が入っているかはわからない。そこで、いくつかのシジミを両手ですくって振り、シジミ同士が当たる音で判断する（写真4）。



写真4. 空のシジミの判別

蛭名さんは、「中身が入っていない貝が混ざっていると音が違うため、すぐにわかる」と言う。そこで筆者も試しにやらせてもらったが、まったく聞き分けることができなかった。実際に蛭名さんが音を聞いて選んだ、中身が入っていない貝を床に落としてみた。するとどの貝も殻が開き、見事に中身が入っていない。漁協にはシジミを約10kgのネットに入れて出荷する。このなかに中身が入っていない貝が3個以上含まれていると、漁協から

注意され、選別に関して指導を受けなければならない。そのため、選別作業は念入りに行われ、蛭名さんは小屋に戻った後に、もう一度選別作業を行っている。2度目の選別作業が終わると、13時30分までにシジミを漁協に持って行き、14時からシジミの競り（写真5）が始まる。



写真5. シジミの競り

半農半漁のメリット

このように東北町でのシジミ漁は朝から昼過ぎまでの仕事である。そのため、蛭名さんはじめ多くの漁業者は、午後に農作業を行う。多くの漁業者と書いたのは、254名が所属する小川原湖協シジミ生産部会のうち、専業である漁業者はわずか2名であり、ほとんどは農業との兼業漁業者だからである。

東北町において、いわゆる半農半漁が一般的で

ある背景には、二つの理由がある。その一つ目が、後継者の確保である。シジミの価格は、商品価値が低かったころは1kgあたり100円程度であった。しかし、現在では1kgあたり1,000円ほどで取り引きされている。価格は上がったものの、シジミの採取量は1日あたり38kgに制限されている。さらに冬は1日に10kgほどしか採取することができない。そのため、技術を次世代に継承する間、シジミ漁だけでは2世帯の家計を維持することができず、多くの漁業者は長芋やニンニクなどの農業収入で、後継者を養う。

こうしてみると「シジミ漁をやらず、農業に専念した方がよいのでは？」と考えた方もいるのではないだろうか。しかし、東北町の漁業者にはシジミ漁を継続するメリットがある。長芋とニンニク（写真6）が農業の中心である東北町では、ニンニクの収穫期となる5月下旬から6月、ニンニクの植え付けと長芋の収穫が連続する10月中旬から11月が農繁期となる。これらの時期は梅雨、秋雨の最中であるため、荒天によってしばしば農作業ができなくなる。こうした荒天のなかでも、長靴のような形をしている小川原湖には、風を避けられる漁場があり、シジミ漁を行うことができる。また、農閑期の冬になっても、採取量は減るが、シジミ漁は行われる。つまり、シジミ漁は荒天時や農閑期の重要な収入源となっているのである。



写真6. ニンニクの植え付け

思い出された郷土料理

半農半漁で営まれている東北町のシジミ漁を代表する郷土料理が「ジャガイモ入りシジミ汁」なのだ。そして、この一郷土料理を、町を代表する食文化にまで押し上げた立役者の一人が蛭名さんである。蛭名さんが生まれ育った三沢市のお宅には、夏になると六ヶ所村の漁業者から高瀬川で採れたシジミが届く。シジミが届けられると、炊事を担当していた蛭名さんは大きな鍋でシジミ汁を作った。この時のシジミ汁は塩味であり、ジャガイモは入っていなかった。その後、結婚して東北町に移り住み、漁協の女性部に所属した蛭名さんのもとの、湖水祭りでシジミ汁を振る舞ってほしいという依頼があった。このシジミ汁の振る舞いは10時からのスタートであった。きっと小腹を空かせた人が多くいるだろうと思った蛭名さんは、

なんとかお腹にたまるシジミ汁にできないかと考えていたところ、幼少期にシジミを届けてくれた漁業者から、六ヶ所村ではシジミ汁にジャガイモを入れると聞いたことを思い出した。そこで振る舞いのシジミ汁にジャガイモを入れたところ好評であり、女性部のメンバーを中心にジャガイモ入りのシジミ汁が広まっていった。すると東北町の人の中に、昔は東北町でもシジミ汁にジャガイモを入れていたと思い出した人がおり、ジャガイモ入りのシジミ汁は東北町を代表する食として定着し、県内外の物産展で振舞われるようになっていったのである。

シジミの風味を楽しむコツ

こうしたストーリーを持つジャガイモ入りシジミ汁の作り方は非常にシンプルである。シジミとジャガイモと一緒に煮て、味噌を溶かすだけだ。しかし、そこにはシジミを美味しく食べるための工夫が盛り込まれている。工夫の一つ目は、シジミをネットに入れたままジャガイモと一緒に火にかけ（写真7）、シジミが開いたら一度取り出し、ジャガイモに火が通ったタイミングでネットから取り出して鍋に戻すことである。この工夫によってシジミには火が通り過ぎず、ふっくらとした身を食べることができる。工夫の二つ目は、塩を入れてシジミとジャガイモを煮て、味噌は風味付け

程度に使うことである。これによって、シジミの風味を存分に楽しむことができる。また、香りの強いネギを入れないこともシジミの風味を活かすポイントと、蛭名さんは教えてくれた。



写真7. ネットに入れたシジミの調理

蛭名さんはじめ小川原湖漁協女性部の方々は、「田舎だからシジミ汁にジャガイモを入れたのだろう」と話してくれた。東北町や六ヶ所村はやませが吹く冷涼な土地であり、稲作に不向きな農地が多い。また、農村故に子どもが多かった。「ジャガイモを入れたシジミ汁で子どもたちにお腹いっぱいになって欲しかったんだろうね」と蛭名さんは言う。東北町のシジミ汁は、自然環境と人々の工夫によって育まれた、まさしく風土の味なのである。ぜひ皆さんもシジミ汁を作る際は、ジャガイモを入れてみてほしい。そのときはシジミをたくさん、そしてできれば小川原湖のシジミを使っ

ていただければ、きっと風味豊かで、お腹いっぱいになるシジミ汁ができあがるはずである。

庄子 元（しょうじげん）

木は植えるべきだったのか

アフリカの小さな漁村でマングローブの植林をすることになりました。村の女性たちが手伝ってくれることになったのですが、同じ村の男性漁師たちがマングローブは漁のじゃまになると反対しはじめました。

あなたはそのまま植林を続けるべきだと思いますか、やめるべきだと思いますか？その理由をあわせて書きなさい。

担当している大学の講義の最終日、私はこの課題を出している。あなたは植林を続けるべきだと思いますか、それともやめるべきだと思いますか。

年度によって多少の差はありますが、学生さんの半数以上は植林を続けるべきと回答します。その理由の多くは植林をすることで将来的に獲れる魚の量が増えるから、温暖化対策として役に立つからなど、生物多様性や気候変動といったグローバル・イシューに基づいたものです。その一方で反対の意見も少なからずあります。漁師が反対しており合意形成ができないから、今困っている人たちの意見を聞くべきといった地域住民の意思をくみとろうとするものです。

これは国際協力の現場で多くの人が直面する問題でしょう。古くは大型ダム建設などインフラ事業に伴う住民の強制移転、最近ではモザンビークで実施されてきた熱帯サバンナ農業開発プログラムが土地の収奪やコミュニティの分断といった問

題により中止を余儀なくされるなど、国家課題の解決と地域コミュニティの利益のどちらを優先すべきか、悩ましい問題です。この課題に正解はありません。これは私が今から20年前に実際にセネガル共和国のマングローブ植林の現場で体験したことです。当時の私は青年海外協力隊として岐阜県からセネガルの国立公園局自然情報センターに現職派遣され、動植物の調査や環境問題の普及啓発活動を行っていました。自然情報センターはセネガル北西部の都市サンレイにあります(図1)。西アフリカで最初に創られた都市であり、その歴史的重要性から2000年には世界文化遺産に指定され観光地として賑わう街です。周辺には世界自然遺産にも指定されているジェージ野鳥国立公園、絶滅危惧種であるウミガメの一種タイマイの産卵地であるラングドバルバリー国立公園、そしてすでにセネガルでは絶滅したダマガゼルやオリックスを再導入するための拠点となっているグンベル

自然保護区があります。この3つの北部国立公園・自然保護区に地球環境ファシリティ（GEF: Global Environment Facility）の生物多様性保全プロジェクトが2000年から実施されました。このうち、グンベル自然保護区で行われたマングローブ植林が課題の案件です。



図1. セネガル地図

結論からいえば、この植林は中止されました。男性漁師たちとの話し合いがつかなかったというのが理由です。しかしながら、彼らはマングローブ植林が魚の邪魔になるという理由で反対していたわけではないのです。彼らは国際機関やNGOが想定するようなグローバル・イシューに関心のない、マングローブの生態系における役割について知識のない、啓発すべき「無知」な人たちではありませんでした。植林をすることで魚の隠れ家や産卵地がつけられ結果的に漁獲量が増えていくで

あろうことは経験的に知っており、ここで行われている漁法は基本的に投網でマングローブ林が邪魔になることもありませんでした。彼らにとってはメリットこそあれ、デメリットはほとんど存在しなかったのです。

では、なぜ彼らは反対したのでしょうか。それには、ジェンダーという要素が影響していました。1990年代後半からセネガルをはじめアフリカ各地ではじまった環境保全プロジェクトの多くには住民参加だけでなく、ジェンダーの平等と女性のエンパワーメントが盛り込まれました。女性と子どもをターゲットにすればNGOが実施するプロジェクトの採択率も高くなるということで、NGOもポスターや映像で女性や子どもの笑顔を盛んに掲載するようになったのです。このマングローブ植林プロジェクトでも、対象となる地域住民は村の女性たちでした（写真1）。



写真1. 女性グループとの環境保全活動

そして、植林に参加する女性たちには参加協力金として幾ばくかのお金が配られることが決まりました。しかしながら、男性たちには何も配られません。男性たちの言い分はこうでした。

女たちには金が配られる。しかし、自分たちには何もない。どんなプロジェクトが来てもいつもそうだった。

当時のセネガルでは、1982年からはじまった南部カザマンズ地方の内戦が激化したことで、多くの援助機関が南部を離れ、北部に拠点を移していました。その結果、北部に援助プロジェクトが集中し、「援助銀座」と呼ばれるような地域まで生まれました。この村もまた援助が集中している地域のひとつでした。グンベル自然保護区は都市サンルイから車で15分ほどと近く、交通網も悪くないことから、イタリアやスペインなどヨーロッパ各国が給水塔建設や太陽光パネル設置を競って行っていたのです。インフラ事業は批判的になりやすいことから、地域住民の能力向上のための技能研修などの援助が併せて行われます。研修に参加した住民には技能を身につけるために必要な物資、ときには参加手当金が配られます。なかには事前調査として行われる住民への質問票調査にも金銭が配られていました。そして、それらはすべて女性が対象となっていました。そのことが男性たちの嫉妬心という容易には除去できない要素を生み出してしまったのです。

マングローブ植林は環境保全として有効な策であることには異論はありません。しかしながら、ジェンダー平等を重視しすぎるあまり、コミュニティの分断を生み出しては意味がありません。グンベル自然保護区での植林活動は、その後の私の国際協力に対する考え方や住民との関わり方について大きな転機となったのです。

フランス、そしてセネガルへ

セネガルでの経験を経て岐阜県職員に復帰しましたが、木を植えるべきだったのか、モヤモヤした気持ちを抱えたまま、月日が過ぎていきました。環境局の地球温暖化対策課という私にとってはうってつけの職場ではありましたが、もし自分に知恵の引き出しがもっとあったならば、何らかの手はうてたのではないか、そのことが頭にずっと引っかかっていたのです。そして、復職後、3年をもって退職し、フランスに留学することにしました。フランスの植民地だった西アフリカの国々の政治・経済・社会制度を深く知るためにはフランスの制度を知ることが一番の近道だったからです。

とはいえ、セネガルでの会話はほとんどが現地語であるウォロフ語。公式文書を除けば、フランス語が話される機会は少なく、フランス語能力が向上する機会はほとんどありませんでした。休みのほとんどをフランス語学習に費やしたものの、

フランスの大学院で学ぶ語学力には足りず、問い合わせた機関のすべてで断られました。そんな中、唯一、ヴェルサイユ・サン・カンタン・アン・イヴリーヌ大学（以下、UVSQ と略）のディディエ・ラムース准教授から返信がありました。UVSQ の国土・経済・環境学研究科には研究者を養成する調査研究コースと技術専門家を養成する職業専門家コースがあるのですが、職業専門家コースであり、ラムース准教授が責任教授を務める観光と環境専攻であれば、入学を許可できるというのです。職業専門家コースは私のような社会経験をもっている人を歓迎しており、修士課程 2 年目からの編入も可能とのことでした。しかしながら、フランスの制度を知るためには 1 年ではあまりに短いと考え、修士課程 1 年目からの入学を希望しました。

フランスでは日本と異なり、大学は 3 年間です。修士課程 1 年目というのは実際には日本の大学 4 回生にあたり、講義でも幅広い分野を選択する必要があります。大学や修士課程 1 年目で学ぶということは、実は大学院の専門課程で学ぶより遙かに困難なことです。これまで日本語で学んでこなかった分野までフランス語で学び試験をパスしなければならないのです。しかしながら、やっと入学が認められた、その嬉しさのあまり、海外で学ぶことの厳しさは頭からすっぱり抜けていました。

パリに渡り、苦勞しながらも住居を見つけ滞在許可証も得て、講義が始まりました。当時のフラ

ンスでは、板書やプレゼンテーション資料を使った講義はあまり行われていませんでした。教授は話をし、学生はそれをひたすらノートに書き留めます。驚くべきはその口調の速さ。何を話しているのか、講義中に宿題が課されていたことさえわからない状態でした。ましてや専門外の専門用語がフランス語で話されるのですから当然です。何も書き留められず、講義後、他の学生にノートを借ります。しかしながら、筆記体かつ略語で書かれているために、ノートはさながら暗号。結局、解読できず、前期の試験では 3 科目が合格点以下となりました。フランスでは日本と異なり、登録できる講義数は限定されており、登録した科目の総平均が 20 点中 10 点以上なければ落第、落第が 2 度続くと退学となります。学科にもよりますが、進級できる学生数は半数から 3 分の 2 程度です。さらに、前期が終わると、stage と呼ばれる研修に参加しなければなりません。公的機関や NGO、民間企業などで専門分野にかかわる実地経験を積み、受け入れ先機関の責任者のもと報告書を作成します。しかしながら、私には頼めるような知り合いもありませんでした。ほとんど困っていたところ、「君は確か、セネガルに長いこといたはずだよ」とラムース准教授が紹介してくださったのがフランス国立開発研究所 (IRD) のジャック・キャンシエール教授でした。ひげに長身、ワシのような眼光の教授との初対面の際に私が抱いた印象は、決

して好いものではありませんでした。

幸い手続きはスムーズに行き、私はセネガルの首都ダカールにある研究所への派遣が決まりました(写真2)。運良く、自然情報センター時代の上司が自然保護区の管理責任者として勤務していることもあって、セネガル西部のパルマランという小さな漁村での調査が始まりました。当時のセネガルはフランスに倣って地方分権化が進められ、国ではなく地方自治体単位でも自然保護区が制定できるように法が策定されました。この地方分権法に基づき、最初につくられたのがパルマラン地域共同体自然保護区でした。私も地方分権と自然保護区をテーマに何か報告書を作成しようと意気込んでいました。セネガルでの初めての事例ということで村にはすでにすくなくならずの学生たちが調査のために訪れていました。その多くは住民の意識調査で、いくばくかのお金を渡して彼らは調査票を回収していました。こうして得られたデータは必ずしも住民の意識を反映したものとはかぎらず、問題の本質を見落とすことにもつながります。村を訪問するたびにお金をせびられることに疲れてしまい、最初の一ヶ月はただひたすら歩き回ることに専念しました。何も無いところをただ歩いているおかしいシノワ(中国人)がいる。私の噂はすぐに広まり、何かと声をかけられるようになりました。そんな中、村の歴史を調べている教師ムッサに出会い、村が何度も海岸浸食の脅威

にさらされてきたこと、浸食がおきた際に何歳だったかで村の人の年齢がわかること、その逆もまた可能であること、話をじっくり聞くためにはメモをとらず聞き役に徹することなどを教えてもらいました。村人から聞いた話をまとめ、首都ダカールで報告を待っていたキャンシエール教授に提出しました。この時点では村人から聞き出した村の歴史と直面している家計の問題を記しただけで、地方分権や自然保護区の問題とはかけ離れたもの。これをどうつなげていくのか、調査方法を尋ねても、教授は「このまま自分の思うとおりに聞き取りを続けなさい」と言ってくれるだけ。何ら指示はありませんでした。



写真2. IRD の同僚と

再度、村での暮らしをはじめ、これまでどおり、村を回っては手の空いた人を見つけて話を聞いていました。自然保護区にかかわっている周辺の村

にまで話を聞きに行くようになって徐々に聞き出せる内容も深くなっていきました。自然保護区にかかわっている行政上の5つの村は決して一枚岩ではなく、かつて村同士で漁業権をめぐり暴力的な対立があったこともあって感情的なしこりがあり、行政上の区分と住民の仲間意にはかなり乖離があること。さらに海岸浸食が進むことで陸地の面積が削られ、私有地だった自分たちの土地が政府に取り上げられてしまうのではないかという不安を抱えていました（セネガルの法律では海岸線から50m以内は国有地とされている）。実際、私の滞在中には南部の村では村人が使っていた船着き場が法律に反すると憲兵隊によって破壊されるという事件も起こりました。村の成り立ちを知り、どこまで立ち入った質問が許されるのか、政府との関係をどう置くべきなのか、どうしたら村の人の心を開いてもらえるのか、1年目の報告書を書き上げ、研修を終えました。報告書を読んだ後、教授は何も言わず、ただポンと頭を優しく叩いてくれました。今、思えば、フィールドワークの醍醐味を知ったのはこのときでした。

女王の村

研修を終え、後期はそれまで以上に学ぶことに時間を費やすようになりました。まったく聞き取れなかった講義も少しずつわかるようになり、無

事進級し、修士論文の変わりとなる2年目の研修および口頭試問が決まりました。研修先は1年目と同じくIRDで指導教官はキャンシエール教授が引き受けてくれましたが、2年目になり初めて教授による指導が始まりました。いくつか調べてみたい保護区を挙げたところ、国、地方自治体そしてNGOと管理主体が異なるセネガル中部沿岸域の3つの保護区を比較してみてもどうかという提案でした。しかし、あくまで提案だけで、どう調査するかについてはやはり指示がありません。普通に考えれば、国よりは地方自治体、地方自治体よりはNGOの方がより現場に近く住民の意見も取り入れやすいのではないかと、とりあえずは住民の保護区に対する意識調査から始めました。

国の保護区として選んだのがポポンギヌ自然保護区でした。木の伐採とマングローブ林の保護のために1986年に創設された1000haほどの小さな保護区ですが、村の女性たちによる植林のボランティア組織が80年代末には結成され、国と女性グループが協力して植林を中心とする環境保全活動に勤しんできました。2006年には国連開発計画（UNDP）が生物多様性保全と持続可能な開発に貢献した第三世界の先住民グループを表彰するEquator Prize（赤道賞）にも選出されていました。

地方分権化が進む中、保護区の管理手法のひとつとして発展してきたのが国と住民による共同管理です。1989年に国立公園局は「保護区ネットワ

ーク・における統合的開発のための環境保全アクション・プラン」を策定し、自然保護区管理の中核部分に地域住民を位置づけ、環境保全とともにコミュニティの自治や保護区周辺の住民の雇用機会の創出を目標に掲げました。国立公園局は保護区を鉄柵で多い家畜の侵入を防ぐとともに、女性グループを保護区内での植林作業に参加させました。当初ポボンギーヌ村の119名で始まったグループは、1996年には周辺7つの村約1500人が参加する自然保護住民グループとしてなり、環境省と共同管理を行う署名に調印しました（写真3）。



写真3. ポボンギーヌ村の女性グループ

彼女たちは植林活動の動員だけでなく苗木の管理も行い、また雇用機会創出のために保護区に建設された村営宿泊施設の運営管理を任されています。8つの村の女性グループの議長は月に1回話し合い、年に1回総会が開かれ会計報告します。さらに2007年には世界環境基金の支援により基

金が創設され、女性たちへの低金利の貸付が行われるようになりました。

女性グループのワリマタ・チャオ議長は赤道賞のインタビューで次のように述べています。

私たちは、環境保全を優先事項とし、女性たちに自然資源管理におけるリーダーシップの地位を付与すべく努力を続けていきます。

環境、経済、社会のバランスを図りながら発展を目指す当時の持続可能な開発の目標に合致した、まさに国際機関にとって「成功例」として挙げるのに理想的なグループでした。

しかしながら、調査を続けていく中で8つの村には意識の乖離があることがわかってきました。とりわけ、中心部となっているポボンギーヌ村と道路でつながっていない2つの村は年に1回開催される総会に参加することもあるが、その案内も毎年ではなく、住民のほとんどは植林に参加したことがありませんでした。半日もかかる道のりをかけて、会議や活動に参加するメリットが彼女たちにはありませんでした。その一方、ポボンギーヌ村に隣接する村々では、極めて高い参加意欲が見られました。しかし、その理由は議長が赤道賞のインタビューで語るような「子どもたちや孫たちとの共有財産として次の世代に資源を残したい」からではありませんでした。植林に参加するたびに配給される手当、あるいは調理用の鍋やガスコンロだったのです。彼女たちはインタビュー慣れ

して、国際機関が望むような答えをしてくれます。どう反応すれば、次の援助につながるのか、経験的に学んでいました。質問票調査では資源を守るために活動に参加しているとは答えてくれます。しかし、ガスコンロが支給されなくなったら、マングローブ林から薪を調達せざるを得ない経済的状况にありました。援助は彼女たちにとって生命線だったのです。

さらには、チャオ議長と親戚関係の議長がいる村には優先的に植林などの情報提供が行われ、宿泊施設での雇用が保証されていました。宿で働く女性たちの仕事内容はそのほとんどが掃除・洗濯・食事の準備であり、会計に携わるのは議長だけでした。旅行者がどれだけの金額を支払っているのか、知っているものはいませんでした。解雇を恐れて、それを問いたすことはできません。村の話し合いはほぼ毎月行われているとはいえ、議長とその親戚によって情報交換が行われていたにすぎませんでした。議長は女性指導者として、国や国際機関によってその力を強化され、地域女性社会の支配者として君臨していました。彼女の差配次第で、保全活動は左右され、自然保護区の責任者ですら彼女には口出しできない状態になっていました。

ポボンギーヌ村のある若い母親はこう述べています。

生活が苦しいので、自分もグループに参加した

かった。けれどすべての活動に参加しないとメンバーには入れてもらえない。乳飲み子がいるから、私には無理だった。

環境問題という資金源

趣旨からすれば、最も優先されるべき妊婦や乳飲み子を抱えた母親たちへの支援がなされていない。国際機関が絶賛する共同管理の理想と現実を思い知った私は次の調査地であるバンブーン共同体海洋保護区へと向かいました。

バンブーン共同体海洋保護区はセネガルの環境保護 NGO オセアニウムの強力なイニシアティブによってつくられた保護区です。水産資源の過剰な利用に強い関心を持っていたオセアニウムは住民の強い反対にあいながらも話し合いを重ね、保護区内での漁業禁止にこぎつけました。運営管理は意思決定を保護区周辺の 14 か村の代表からなる運営委員会が行い、監視活動は村の若者から募られた監視委員会によって行われています。監視員は保護区内に侵入した漁船に警告を行い、従わない場合は国立公園局が取り締まるという国と地域コミュニティによる共同管理です。漁業の経済的損失を補うためにオセアニウムは村営ロッジを建設し、この収益を保護区の維持管理費や地域開発のプロジェクトに充てています。

当初は地域住民と話し合いを重ねる努力を怠ら

なかった NGO が関与することで、環境・経済・社会のすべての面でよい効果が生まれるものと考えていました。海洋保護区設置の中心的役割を果たした運営委員会のジャメ議長が JICA のプロジェクトに長年関わっていたこともあって、部屋を間借りすることができました。この海洋保護区は 7000ha ときわめて広大で、かつ船がないとアクセスできない村が多くあります。まずは歩いてその大きさを知ろうとジャメ議長の住む村周辺からインタビューをはじめました。しかし、どの村を訪れてもみな保護区の話になると押し黙り何も答えてくれません。ある村では漁師さんから「何度もいろんなやつが話を聞きに来た。けれど、それで生活が変わったのか」と怒鳴られました。彼らは保護区内で漁をしていたことから、高い罰金を支払い、あるいは投獄された人たちだったのです。彼らは魚を護ることの重要性はよく理解しており、実際、産卵期になる雨季には漁をしないなど取り決めがありました。しかし、保護区となったことで全面的に禁漁となり、罰則は厳しく大きな負担となっていました。村周辺の土壌は塩分濃度も高く、耕作面積がかぎられるために農業だけでは生活できません。結果、多くの漁師がセネガル南部カザマンス地方やギニア沿岸で出稼ぎ漁を行い、南部の水産資源の枯渇を招くような状況になっていました。彼らの憎しみの対象は、罰金や投獄した国ではなく、NGO オセアニウムをうまく利用し

プロジェクトを取り仕切るジャメ議長でした。

ジャメ議長は保護区近くの小さな漁村の漁師の息子でした。いわゆる学歴があったわけではありませんが、頭の回転がよく、フランス語も堪能であったことから、村の交渉ごとは彼が担うようになっていきました。とりわけ、その調整能力が活かされたのが国際機関との交渉においてでした。1980年代から JICA の水産プロジェクトに積極的に関与し、援助する側が何を求めているか、会議でどう発言すれば好ましいのかを理解し、彼のおかげで人口 200 人にも満たない小さな村には FM ラジオ局やインターネットカフェまでができるほど裕福になりました。その一方、村人は彼の顔色をうかがうようになり、よその村人から煙たがられる「村の顔役」にもなっていました。

海洋保護区をめぐる、火種がくすぶっている中、環境 NGO オセニアウムは新たなプロジェクトをはじめました。それがマングローブ植林プロジェクトでした。これは乳製品メーカーのダノンが支援して実施されました。当時、ヨーロッパの国々は地球温暖化防止のために、二酸化炭素排出量削減を義務づけられていました。その中で採用されたのはグリーン開発メカニズムです。先進国が開発途上国の実施する二酸化炭素排出量削減への取組を資金や技術で支援し、達成した排出量削減分を両国で分配することができる制度で、ダノンはセネガルでマングローブ植林活動を行うことで企業の二

酸化炭素排出量削減につなげていく考えでした。このため、ある程度の本数は当初から想定されていました。

マングローブ植林プロジェクトは 2006 年にセネガル南部カザマンス地方の小さな村からはじまりました。オセアニウムが 2002 年にカザマンス地方沖で起こったジョーラ号の転覆事故で救援活動に奔走したことから、南部の村ではオセアニウムは信頼を得ていたこともあり 6.5 万本の植林を実施しました。翌年には南部の地を中心に 50 万本、翌々年には 500 万本と指数関数的にその規模を大きくしていき、ダノンの資金提供があった 2009 年には 3670 万本と国家的規模の事業へと拡大していきました。2010 年の植林プロジェクトでは数値目標が 6000 万本と明確に定められ、オセアニウムが貼りだしたポスターには満面の笑顔の子どもたちとともに 408 の村で 109,650 人が参加したという数字だけが強調されるようになっていきました。しかしながら、現実には 6000 万本植えることができたのかには疑義が残りました。彼らが植林対象としたサルームデルタ地域ではこれまでも国際自然保護連合や JICA といった援助機関がマングローブ植林活動を行っており、6000 万本ものヒルギ科植物の苗木を育てる場所も植える場所もなかったのです。さらには、ヒルギ科植物の種子が不足したために、その買い取り作業が各地で行われました。種子を麻袋 1 袋分集めると 500FCFA（セネ

ガルの通貨で当時のレートで約 90 円)の報奨金が支払われました。ところが、今度は種子だけでなく、麻袋も不足したために、麻袋が高値で売られるようになってしまったのです(写真4)。

植林する場所がなかった地域では、決められた間隔で植えられることもなく、ただ種子がばらまかれました。これには村人からも「マングローブと一口に言っても、場所によって育つ種類が違う。まったく確認作業も行われていない」という声があがり、国立公園職員は「彼らは本数を数えるために植林らしきことをしているだけだ」と非難しました。結果、資金援助したダノンは、植林が予定通り行われなかったと判断し、植林プロジェクトは失敗に終わったと結論づけました。



写真4. 村同士の奪い合いとなった麻袋

このプロジェクトにおいても中心役となったのはジャメ議長でした。彼は 6000 万本の植林という途方もない数値目標をたてた 2010 年の植林にお

いて、動員数も進捗も芳しくない状況は、政治的に不安定な南部に比べ北部には援助が集中しており、どのプロジェクトに参加するかは住民側に選択権があり、植林する場所もそのための道具も不足している事実を知っており、かつ地域統括調整員という責任者という立場にありながら、会議では一切発言しませんでした。この5年後、ジャメ議長はプロジェクトに参加しても利益がなく村が利用されるだけと判断しオセアニウムとは袂を分かっことになりませんが、環境保全プロジェクトをうまく利用し村の利益を最大化したい彼の思いが今となってはよくわかる態度でした。

木は植えるべきだったのか

これまで見てきたとおり、開発途上国にとって環境問題は大切な資金源にもなり得ます。資金を得るために、国は地方分権化や地域住民との共同管理といった国際基準の政策を導入し、地域エリートを育てあげていきます。そして、住民もまた国やNGOをうまく利用し、資源を地域住民に差配する役割を担うことで、自分たちの家族や村を強化していきます。結果的に地域住民はリーダーへの嫉妬や妬みといった感情を押し殺しながら、面従腹背しているのです。冒頭の村ではそれが男性漁師たちでした。

ここまで振り返って、あなたは植林すべきと思

いますか、それともやめるべきだと思いますか。

この問題は何もアフリカの小さな村にかぎりません。私たちの身近にも普通に存在します。新型コロナウイルスの拡大により、日本政府はGo To Eatキャンペーンに続き、飲食店へ営業時間短縮の協力金を交付しました。この政策決定により、優遇される飲食店に対する不公平感が生まれました。新型コロナウイルスで悪影響を受けているのは飲食店にかぎりません。給与所得者も給与減額や解雇といった苦しい思いをしている人は少なくありません。しかし、彼らには何の支援もありません。協力金の金額も売上に関係なく一律で公正ではありません。結果、みなが苦しんでいる状況の中に、不要な悪感情や対立が生まれてしまします。

すべての人を支援することができない以上、どこかで線引きするのは仕方のないことです。しかし、その線引きを間違えると問題はかえって複雑化し、根深いものとなります。冒頭の村では、女性を援助対象に絞ったために、要らぬ対立が生まれました。もし男性漁師を活動に巻き込んでいたら植林はそこまで反対されることはなかったでしょうが、当時の援助のトレンドであった女性や子どもを対象にしなければ援助そのものがなかったかもしれません。植林はその重要性に反し、目新しさが無いありふれた事業です。しかし、薪を集める女性たちを植林の中心メンバーに据えれば、

技能習得や資金管理能力向上といった女性のエンパワーメントといった国際的に望まれる事業にすることができます。

木を植えるべきだったのか。中止を決断した国立公園局の判断は、少なくとも当時は正しかったと思います。彼らは、時には密猟や違法な伐採の取り締まりによって恨まれる立場でもありましたが、家族と離れて村のすぐそばに暮らし、村人以外では最も村の事情を知る人たちでした。

その彼らがこのまま植林を進めることで起きる対立や今後の保護区に対する協力姿勢を考慮し、予算が確保されているにもかかわらず、中止と決断しました。

あの出来事から10年後、私は冒頭の村を訪れました。漁場には枯れかかったヒルギ科植物が点在していました。枯れたものはすべて、オセアニウムが行った植林プロジェクトで、手当をもらった村人たちが植えた苗木でした（写真5、6）。

關野 伸之（せきの のぶゆき）



写真5. オセアニウムが当初植林したヒルギ科植物



写真6. 植林してから1年後

ソフィのヨーグルトさん

日本で暮らしていて、既婚の男性が未婚の女性にお付き合いを申し込むことがあれば、それはいわゆる「不倫」の始まりかな、と想像してしまう。でも、暮らす社会が異なれば、女性はのちにその男性の奥さんのひとりとして、正式に周囲の人から祝福されるかもしれない。私がフィールドワークで滞在していた西アフリカのブルキナファソでも、一夫多妻の家庭が多くあり、男性にとっても女性にとっても、とりわけイスラム教徒の間では、人生の選択肢の一つになっている。

ソフィ

ブルキナファソで一番親しい友人のソフィは、いつも明るくて前向きな女性だ。決して裕福ではない、むしろ貧しい暮らしだけれど、困難を笑い飛ばしていつも自然体だ。古いペダル付きバイクをなだめすかしながら、片道8キロの道のりを町の中心の職場まで通勤していた。知り合った当時はインターネットカフェで働いていて、私はそこをよく利用していた。

ソフィは兄が建てたという、壁の倒れかけた家で一人暮らしをしていて、時々弟が居候したり、姪を預かったりしていた。兄は別の町で働いてい

て不在だった。私も居候させてもらって、同じベッドで二人で寝起きしていたこともある。彼女の暮らすボボジュラソはブルキナファソの第二の都市だが、彼女は町はずれに住んでいて、そこには電気も水道も通っていなかった。区画整理されていない土地に人々が家を建てて住んでいるところで、「ロメ」と呼ばれていた。



写真.「ロメ」の呼び名の由来となったとされる風景

ロメというのはトーゴの首都のことで、景色が似ているのがその呼び名の由来らしかった。みんな

が土を掘り出してレンガをつくって家を建てるうち、お堀かというような穴が開いてしまい、その中央に、削り取られなかった土が橋のように残ってみんなが通行している。そのあたりが、「ロメ」ということだった(その後何度かロメを訪れたが、まだ「ロメ」の由来になった風景には出会っていない)。居候させてもらっていた時、周囲に「ロメ」に住んでいる、ということ、みんな決まって驚き、勇気があると褒められるような、ポボジュラソの奥の奥にある場所だった。寝苦しい暑い夜も扇風機なしでじっとしているしかないから、真夜中頃まで外で雑魚寝して、少し気温が下がったところで家の中に入って寝た。思えば崩れかけた外壁もほったらかしだったし、門もなかったから、不用心といえば不用心だった。でも、そんな暮らしができるようなのかな場所だった。(※写真)

ソフィは、知り合った当時 25 歳くらいだったと思うが、周りの同年代の女性が体のラインがはっきり出るような服を身に着け美しさをアピールするなか、そんなことには無頓着な様子だった。一般的に既婚女性が着るといわれるゆったりした服を着て、「この方が落ち着いた女性だとみてもらえるからいいの」という。彼女の服をいつも作っていた仕立屋のおじさんは、「若いんだからもっと年相応の服を着なさい」「夫候補をみつけなさい」と、若い女性向けのデザインの服をつくってソフィに着させていた。

ソフィと私はとても気が合ったが、一つだけついていけないところがあった。彼女は敬虔なプロテスタントで、教会の活動に積極的に参加していた。信心深いところについていけなかったのではない。教会での活動には歌って踊ることがもれなくついてきて、私はそれ(特に踊り)が苦手だったのだ。ソフィは、チャンスがあれば牧師さんになりたいと思っていたほど熱心な信者であり、教会ではみんなの前でマイクをもって歌い踊って、「神を信じましょう!」と呼び掛ける。私はソフィと教会のみんなが楽しそうに歌ったり踊ったりする中にひとり立ち尽くし、みんなのように踊りだすこともできず、でも、じっと待つには長すぎて、歌の途中でこっそり逃げ出し、慣れない道を迷いながら家に帰ったことがあった。それ以来、エンドウは踊るのが苦手、と分かってもらい、教会についてくことはなくなった。

ソフィのヨーグルトさん

ある年のフィールドワークで、またソフィの家にお世話になることになった。再会してお互いに近況を報告しているうちに、最近ソフィのところに頻繁に通っている男性がいることを知った。市場で商売をしている人で、週に何度も仕事帰りに、わざわざソフィの住む「ロメ」まで会いに来てするという。家に来るときは必ずお土産にヨーグル

トを持ってきて、しばらく話してから帰る。弟が居候していた間は弟も同席するし、私も居合わせれば一緒に話をするようになった。別に、これといったことを話すわけでもない。でも、頻繁にやってくる、話をし、ヨーグルトを置いて帰っていく。ランプを点けるのでなければ月明かりが電球代わりのソフィの家で、庭に椅子を人数分出して、みんなで話をした。頻繁に通ってくるということは、どうしたいということなのか、みんながわかっている。ソフィは心なしかしおらしくかしこまっていた。弟は最初のうち彼を邪険に扱ったが、男性はひたすらにヨーグルトをもって通い、少しずつ家族にもなじんでいった。

いつしかソフィと私はその人のことを、彼がいないところで「ソフィのヨーグルトさん」と呼ぶようになった。途中からは敬称を略して、「ソフィのヨーグルト」と呼んでいた。週に何度も会いにきていたから、彼はもちろん本気だった。彼の収入がどのくらいかは知らないが、少なくともソフィの月給では、彼が運んでくるヨーグルトを頻繁に買うことはできない。ソフィの栄養になるものを毎日運んでくるところも、彼の真剣さの表れだと思った。ソフィも、ふざけて「ヨーグルト」と呼んではいたが、彼のことを真剣に考えているのがわかった。ただ、躊躇しているようでもあった。

「はっきり聞いたことはないんだけど、“息子”の話をしていたことがある」、ソフィはその理由を教

えてくれた。ヨーグルトははっきりとはいわないが、既婚者の可能性があった。

ボボジュラソで暮らしていて、一夫多妻はれっきとした家族の形だと、外から来た私もわかっている。ここで生まれ育ったソフィなら、もっと一夫多妻が身近にあるだろう。僚妻同士のいさかいなどトラブルも聞くが、幸せな家庭ももちろん知っている。ソフィの親戚のローズおばさんは、結婚してしばらくした頃、旦那さんから家事の負担を減らすためにお手伝いさんを雇うことを提案され、「それなら、二人目の奥さんをもらって、一緒に暮らしましょう」と自ら提案したそうだ。二人目の奥さんとは姉妹のように仲がいい。ソフィはそんな家庭を身近に見ながら育った。でも、ソフィは熱心なプロテスタントで、彼女にとってはその宗教的信条から一夫一婦制が基本であり、自分が一夫多妻の家庭を築くという選択肢はどうしても考えられないようだった。それで、ヨーグルトが会いに来ることがうれしいのに、心を開けないようだ。彼女は悩んでいた。

ヨーグルトの家へ

「一緒に確かめに行ってみようか。確かめたらすっきりするんじゃない」

ある日私は、努めて何気ないような言い方でソフィに提案してみた。そうでもしないと、ヨーグ

ルトとソフィの関係はずっと平行線のような気がした。ヨーグルトは、ソフィにいつでも家に来ていいと言っていたようで、ソフィも、エンドウと一緒に来てくれるならと安心した様子を見せた。私たちはある日の夕方、ソフィの仕事帰りに待ち合わせ、ソフィの古いベダル付きバイクでヨーグルトの家に向かった。ヨーグルトの住む家は町の中心にあって、ここから「ロメ」にはほぼ毎日通っていたのかと、私は彼の本気の思いを再確認した気持ちになった。

大きくはないが清潔なコンパウンドの一角に、ヨーグルトは住んでいた。・・・そして、台所では若い女性がピーナツバターのソースを作り、小さな男の子が恥ずかしそうにソフィと私に挨拶した。何も言えずに笑っているソフィの隣で、私が質問をした。「結婚して、お子さんもいらっしゃるんですね」。若い女性は奥さん、男の子は息子だった。ヨーグルトは、幸せな家庭をもつ既婚者だった。

「妻も、新しい妻を迎えることには前向きなんだ」とヨーグルトは言った。「彼女とソフィならうまくやっていけると思うんだ」。うん、ソフィならきつとうまくやっていける。こんなに明るくて勇気がある女性なら、誰とだって。そして、そんな女性だからヨーグルトは彼女を近くにおいておきたいのだろう。でも・・・。

帰り道のことはよく覚えていない。でも、その後、ヨーグルトさんはソフィの家に来なくなった。

ヨーグルトさんが悪いわけではない。彼は最初から最後まで堂々として、誠実だった。ただ、ソフィが選り取らなかつただけだ。私はわざとふざけて、「あ〜あ、ヨーグルト食べられなくなっちゃったね」といった。ソフィはただ笑っていた。

ソフィの選択

その後も、ソフィのところには誰かしら恋人に立候補する人が通った。真面目に働いていない、お酒臭い人が通っていた時は、「いくら同じ教会に通っている人だからって、私はあの人は反対」と意見をすることもあった。その後、ホテルに転職したソフィを見初めたカナダ人の宿泊客の初老の男性、まもなく妻と離婚すると言っている同じ教会の男性、幼いころからソフィを好きだったというコートジボワールのアビジャンに住む幼馴染が、3人同時に名乗りをあげ、最終的に、まもなく妻と離婚する、という男性がソフィの心をつかんだ。ソフィの心を射止めた男性もプロテスタントだから、一夫多妻という選択肢はない。「本当に離婚するんでしょうね!?!」「ソフィと暮らすための家を新しく建てる予定ですって?本当にしょうね?」と私などはいろいろ聞いてやりたかったが、当時私はアビジャンで働いていて、残念ながらソフィと同じく「ロメ」に暮らすその男性に直接会って確かめることはできなかった。

決断する前、ソフィはカナダ人の彼と旅行に出かけ、また、幼馴染に会いにアビジャンまでの長距離列車に乗った。私もアビジャンで再会し、幼馴染に紹介してもらった。幼馴染については、ソフィは「彼は元妻とまだ一緒にいる」と言い、親戚のおばさんは「二人の間には子供がいるから連絡を取っているだけだ」と幼馴染をかばって、事實はわからないままだった。私はヨーグルトさんの時のようにはっきり質問してみたかったが、幼馴染の隙のない雰囲気はどうしても切り出せず、直接対決できないでいるうちに、ソフィの心は「ロメ」の人に傾いた。

親戚のおばさんと一緒に幼馴染を推していた私にはショックな選択だったが、3人全員と向き合ったうえでの決断だというのだから、あとは応援するだけだろう。私はまだ「ロメ」の人には会ったことがない。様子を聞こうと電話やメールをしても、いつも「元気元気！」としかいわないから、ソフィと「ロメ」の人がどんな関係を築いているかは、会いに行かないとわからないと思っている。お兄さんがけがをして、結婚式はまだできていないと言っていたけれど、どうなっただろう。いや結婚式なんてどうでもいい、ただ、幸せに暮らしてほしい。

遠藤 聡子（えんどう さとこ）

東と西から考える未来 —暮らしてみても考える社会主義—

ドイツでフィールドワークをするときには、なるべく、東と西のどちらにも住むことを心掛けてきた。

この場合の東と西というのは、東西南北の東と西であるが、それは同時に政治体制の東と西、つまり、旧東ドイツと旧西ドイツということだ。旧東ドイツは、ドイツ民主共和国 (Deutsche Demokratische Republik、DDR)、旧西ドイツはドイツ連邦共和国 (Bundesrepublik Deutschland、BDR)。前者は、社会主義あるいは共産主義社会と言い換えられるし、後者は資本主義あるいは自由主義社会とも言い換えることができるだろう。いま、世界には、社会主義を標榜する国はそれほど多くない。ベルリンの壁が崩壊し、ソ連が崩壊すると、世界は、それまでの東と西の対立とは異なった原理で動くようになった。グローバリゼーションや地域紛争・民族紛争、地球環境問題、移民・難民問題など二大陣営時代とは異なった状況が生まれた。そんな中、社会主義は歴史の中に消え去ってしまったかのようにも思えるが、しかし、近年の行き過ぎたグローバリゼーションや新自由主義へのオルタナティブとして振り返られるようになってきている。

そんな時代とは何であったのか、今となっては、それを直接知ることはできないが、残された街に住むことで少しでもわかるのではないかという思いもあって、フィールドワークの滞在先を決めるときには、そこが旧「西」なのか、旧「東」なのかには意識的になるようにしてきた。

ベルリンの壁と重層する歴史

ぼくがドイツで最も多くフィールドワークを実施しているのはベルリンだが、ベルリンは、この東と西の問題が凝縮したようなところだ。さきほど「ベルリンの壁」という語を使ったが、そんな語が存在することが象徴するように、文字通り壁がこの都市を二分した。

とはいえ、壁はリングを切るように、すばっとこの都市を分断していたわけではなく、アリの巣や、あみだくじのように細かな刻みで街区単位、あるいは家単位で東と西を分けていた。

ベルリンで住んだ地域は、次のようなところ。カフカの終焉の地であるシュテューグリッツ、アインシュタインも暮らし「ベルリンのオックスフォード」ともいわれる大学町ダーレム、かつてはトルコ移民の街といわれ今は若者の街といわれるクロイツベルク、カール・マルクス通りにほど近いフリードリヒスハイン、丘の上の街ブレンツラウアーベルク。はじめの三つ (シュテューグリッツと

ダーレム、クロイツベルク)が旧西ベルリンで、後の二つ(フリードリヒスハインとプレントラウアーベルク)が旧東ベルリンだ。ただ、クロイツベルクとプレントラウアーベルクは、ベルリンのほぼ中心にあり、ベルリンの壁とも隣接している境界領域であったともいえる。

西ベルリンと東ベルリンでは町の様子はかなり違う。とはいえ、そのちがいが、東西陣営の違いなのか、もともと存在した違いなのかは微妙なところもある。

ベルリンは、プロイセン帝国からドイツ帝国へとドイツが国民国家として形成される19世紀から20世紀初頭にかけて発展してきた都市である。そのような近代の歴史を持つもともとあった都市ベルリンのうえに、20世紀半ばに突然ある分割線が走ったというのが正確なところであろう。

さらに、ベルリンの壁が崩壊してからでも、もうすでにかかなりの時間が流れているので、今度は、その上に、その壁崩壊後の時間が堆積することになる。ベルリンで暮らすということは、そのような時間の堆積を踏まえて、東西の違いに目を凝らすことでもある。

トラムかバスか

私見ではあるが、旧東ベルリン地域の大きな特徴は、トラムが縦横に走っていることだ。このト

ラムが走っていることはとても便利で、それに加えて、なんとなく安心感がある。ひと昔のトラムは、ひと昔前のバスがそうであったように、床が高く、乗り込むためにはトラムの入り口の段をえっちらおっちら上がらなければならなかったようだが——そのタイプのトラムもまだ時々走っているが——、今のトラムは、低床式で、路面と車内、あるいはプラットフォームと車内の段差がほとんどない(写真1、2)。



写真1. 旧東ドイツ地域を走るトラム(この写真の駅は街路樹で車道と分離されている)

ラムは数分から10分間隔くらいで運行していることが多い。これくらいだとほとんど「待つ」という感覚になることがない。次から次へとやってくるので、それにさっと乗ってさっと移動できる。トラムは車道を走っているが、車のレーンとトラムのレーンは分けられている。とはいえ、道

を走っているのには変わりはない。ひっきりなしにトラムがやってくるのは、道がベルトコンベアのように動いて、その上をトラムに乗って移送されているというような感じになる。あるいは、なんとなく、道そのものが動いているというような感じもある。



写真2. 旧東ドイツ地域を走るトラム（黄色はベルリン市交通局のシンボルカラー）

一方、旧西ベルリン地域の方はバスが中心である。もちろんバスも乗りやすいのだが、トラムのような感覚とは少し違う。

バスは小さくて、そんなに人は乗れない。車内も混み合っていることが多く、バスに乗ることが一仕事というような印象がある。旧東ベルリン地域に住んで、トラムが縦横にインフラとして機能していることの便利さに慣れると、バスはいかにも資本主義的な感じがしてくる。それほど広くな

い道をバスがぬっと走ってくるのに違和感を覚えたりもする。日本でも商店街の中をバスが走ってきて驚くことがあるが、それに似た光景もあり、それが異様なものに思えたりもする。

バスは、排気ガスも出すし、ガソリンも食う。もちろん、トラムは電気で走るとはいえ、その電力を供給するためには、発電をしなければならず、その発電には、化石燃料が使われている可能性もあるが、公共用に地球の公共財をもとにしたエネルギーを使っているという感じが大きいのはトラムの方だ。

移動の足を確保する。しかも、なるべくアクセスのしやすい方法で、細かな生活の足として機能するだけのレベルで維持するというところを行っていた点で、東ドイツの遺産は評価できるのではないかと思う。

とはいえ、トラムは社会主義国家ならではの特徴かといわれると、そうとも言い切れないだろう。たしかに、トラムのようなインフラストラクチャーは、都市計画を必要とし、そのような計画都市は社会主義国家の方が建設しやすかったという背景もあるかもしれない。だが、世界には、トラムがある都市というのはいくらでもあり、その都市のすべてが旧社会主義圏であるというわけではない。けれども、トラムがしっかりと都市のインフラストラクチャーとして機能し、それがゆるぎない核心となっている点で、旧東ベルリンのそれは、

何が社会生活を支えるミニマムなインフラストラクチャーであるかに関する社会主義のある側面を見せてくれるような気がする。



写真3. 旧西ドイツ地域の駅前の風景（花屋や雑貨屋。街角には必ず花屋がある。）

店屋と街路

旧東ベルリン地区と旧西ベルリン地区の違いのもう一つは、街路に店屋があるかないか、あるいは多いか少ないか、ということだ。

旧東ベルリン地区の街路には店屋が軒を連ねた街路というのがあまりない印象がある。街路に店屋があるというのは、言ってみれば、駅を降りた時に、駅前に商店街があるかないか、とも言い換えられる。

旧東ドイツ地域に住んでいて、そこから旧西ドイツ地域の街に行くと——たとえば、S パーンと

いう鉄道を使えば10分か15分ほどで典型的な東地域から典型的な西地域に行くことができる——、自然と二つの地域を見比べことになるが、そうやって実際に身をもって空気の違いにさらされてみると、旧西ドイツ地域にはどれほどの「もの」があふれているか、ということに気づかされる。

旧西ドイツ地域の駅前にはたいていは、薬局や、本屋や、花屋や、雑貨屋などが軒を並べる街並みがある（写真3）。

そのような街並みがそもそも存在しない地域から、そのような街並みがある地域に来てみると、そのそれぞれの店の中にどれだけたくさんの多種多様な「もの」が詰まっているか改めて驚く。なんだかめまいがしそうになるくらいだ。それが資本主義と社会主義の違いと言ってしまうようなのだろうが、あまりに「もの」が売られているということ、つまり、その社会の暮らしがどれだけ多くのものに囲まれ依存しているかということに呆然とする感じもある。そのようなことは、多種多様なものが当たり前に存在する西側にはなかなか気づくことができない。

旧東地域にも店はないわけではない。だが、街路に目くるめくように店が並ぶという商店街があるわけではない。社会主義当時は、ショッピングセンターのような集合施設があってそこでものが売られていたようだが、それが、いわば商店街として街角にまで侵食するという事はなかったよ

うだ。(写真4)



写真4. 旧東ドイツ地域の街角(典型的な東地域の集合住宅)

もちろん、ものがあるということは豊かだということでもある。だが、はたして物があることが即豊かなのだろうか。旧東地区にいても、ぼくはそれほど不便を感じることはない。では、物質と豊かさとはどういう関係があるのか。そんなことを考えさせられる。

「東」のあり方から考える未来

じつは、ぼくは旧東ベルリン地域の雰囲気こそそれほど嫌いではない。

というかむしろ、そちらの方を好む感じもある。物が無いことは、苦しみもあるが、ミニマムな暮らしというものを保証したうえでなら、それほど

悪くないかもしれないかもしれないとも思う。

もちろん、旧東ドイツには、相互監視の問題や、言論の自由の非存在などの負の側面があったことも確かだ。国家の威信を高めるために、オリンピック選手に副作用を伴うドーピングが行われるなど非人間的な側面もあった。だが、社会主義が、旧東ドイツの人々に受け入れられたという側面があったのも確かであり、それは、社会そのものの在り方や、未来の社会の望ましい在り方のビジョンのある側面が人々に受け入れられていたからであつたのに違いない。

街の雰囲気だけを考えるならば、それは悪くない感じもあつたように思われる。よいところは伸ばし、悪いところは改めればよい。

グローバリゼーションが行き過ぎ、地球環境問題が引き返すことができなくなっている現在、ものを求めることを追求することをやめることも必要かもしれない。そんな時に、かつての「東」のあり方はもしかしたら何かを教えてくれるのかもしれない。

寺田 匡宏 (てらだ まさひろ)

健康と栄養不良、飽食と飢餓のはざまでー東南アジアの食事を見てー

私は、地酒をはじめとする発酵食文化を探して、様々な地域を訪れている。とくに、東南アジアは美味しい料理が多いので、訪れるのを楽しみにしている。何度か滞在するうちに、東南アジアには数多くの料理があふれており、人びとの食べることや味付けへの関心が高いにも関わらず、食品の含有成分や栄養価、健康効果への関心が低いことに気が付いた。

お米食いなカンボジア農村の人びと

カンボジア・コンポンチャムにある小さな病院を訪れ、出産を終えて病院に入院している女性と話していた時のことである。彼女は近隣の農村に暮らしている20代の女性で、4日前に2人目の子供を出産していた(写真1)。妊娠中に撮ると良い食事について尋ねたところ、「お腹をいっぱいにするのが大切だわ。赤ちゃんに栄養がいくように、お米を沢山食べるようにしなくちゃ」と語った。私が、「野菜や肉も食べてね。肉がなければ、魚や豆でも良いから。これから母乳を与えなければいけないし、是非、やってみて」と勧めると、彼女は「どうして？野菜や魚では、お腹がいっぱいにな

らないわ」と不思議そうに尋ねた。彼女は野菜も魚も腹持ちが悪いので、栄養価が低いと考えているようであった。私が、「米も野菜も肉も、それぞれ含まれている栄養素が違うから、いろいろ食べた方がよいよ」と勧めると、彼女は「わかった。なるべく野菜を食べるようにするわ。今は肉も魚も無いけれど、プラホップ(prahok)を毎日食べているから大丈夫ね」と言った。



写真1. カンボジアの農村

プラホップは、川魚の内臓と取り出して塩漬けにした調味料である。日本の味噌や醤油のように、おかずの味付けに用いたり、そのままご飯にかけたりと、カンボジアで頻繁に食べられる。しかし、実際に調理しているところを見ると、プラホップを少ししか加えていなかった。農村に暮らす人びとは、朝と夕方に大量の白米とプラホップで味付けした青菜を食べ、昼頃には間食として、フルー

ツヤバナナチップスなどを食べていた。川魚が大量に取れる季節には、よく魚が食卓に上る。しかし、それ以外の季節では、野菜やキノコ、豆類をブラホップで味付けしたおかずと一緒に、大量の白米を食べているという。

東南アジアに暮らす人びとは、お米食である。ベトナムやタイなどでも、少量の青菜の炒め物や青菜とキノコが入ったスープなどと一緒に、大量の白米を食べる。栄養源は米に偏っているが、栄養失調になるほどではない。彼らは大量に食べる米から、活動に必要なエネルギーや諸栄養のほとんどを摂っているようである。肉類や乳製品、豆類と比べると、米はタンパク質や脂質が少量しか含まれないが、とにかく1日に大量の米を食べるので、身体機能の維持や活動が可能なのだろう。

ドリアンを食べるマレーシアの妊婦たち

東南アジアでは、多種類の食材を摂ることが健康に良いということや、食材に含まれる栄養素についてはあまり知られていない。しかし、カンボジアやベトナム、タイの農村のように、昔からの伝統的な食文化の中には、栄養失調を回避する術が盛り込まれている。

マレーシアで有数の観光地であるキャメロンハイランド近郊の小さな病院では、妊婦を対象とした食事指導が実施されていた。参加者は、病院ま

で車で約2時間の農村に暮らす10代後半～40代半ばの少数民族の妊婦たち7人であった。彼女たちは中学や高校までの学校教育を受けているが、カリキュラムに食育は含まれなかったという。マレーシア農村では、栄養不足による経産婦の疾病や、母体が栄養不足なため含まれる栄養が十分でない母乳で育った乳幼児の発育不良が問題視されており、この施設では妊婦を対象とした栄養に関する指導と粉ミルクの無料配布を実施している。しかし、参加者から話を聞くと、この講義への参加目的は無料で配布されるミルクであり、栄養や健康への興味は低かった。職員が言うには、彼女たちの暮らす農村まではインフラが整っておらず、村内に食品量販店はなく、家庭に冷蔵庫をもつ家は少ないため、季節に左右される食事内容となり、季節によっては出産直後に栄養価の高い食事を摂ることは難しいということだった。そこで、無料で粉ミルクを配布し、乳幼児だけでも、バランスの取れた栄養を与えるとともに、母親たちに少しでも健康や食事栄養に関する知識を広めようとしていると話していた。

しかし、妊婦たちに話を聞くと、かなり栄養価の高い食事を摂っていた。お腹にいる赤ちゃんを育てるためにどんな食事を食べているのかと質問したところ、多くの女性は「ジャックフルーツやマンゴーなどのフルーツをよく食べる」と答え、なかでもドリアンを食べるのが良いという。「ドリ

アンを食べると良いのよ。今はドリアンの収穫期で、美味しいドリアンがたくさん実るの。立派なものはお金のために売るのだけれど、残りは赤ちゃんの分のためにも私が優先して食べるのよ」と言っていた。果物の王様と言われるドリアンは、強い匂いがあり、持ち込みを禁止しているホテルもある（写真2）。しかし、彼女たちはドリアンが大好きなようで、「ドリアンを優先的に食べられるのは、妊婦の特権なのよ」と嬉しそうに話す。



写真2. ドリアン

ドリアンは栄養価が高くカロリー源として優れるうえ、タンパク質や脂質、ビタミンも豊富に含まれている。ドリアンの堅い皮を包丁で割ると中には、果肉に覆われた複数の種子が収まっている。可食部の果肉はこってりとした濃厚な味わいで、1粒食べるだけでも満足感がある。日本人には珍しく私はドリアンが好きで、勧められるまま8粒も食べてしまった。しばらくすると眩暈がした。

後日、この時の体験をインドネシアの友人に話したところ、「ドリアンを8粒も食べるなんてバカだな。1回につき3粒までにしなさい。ドリアンは高カロリーだから、急に血糖値が上がって眩暈がしたのだろう。私も、ついついドリアンを沢山食べると、眠くなる」と語った。彼の話は、本当かどうか疑わしかったが、マレーシアやインドネシアの人びとは、ドリアンに含まれる栄養成分は知らないが、ドリアンを食べると元気になると認識している。果実は総じて栄養価が高い。人びとは、妊婦や病人、子供に優先して、果実を食べさせていた。農村で暮らす人びとは、常に栄養価の高い食材が手に入るわけではないが、手に入る食材から必要な栄養を摂れるような食習慣をもっていた。



写真3. テンペ

インドネシアの人びとを太らせる大量の砂糖と油

一方、都市では飽食による健康問題が深刻化し

ている。インドネシアの人びともお米が大好きで、大量の白米を食べる。そして、彼らはテンペ(Tempe)と呼ばれる茹でた大豆をクモノスカビで発酵させたものを好み、男女20人ずつに聞き取りしたところ、1日平均280gも食べていた(写真3)。調理方法は多様で、唐辛子とオイスターソースを加えて炒めたり、両面を焼いてソースをかけたり、スープにキノコや野菜と一緒に加えたり、揚げたりする(写真4)。彼らは、このテンペと野菜を使ったオカズと一緒に大量の白米を食べる。大量の白米からエネルギー、テンペからタンパク質や脂質、一緒に調理される野菜からビタミンや食物繊維をとっており、栄養バランスに優れた食事内容となっている。



写真4. テンペを調理する女性

しかし、インドネシアの都市部では、生活習慣病が増加傾向にある。確かに、農村では細身の人びとが多いが、都市ではふっくらとした人が多くなる。都市部のジョグジャカルタでの調査を手伝ってくれていたガジャ・マダ大学に通う男女と食事を共にして、すぐにその原因が砂糖と油だと気が付いた。都市に暮らす人びとは、とにかく砂糖をよく使い、揚げ物を食べる。ほとんどの料理には砂糖が加えられており、有名なインドネシアの串焼き料理であるサテ(sate)も砂糖を加えた調味料で下味をつけるか、砂糖とピーナッツを使ったソースをつけて食べる。お茶を飲むときは、コップの1/3に砂糖を加えている。気温は平均約27℃と高く、水分摂取のために、頻繁に砂糖入りのお茶を飲む。甘い物が大好きで、日本製よりもはるかに甘いチョコレートやクッキー、ケーキを間食として食べながら、ジュースを飲む。揚げ物も大好きだ。友人宅を訪ねると、揚げ物をご馳走してくれることが多く、市場に行くと様々な揚げ物が売られている(写真5)。



写真5. 市場で売られる揚げ物

インドネシアの人びとが心から愛するテンペも、揚げ物として食べることが多い(写真6)。塩を効かせたテンペのフライは、噛み応えがあり、不思議な食感で癖になる。都市の人びとは、日常的に大量の砂糖と油を摂るようになったため、ふっくらした体形の人や生活習慣病の人が増えているのだろう。



写真6. テンペのフライ

もしかすると、油や砂糖の日常的な過剰摂取が健康に良くないのを知らないのかと考え、アシスタントの男女と話してみた。すると二人とも油と砂糖を摂りすぎると太ることは知っていたが、「どれくらいの量で摂りすぎになるのか」や「油ものを食べるときは、野菜と一緒に食べる」といった日本で一般的な情報はもっていなかった。そのため、コップの1/3まで砂糖を入れると、砂糖の摂りすぎだとは考えていなかった。2人は「これから

気を付ける」と言っていたが、子供の頃から砂糖や油を摂り続けて形成された食への嗜好を変えるのは難しいように感じた。

飽食が理由ではないフィリピンの肥満

経済発展と食材へのアクセスの容易さから、食に関する知識の欠如による肥満がみられる一方で、偏った栄養摂取による肥満もみられる。フィリピンの首都マニラのスラム街を訪れる機会があった。スラムはジャングルのような造りで、複雑に絡まった電線が頭上すれすれに張り巡らされ、路上では子供と一緒にニワトリが駆け回り、隙間なく建てられた家屋の中では父親がご飯を食べている横で豚が餌を食べていたり、まるで不思議の国のようであった。共用の水場で洗濯する人びとや路地を駆け回る子供たちは明るく、私たちが想像するような暗いスラムの空気はかけらもなかった。

彼らの体つきをみると、子供たちは細身であるのに反して、多くの大人たちはお腹周りに肉が付き、失礼ながら中年太りと言われるような体系をしていた。初めは、子供は動き回っているので痩せており、大人たちはあまり動かないので太っているのかと思っていたが、彼らと話すとすぐにそれが間違いだと気が付いた。30~50代の10人の男女の食事内容を聞き取りしたところ、コメやパン、パスタ、スナック類、ビスケット類を多く摂

っており、野菜や肉、乳製品をあまり口にしないことがわかった。理由を尋ねると、「冷蔵庫がないので、野菜や肉はすぐに傷んでしまい、使い勝手が悪い」「(傷んだ物を食べると) たまにお腹が痛くなってしまうから」とのことであった。美味しいことや安全であることから、魚や豆、肉の缶詰の方が好きで、たまに食べると語っていた。しかし、缶詰を食べることは稀で、なんと10人のうち2人は、野菜や肉類を3日前から食べていなかった。どうやら、パスタやビスケットは無料で配給され、米やスナック、パンは安価で手に入るため、澱粉質の食材を優先して摂る傾向にあるようだ。低所得者が、でんぷん質な食材に栄養を依拠する事象は、世界的に見られ、アメリカの低所得者はスナックやコーラを多く消費することは、よく知られている。

食生活を考える

日本人は健康や食に非常に関心が高い国民であると言われ、健康や食に関するテレビ番組が放映され、数々の書籍や雑誌が出版されるなど、誰でも気軽に健康や食に関する情報を得ることができている。このような国は稀で、多くの国では健康や食についての関心は高くない。美味しいものを食べることへの関心は高いが、その食品を摂ることによる身体への影響については、ほとんど注目され

ておらず、情報源も少ない。

昔から、多くの日本人が健康への意識が高く、食事内容に気を配っていたわけではない。江戸時代の日本の農村では、根菜を混ぜた雑穀や玄米を5合と、大根の漬物、味噌汁の組み合わせを毎日食べるのが普通であった。少量の漬物や味噌汁で、大量の米を摂るところは、東南アジアのお米食いの食文化と似ている。日本人の間で健康や食への関心が高まり、多品目から栄養をバランスよくとることを目指すようになったのは、戦後のことである。戦後の経済成長と技術革新、インフラの整備などが、多品目摂取を可能にした。現在、東南アジア各地には、自然環境や人びとの生業形態、経済状況、社会、文化、宗教などによって異なった栄養摂取の有り方が存在する。しかし、グローバル化が進むなかで、東南アジアでも、米の消費量が低下し、様々な食材を食べるようになっていくのかもしれない。

世界の飢餓人口の割合が低下している一方で、食が豊かになったことによる生活習慣病が深刻化している。世界で栄養不良な人びとが8億人存在するのに対して、肥満は21億人も存在する。そして、肥満には栄養過多の肥満と、栄養の偏りによる肥満が存在する。飢餓が解決された一方で、生活習慣病が生まれているように、これからも食と関連した問題が発生し、解決されるというサイクルを繰り返す中で、食文化も消滅したり、再編成

されたり、新たに誕生していくのだろう。刹那的に食文化を見てみると、今、私たちが食べている東南アジア各地の食事が、その時代を象徴する貴重なものであると考えさせられる。

砂野 唯（すなの ゆい）

マルーラの季節－南アフリカ北東部におけるマルーラの利用と商品化－

早朝の住宅街で、スーパーマーケットのカートを押す女性の姿が目にとまった。カートの中には、ばんばんに膨れた大きな袋がいくつか入っている（写真1）。マルーラの果実を集める女性である。南アフリカ北東部の小さな地方町ファラボルワで、2月から3月にみられる日常的な光景である。マリアさんというその女性に話をきくと、夜明け前の暗いうちからマルーラの実を拾い集め、一度朝食の休憩をとるのだという。



写真1. カートを押すマルーラの実を集める女性

マリアさんは町の郊外に位置するタウンシップに住んでいるが、驚いたことに、ここ数日は町中

の公園に仲間と一緒に寝泊まりし、毎日毎晩マルーラの果実を拾い集めているという。彼女の話によると、マルーラが実をつけるこの季節、多くの女性たちがこの実を採集する活動に時間を費やしている。

マルーラ (*Sclerocarya birrea*) とは、アフリカ大陸やマダガスカル島に自生するウルシ科の落葉広葉樹である。直径5cmほどの大きさの黄色い果実（写真2）を大量に結実する。その季節になると、樹冠の下に黄色の絨毯を敷いたような鮮やかな光景があらこちらでみられる。その果実には、爽やかな甘い果汁が豊富に含まれる。



写真2. マルーラの果実

果汁は自然発酵して酒になるため、ナミビアや南アフリカなど、いくつかの地域でマルーラ酒を飲む文化がみられる。果実をつけるのは一年に一度である。雌株の一個体が一回の結実期につける

果実の個数は、南アフリカで実施された研究によると、村落に生育する樹木で1万7千個以上であり、果汁に換算すると約93.5kgに相当する。人々は、マルーラの種子や葉、幹など果実以外の部位も様々な用途に利用する。

南アフリカで利用されるマルーラ

ファラボルワ町やその周辺地域に暮らしているソトやシャンガーニなどのエスニック・グループは、昔からマルーラの実を食用に利用してきた。マルーラの季節になると、各世帯で実を集めて果汁を搾り、数日間発酵させてつくった醸造酒ブカニを飲む。各世帯の性別分業のなかで、果実の採集と酒づくりは女性の労働とされてきた。各世帯の女性たちは、この季節になると毎日のように果汁を搾り、ブカニをつくる。ブカニは少し白濁した果実酒で、ほのかに甘い香りがするおいしいお酒である。女性たちは木陰に集まり、山盛りになったマルーラの果実の傍らで、ヤギの角やフォークなどで果実から種子をとりだし、果汁を搾る(写真3)。果汁は数日おいておくと自然発酵し、時間がたつにつれてアルコール度数が高くなっていく(写真4)。

通常飲むのは2~3日経過したもので、アルコール度数は5%前後である。これらの酒は個人で飲む場合も多いが、友人や親族など世帯以外の人々が

集まり、共飲されることが多い。この地域では、成人の多くがこの時期にこの酒を好んで飲む。



写真3. マルーラの果汁を搾る女性



写真4. マルーラ酒(醸造酒)

また、種子の中に含まれるナッツ（仁、写真5）が食用とされ、生で食べられると同時に油の原料として利用される。果汁を搾り終わった後に大量の種子が残るため（写真6）、乾季の間にナッツを取り出す作業が行われる。

ファラボルワ町は、町はずれに位置する鉱山の操業や隣接するクルーガー国立公園の観光拠点として発達してきた。同国でアパルトヘイトが進められた時期に、町の中心部は白人の居留地となり、その周辺部に黒人居留地であるタウンシップが複数作られた。また、それ以外の場所には、白人の私有地が点在するとともに、集落と共有地が広がっている。それらのいずれの場所にも、いたるところに多数のマルーラの木が生育している（写真7）。特に、共有地やタウンシップでは密度が高く、ファラボルワ町のなかにも道路端や公園、住宅の敷地内に多くのマルーラの木が生えている。これらの木は、人々が果実を採集するために残しておいたものが多い。



写真5. マルーラのナッツ（仁）

住民は木を植えているわけではないが、昔からマルーラの果実を利用してその種を意図的／非意図的に散布してきた。そして、人々がそれらを伐らずに維持してきた結果、他の樹木に比べて相対的に数が増えてきたという。また、マルーラの木を地域の共用物として扱い、本地域を治めるチーフ（伝統的指導者）が伐採を禁止してきたことも、多くの木が残されている重要な要因である。



写真6. 乾燥中のマルーラの種子

南アフリカでは、チーフやヘッドマン、王など、地域のコミュニティやエスニック・グループを統治する様々な立場の人々を“伝統的指導者 Traditional leaders”として国家の法律の中に位置づけている。彼らは、現在でも地域の資源管理などに重要な役割を果たしている。もともと、本地域のソトやシャンガーニは、マルーラ酒に地域社会のなかでの特別な意味を付与してきた。ある

年に最初に作った酒は住民からチーフに貢納され、それらの酒を試飲する儀礼が毎年行われる。その儀礼が終わると、人々は酒を飲むことが許される。地域の人々はマルーラの果実を利用することはできるが、その所有者はチーフであり、チーフによってマルーラの木は厳格に管理されてきた。人々はチーフに酒を貢納し、チーフはその酒をふるまい酒としてコミュニティのメンバーと共飲するパーティーを開催する。マルーラ酒は地域の人々を結び付け、社会的な権威とも結びつく酒なのである。



写真7. 村の景観（高木の大部分がマルーラ）

商品化されるマルーラ

近年では、マルーラが自生するアフリカの各地でマルーラの果実やその加工品を商品化する動き

が盛んである。マルーラの果汁からつくった酒や種子から抽出したオイルは企業によって商品化され、ナミビアや南アフリカなどの国内市場のみならず、海外市場に向けて販売が進められている。空港の免税品販売店や首都の土産物屋などで目にする機会も多く、地域の特産品としての地位を固めつつある。日本でもこれらの製品が輸入され、リカーショップや化粧品店、インターネットなどを通じて販売されている。

マルーラ加工製品として特に有名なのは、“アマルーラ”という商品名で知られる酒（リキュール）である。南アフリカ大手酒造メーカーのディステル社が開発し、世界100か国以上に輸出されるブランド品である（写真8）。

1983年にマルーラ酒の工場がこの地域に建設された。アマルーラは、マルーラの果汁を2回蒸留し、それにクリームを混ぜたのちにオークの樽で2年間寝かせてつくられる。原料の調達と醸造、蒸留の工程をこの工場で行い、その後はケープタウンに輸送され、最終的にはケープタウンで製品化される。アルコール度数は17%程度であり、現地の人々が飲んでいる醸造酒とはアルコールの強さも味も全く異なる。蒸留というプロセスがあるため、この製品を作るためには大量の果実が必要となるが、驚くべきことに、マルーラの果実は全て野生のものを使用し、工場が有する果樹園などは存在しない。現地の人々が2月から3月にマルー

ラの果実を拾い集め、それを工場が定額で買い取って加工し、世界中で販売している。マルーラの木が大量に生育しているという地域の特徴を活かした産業である。



写真8. タンボ国際空港（ヨハネスブルグ）のアマルーラの看板

近年では、マルーラを観光や地域振興の文脈で活用しようとする動きもみられる。昔から地域で行われていた、チーフによるマルーラ酒のふるまい酒が地域のイベントとして実施されるようになり、アマルーラ工場や自治体などが参加して大規模に行われるようになった。このイベントは、ふるまい酒にとどまらず、マラソン大会などのスポーツイベントなどとあわせて毎年2月の最終週に“マルーラ・フェスティバル”として開催され、国内外の観光客も集まる地域の一大行事となっている。

マルーラの採集活動

マルーラの果実を拾い集めるのは単純作業であるが、重労働である。しかも、その作業を担っている大部分は、他に職を持たない高齢の女性や寡婦であった。男性は正規職や別の賃労働などに就いている場合が多く、2か月程度の期間限定で歩合もそれほどよくない重労働にあまり魅力を感じていないようであった。また、従来の性別分業のなかで、マルーラ酒をつくるのが女性の労働とされてきたため、男性が参入することに抵抗があると述べる人もいた。他方、職に就いていない女性たちは、果実を拾ってこの時期にお金を稼ぐ。マルーラの木はいたるところに生えているが、村や個人の敷地に生えているものは所有者が決まっているため、誰でも採集できるわけではない。狙うのは、公園や道路沿い、オープンスペースなどに生えている木の果実である。ファラボルワ町の一角には、タウンシップや村から果実を拾いにやってきた女性たちのキャンプがこの時期だけつくられる。50人ほどの女性たちが寝泊まりし、炊事などを当番で行い、仮眠をとって昼も夜も果実を拾い集める。冒頭で紹介したマリアさんもこうした女性たちの一人である。カートと共に町を練り歩き、大きな袋に果実を集めてキャンプに持ち帰り、一度実を置いて再度拾いに行く。拾った果実を工場に持っていくのも一苦勞であるが、電話で

連絡すると工場のトラックがやってくる。そして、採集者と一緒に工場に行き、果実の重量を計測し、重量に応じた代金が支払われる。このような労働で、多い人では週に日本円で一万円程度を稼ぐという。他に仕事をもたない女性にとっては重要な収入源である。しかし、重労働のわりに買い上げ価格が低いと不満を持つものも多い。

一方、アマルーラ工場以外でも、マルーラの果実を利用する人々は多い。道路端ではマルーラの醸造酒を販売する露天商がいる。売り子の多くは女性である。マルーラ酒を販売していた女性に話を聞くと、果実をそのままアマルーラ工場に売るよりも、酒にして販売した方が儲かるのだという。彼女は、一日の時間のうち、午前中と夕方の時間に道路端でマルーラ酒販売を行い、それ以外の時間にはカートを押して町中にマルーラの実を拾いに行っていた。そして、拾い集めた果実を店の脇に置き、客がないときには果汁搾りをしていた。

また、マルーラ・フェスティバルの振る舞い酒のため、自治体が数トンにおよぶマルーラ酒を買い取っている。その酒は6か所の地域に設立された共同組合から購入しているが、その組合の構成員も全て女性であった。彼らは村のなかで果実を拾い、組合の加工所で果汁を搾り、自治体に販売している(写真9)。こうしたなかで、マルーラの果実をめぐる競争が少しずつ高まっている。



写真9. マルーラ酒を販売する組合の作業風景

商品化の意義と課題

在来の非木材林産物を企業などと提携して商品化し、グローバル市場や土産物として販売する動きはマルーラに限ったものではなく、アフリカではシアやバオバブなど、多様な植物で見られる。こうした製品が開発され、新しい現金稼得源が生み出されることは、地域の人々にとって歓迎される向きもある。個人で果実を採集して工場に持ち込む人もいれば、組合を作って酒をつくる人、個人で酒をつくらせて露天商として販売する人など、その活動も多様化している。

こうした状況を見ると、非木材林産物の商品化は住民の現金稼得源の多様化やエンパワメントを促進し、住民に貴重な現金稼得源を提供しているとみることもできるだろう。しかし、見方を変え

ればアパートヘイト期の経済構造の遺構と捉えることもできる。マルーラの果実を採集する人、酒をつくって販売する人の多くは他に収入源をもたない女性であり、他の職種に就けない事情を抱えている人も少なくない。マルーラの買い取り価格が低いいため、こうした活動に参画することをためらう人も少なくない。企業が自社の果樹園をもたず、一般の人から買い上げるシステムにしているのは、果実の買い取り価格を低く設定し、コストを抑えている状況もうかがえる。果実の買い取り価格が、女性の労働強度に見合っているのか、構造的な経済システムのなかで労働の搾取が行われていないか、注視する必要がある。

過度な競争を伴わない商品化

一般的に、ある資源が商品化されると、資源をめぐる競争が生じることや、慣習的な資源利用ルールの変化がおきることで社会の亀裂を生み出す可能性など、負の影響が生じることも指摘されている。しかし、ファラボルワで話を聞いている限り、深刻な問題を指摘する声は聞かなかった。その背景には、どのような事情があるのだろうか？ ひとつには、本地域には膨大な数のマルーラの木が生えているため、資源の供給量が十分にあることがあげられる。現在の果実の採集は手作業で行われているため、果実を拾う作業が資源量に対し

て追いついておらず、資源をめぐる競争はそれほど激しいものにはなっていない。また、マルーラの木は、個人の敷地などに生えているため利用権を有する者が限定される木や、公園などに生育しているため誰でも利用可能な木、というように、多様な権利関係が付与された木々が生育している。そのため、ある個人がマルーラの果実を利用する際に、いくつかの選択肢があるため、仮にひとつの選択肢が利用できなかったとしても、他のアクセスチャンネルを使って資源を入手できる状況にある。このことも、資源をめぐる競争を招いていない要因の一つであろう。

本地域のマルーラは、昔から伝統的指導者がその利用をめぐる大きな影響を及ぼしてきた。そのため、人々の認識の中で、マルーラの利用をめぐることは少なからず伝統的指導者の存在と結び付けられている。例えば、酒を飲み始める時期やマルーラの木の種類、組合の立ち上げや外部からの買い付けなどの際、様々な場面で伝統的指導者が一定の役割を果たしている。マルーラの商品化が進む一方、伝統的指導者による資源利用に関わる文化や社会制度もまた地域のなかに息づいている。マルーラの季節は、マルーラ酒の利用を通じて、自分たちの社会のなかで受け継がれてきた文化や社会の仕組みを再認識する時期なのかもしれない。

藤岡 悠一郎（ふじおか ゆういちろう）

なにげない、ひとこと

はじめに

昔々、とある人から「歴史の教科書とかに載っている人(例えば、武将)って偉いと思うか」と聞かれたことがある。もちろん「偉いやろ」と答えた。すると、とある人は「確かに偉いと思うけど、彼らを支えた人々(=教科書に名前がない、もしくは「ただの人」)もいるわけで、歴史に名を残していない人々が、歴史に名を残した人を支えたような気がするんや、ざっくり言うと、みんな一緒に、誰も偉くないような気がするんや・・・しらんけど」と、当時の自分にはわかったような、わからんような会話があった。このことが影響したのかどうか、定かではないが、自分は話をするとき、地位や役職をあまり気にしすぎず、人と話をするようになったような気がする。

今の仕事の関係で、私は国内の農村で現場の方とよく話をする。もちろん、論文作成や調査研究のために事前に約束をしてヒアリングをすることが大半ではあるが、一方で何となくその辺に座っているおじいさんやおばあさんなどと雑談をすることもしばしばある。同行した方々には、少し迷惑をかけていると思う。今回は、そのようななかで印象に残っている言葉を紹介する。

とりあえず・・・

私は大都市から地方へ家族3人で移住した経験がある。若干30歳だった。人口激減の地方都市、単純計算で1日あたり2人の人口減の地方自治体であり、中心市街地(人口密集地域の商店街のある地域)も、漁村も、農村も、山村も含まれていた。都会から来た自分は農山漁村の活性化のために何ができるのかと考えながら、移住当初、様々な取り組みを考えていた。実際、新商品開発や販路拡大に向けた商談会などに取り組んだが、思った以上に成果はあがらなかった。少し悩んでいたその時。当時の上司から飛び出た言葉がコレ。「あんまり無理せんと、とりあえず、ここで楽しく家族で暮らしてくれたらいいよ」。確かに、地域活性化のために何かしなければならなかったと思っていた自分にとって、楽になった言葉であった。それ以降、自分が農山漁村の活性化には何の役にも立たなかったが、5年ほど楽しく暮らした。

料理人は・・・

その地方都市の管内にある山村で、自分より本気で移住し、地域のために生きてきた方の話である。その方は相当腕のいい料理人である。地域の食材やその食材の取り方、地域の伝統行事や風習、そこに住む人々の人間関係までを熟知している。

自分はよく、その方のお店でお話しを聞いた。なぜ、移住してきたのか、移住してどのように地域に馴染んだのか、今後の山間部はどうなっていくのかなどである。自分は移住して「カフェ」を開き、地域の食材を観光客に提供することも考えていたなかで、「手に職のある腕のいい料理人はいいですね」と言ってみたその時。その方から飛び出した言葉がコレ。「料理人は寄生虫みたいなもんですよ」。農林漁業や農山漁村のことを何とも思わず、都市で腕のいい料理人になって、お客さんに「おいしい、おいしい」と言われても、食材（原材料）がないと料理人は成立しない。「もしかすると素材や食材を調理せず、そのまま食するのが、一番おいしいのではないか、そう考えると、料理人は農業や農村に寄生する寄生虫みたいだね。たまに何なんだかなあと思う時がある」、「だから自分は食材のある田舎に住んでいる」とおっしゃっていた。



写真1. 山村にあるカフェからの景色

「岸上さんもここ（山村）で、暮らしたらどう？」と言ってくくださったが、自分は10年ほどたった今でも、都市部に住み、山村のお店にたまに通う単なるお客さんである。



写真2. とある山村の景色

困ったことは・・・

大雨で被災した山村に支援隊として行ったとき、避難所（公民館）にいたおばあちゃんから聞いた言葉である。台風の影響で記録的な豪雨になり、洪水や土砂崩れが発生し、多くの道路や橋、河川護岸などが損壊していた。また、河川の氾濫や土石流などにより、たいへんな被害があった。本当にたいへんな状況だった。その時、自分は救援物資の搬送やゴミ処理、泥かきなど、さまざまな作業を行った。少し落ち着いた頃、避難所（公民館）にいたおばあちゃんに「何か困ったことはないで

すか」と聞いてみた。その時、おばあちゃんから飛び出した言葉がコレ。「困ったことは、特にないよ。こんな状況のなかで、たいへん不謹慎とは思いますが、楽しいくらい」。

被災前のおばあちゃんは、一人暮らしでお話する機会も少なかった。避難所では、水や食料などはいろんな人が届けてくれる。実は谷水（山から湧き出て流れる水）はすぐに濁りがとれ、飲み水として利用できるし、山菜などの食べ物は山にある。お風呂もドラム缶で五右衛門風呂ができる。20～30年前、私が若いころに戻ったみたい。

別にテレビがなくても、冷蔵庫がなくても、大丈夫。そして、何より、みんな（子どもや孫と同じくらいの人たち）と食事ができて、みんなが「おばあちゃん、大丈夫か」と朝晩に声をかけてくれる。被災して本当にたいへんな状況で不謹慎だと思うが、「そんなに困ってないよ」と言っていた。自分は「被災＝困ったことが必ずある」、そして、その困ったことを自分たちが何とかしてあげたいと思っていたが、予想だにしない言葉だった。山村で暮らしてきたおばあちゃんにとって、水や食料の確保は比較的容易であることは当然と言えば、当然かと思えたり、山村の暮らしの豊かさを感じた。また、被災時の集団生活すら、苦痛と感じない時期もあるのかと考えさせられた。もちろん、一般的に大雨などで被災した場合は、この話は当てはまらないことは想像できる。余談であるが、

当時、活動を終え、災害対策本部（的などころ）でこの話をすると、そこにいた偉い方は「そんな話はいらない、困っている人の話を聞いてこい」と少し叱られた。



写真3. 川の合流点(写真上の山からはきれいな水、写真下は濁った水)

そんなこんなで

実に、他愛もない話をしてきたが、以上の話は決して著名な方々のお話しではないし、なんの参考にもならないだろう。ただ、今後も、仕事の関係だけでなく、「ただの農家さん」や「その辺の人」の話を聞き続けたい。また、何より「農山漁村で暮らすこと」はすごいことだなと思っている。職業柄、農山漁村の重要性を訴えているが、何度もお誘いがあったにも関わらず、結局、今の自分は農山漁村で暮らしていない。なんだかなど、ふと思う。

そして、今日も農林漁業の振興や農山漁村の活性化を訴えている。複雑な気持ちである。

岸上 光克（きしがみ みつよし）

ケニアルオの人々の「死」にまつわる話

コロナ禍に見舞われた 2020 年は世界中の人々の記憶に残る歴史的な年になったといえるでしょう。21 世紀の現在、AI やドローン、再生医療など様々なテクノロジーが発達し、医療も格段に進歩しています。日本国民の約 2 人に一人が亡くなるガンも 2, 30 年前と比較すると不治の病という印象は薄れ、早期に発見し、適切に治療を施せば完治する病気にまでなっています。このような時代にあって、新型コロナ感染蔓延は良くも悪くも以前はほとんど意識することがなかった「当たり前」の日常がつづくこと」のありがたさを人々に再認識させ、さらに「死」やその先の「死後の世界」について考える機会を多くの人に与えたのではないのでしょうか。

ケニア西部のビクトリア湖岸地域で生活する民族ルオの人々は死や葬式にまつわる独特の考え方や慣習を持った人々です。ここでは東アフリカに位置する国、ケニアで牧畜と農耕を営むルオの人々の「死」に関する考え方や慣習等を紹介しましょう。

ルオの村

ビクトリア湖はアフリカ最大の湖で、ケニアの西部に位置し、ケニアの他にタンザニアやウガンダとも面しています。ビクトリア湖の東岸に広がる標高約 1000m ほどの平原はルオランドとも呼ばれ、ナイロート系の牧畜民を起源とするルオの人々の居住地域になっており、人々は牧畜と漁労、トウモロコシや湖岸に近い場所ではイネも栽培し、農耕を中心とした暮らしを営んでいます。

訃報を知らせるラジオ放送

ルオの人々にとって死は非常に身近です。貧しい村の生活の中では多くの人にとって情報を得る手段はラジオです。この地域ではルオ語のラジオ番組があり、毎日亡くなった人の名前と親族の名前が放送されています。人々はこの放送で誰がなくなったのか毎日チェックしているようです。土曜日は村のどこかで誰かのお葬式が行われており、人々はラジオを聞き知人や親せきのお葬式に出かけます。ルオの人々は葬式の準備が整うまで遺体は死体安置所で保管しておきます。そして、準備が整えばご遺体を葬式会場である自宅までお葬式の前日の金曜日にバンをチャーターし運びます。

ルオの葬式

一年間ルオの村で暮らしましたが、結婚式はあ

ると聞いていますが一度も見たことがありません。でも、葬式は毎週のように行われていました。葬式には写真1のように大勢の人々が弔問に訪れ盛大におこなわれます。オジャンボおじさんによると、天寿を全うして死を迎えることはめでたいのだそうです。そこでは彼らにとって貴重な財産である牛やヤギ、ヒツジなどが屠殺され、調理され、訪れた客にふるまわれます。



写真1. ルオの葬式に訪れた弔問客



写真2. 葬式で弔問客に振る舞う調理をする人たち

写真2は料理を調理している様子です。調理を担当しているのはプロの調理人です。村の生活では肉はごちそうです。葬儀には肉にありつこうと近所の人が訪れることもあるようです。これは昼間の様子ですが、夜は大音量の音楽が流され、3日3晩皆で踊りを踊ってどんちゃん騒ぎします。残念ながら実際には見たことがありません。

厳格に決められる埋葬場所

遺体は基本的に屋敷地の中に土葬されます。しかも世帯の中の誰が亡くなったかによって母屋との関係で埋葬場所がまっています。世帯主は母屋の近く、第一夫人や第二夫人もそれぞれの家屋の近く、嫁入り前の娘に至っては災いをもたらすという理由で屋敷地の外に埋葬されるそうです。また、屋敷は一代限りで放棄されます。後を継ぐ息子たちは父親の屋敷以外に自分の屋敷を構えなければなりません。この慣習は徐々に変わっては来ているようですが、父親が亡くなった後は父親の屋敷地に息子やその家族が住むことタブーだと考えられています。そこで、父親の屋敷は放棄され、耕作地として利用されます。写真3は湖岸近くのルオの人々が耕作する水田です。水田の持ち主の先祖の墓が見て取れます。墓の周りをよけイネが植えられています。



写真3. 水田の中の墓

呪いの力を持つ（と信じられている）人々

最後に「死」とは直接関係ありませんが、人知を超えた力を持つと信じられている「ムロギ」と呼ばれる人たちのことを紹介します。死後の世界が科学で解明できていない限り、呪いや悪魔といった類のものの存在を完全に否定したり、ましてやそういうものの存在の人の心への影響を否定することはできないと思います。ムロギは睨むだけで食べ物を毒（食べられないもの）に変えることができる（と信じられている）人たちです。睨むだけで食べ物を毒に変えられるほどの力を本当に持っている人がいるのであれば、貧乏な村の人を恐怖に陥れる以外にもっと有効な使い道があるようにも思えるのですが、その力はなぜか身近な人に対してうらみや妬みを晴らす目的にしか使われ

ないようでした。

その一人はなぜかホストファミリーのお母さんと親しく、頻繁に訪ねてきました。彼が訪ねてくるたびに、「持っている食べ物を隠せ」と言われました。それに付き合いはしましたが、さすがにそんな力があるとは信じられず、心の中で半分バカにしていました。

ムロギが紅茶を泥水に変えた

何回目かの村での滞在期間中に例のムロギがまたやってきました。その日お母さんは留守で、留守番をしていた私にムロギが「お母さんはいないのか」と尋ねてきたので、「今日は留守だ」と答えると、時間を持て余し、近所のお茶屋へ朝食をとりに行きました。

しばらくすると、隣のお茶屋から「ウーウィ、ウーウィ」という周囲に警戒を喚起する声「ドゥル」が聞こえてきました。何だろうと思っていると、お茶屋の女店主が「ムロギがやかんに入っていたミルクティを泥水に変えた」といって騒ぎ始めていました。しばらくすると、ドゥルを聞きつけた人々が集まってきて大騒ぎになりました。今、この文章を書いているときにはそんな馬鹿なことがあるものかと冷静に言い切れます。しかし、実際にムロギが紅茶を泥水にしたと騒いでいる大勢の人々の中に身を置くと、そういうこともおこる

かもしれないと思えてくるのです。

山根 裕子（やまね ゆうこ）

タンザニアに行ったフィールドワーカーが感じること

アフリカでのフィールドワークを志したころ

筆者が初めて東アフリカのタンザニアにおける稲作農村の調査を実施しようと計画したのは今から約20年前のころであった。そのことを友人など周囲の人間に話すと、決まって「アフリカに農業技術でも教えに行くのか」と言われたことを思い出す。20年前の日本はバブルが崩壊してから約10年が経過していたが、GDPは依然として世界第2位であった。当時の多くの日本人の間には、我が国は先進国でありかつ技術大国でもあるから、日本人が開発途上国に赴くということはきっと開発の手助けをしに行くにちがいないといった認識が広く共有されていたのではないだろうか。こうした周囲の人の反応に対して私は「そうではない。アフリカには私の知りたいことがあり、そのことを知るためにはまず地域を理解しなければならない。」ということを一生懸命説明したのだが、周りの人はあまりピンと来ていないようであった。もちろん私の説明があまりに稚拙だったことが理由の一つであることは間違いないが、その一方で当時の多くの日本人の中には「アフリカから学ぶことなどあまりないではないか」という認識があっ

たかもしれないと思うのである。あれから20年の月日が経ち世界は大きく変化をした。日本とアフリカ諸国の間にも援助国と被援助国という枠組だけではとらえることができない関係性も生まれてきている。このようななかで、改めて日本人がアフリカでフィールドワークをする意味について考え、それを社会に向けて発信しなければならない時期に来ているように思うのは私だけであろうか。

話は少し変わるが最近の世界の動向は、他者との差異化や人と人のつながりの分断が強調されるようになり、互いに理解しあい共生や共存を目指そうとする社会の姿は影をひそめるようになってしまったのではないかと感じることもある。このような世界の姿を目にしている中で、思い浮かんでくるのはタンザニアにおいて生業が異なる民族同士が土地の利用をめぐる対立したもの、様々な要因が重なり合った結果、共存する手段を見出していく姿であった。本稿で書きたいことはこれまでの論文や著書で描ききれなかった人々の姿である。

キロンベロ氾濫原の農民と牧民

タンザニア中南部に位置するキロンベロ氾濫原には広大な草原が広がっていて、ここでは農民が稲作を営んでいた。1980年代後半から1990年代になるとタンザニアの北部から放牧地を求めて牧

民が移住してきた。彼らの移住は2000年代に入るとより活発になり、農民の水田と牧民の放牧地が競合することで土地争いが起こりはじめた。しかし両者の間に牧民が所有するウシによって農民の水田を耕す牛耕を媒介とした関係構築がされたことや、農民と牧民が適度な距離を保ったことで和解が進んでいった。

これまで筆者はこの和解のプロセスを記述してきたが、それを説明する中で、多くの方から民族を一括りで描いてしまうことの懸念を指摘された。またこれに似た批判的な意見には、そもそも民族という集団は明確に存在しているのかといったものもあった。筆者はこうした意見に対して、対立している牧民と農民の間には、生業、日常会話に用いる言語、居住区域、生活習慣などについて明確な違いがあることを説明したうえで、論文の中ではストーリーを明確にするため、あくまで便宜的に二つの民族を定義した。しかし当たり前のことであるが、私が定義した二つの民族は両者とも一枚岩ではなく、ごく少数の人は多数派とは全く正反対の行動をとっている事例が散見された。ただこうした人々はごく少数であったため、これらの人々の行動すべてをこれまでの論文に記載することはできなかった。長大な群像劇にならないよう「両民族は決して一枚岩ではないが、大部分の人々はこのように行動しました」というような記述をするにとどめたのである。しかし世界各地で

分断や対立、差異化が協調されており、反対にアイデンティティや利害が同じならば団結して他者と争うべきだという排他的な集団を形成する声も高まっている現在、私が思い出すのは農民もしくは牧民に帰属しながらも多数派とは一線を画した少数派の人々の行動である。

多数派とは異なる行動をとる少数派の人びと

農民と牧民が土地利用で対立していた時、どちらの民族も多くは相手の民族の集落に近づかないようにしていた。服装や日常言語が異なる彼らが相手の集落に近づけば、それだけで石を投げられたり、暴行を加えられたりする恐れがあるからである。しかし部外者でどちらの集団にも帰属していない私は、こうした状況でもどちらの集落にも訪問することができた。農民の集落に住んでいた私はある日、牧民の集落に行き、予定していた調査を終えて農民の集落に帰る途中であった。牧民の集落のはずれに差し掛かるとスワヒリ語でクラブーニと呼ばれる酒場がこしらえられており、牧畜民とみられる男性が酒を飲みながら談笑している姿が見えた。

私が軽く挨拶をして通り過ぎようとする時、お前も少し飲んで行けと呼び止められた。酒の匂いにつられてしまったため、私も少し飲んでいくことにしたのだが、その座に加えてもらい集まって

いる男たちの顔をよく見ると私の近所に住む農民が何人が混じっていることに気が付いた。なぜ農民の男が対立している牧民の酒盛りに加わっているのかと聞いたところ、近くで畑仕事をしていたら偶然牧民の知り合いに出会い、これから酒を一緒に飲もうと誘われたそうである。対立している民族同士なのに怖くないのかと尋ねたところ、みんな友達だから大丈夫だと答えていた。

しかし牧民と酒盛りしていたことは他の農民には知られなくなかったようで、私が農民の集落に帰っても自分が牧民と一緒に酒を飲んでいたことは内緒にしておいてほしいと口止めされたことを覚えている。

この農民の男とはその後もたびたび牧民の酒盛

りで顔があった。彼は牧民の結婚式にも頻繁に参加しており、そのたびに「牧民の結婚式は牛肉がたらふく食えるから嬉しい。農民の結婚式だとせいぜい鶏肉が少しでるだけだ。」と冗談を言っていた。

一方、牧民の側も一枚岩ではなかった。彼らが飼育しているウシが環境を破壊しているということで、中央政府や県政府がウシの飼育頭数を強制的に減らす政策を実行していたころ、多くの牧民はこれを不服として政府に抗議していた。牧民の不満は、政府の行動を支持する農民にも向けられていたが、そのフラストレーションが最も溜まっていたころの話である。別の集落の調査をするため自転車に乗って移動していると、道の向こうか



写真1. 牧民と一緒に酒を飲む農民と筆者

ら来た人にこの道はこの先通行止めになっていると教えられた。わけを聞くと牧民の若者が集まって政府に抗議するため道路を封鎖しているという。そのうち警官隊も到着するから近寄らない方がよいとのことであった。おそらく逮捕者もでるだろう。牧民にも知り合いがたくさんいる私は心配で仕方なかったので、事の顛末を見届けるため道路の封鎖の様子がよく見える小高い丘に登ることにした。

私が丘に登るとすでに見物客がおり、牧民が封鎖した場所を見下ろしながら数人で何やら雑談をしている様子であった。この時期はまだ牧民と農民が対立していたため、きっと見物客は農民であり、対立している牧民の若者が警官隊に蹴散らされることを期待して眺めにやって来たのだろうと思って近づくと、なんとその見物客は私が調査させてもらっている牧民の世帯主とそこ近所さんたち一行であった。ご丁寧に炭酸飲料まで買ってきており、日本でいうときながら村芝居か宮相撲を見物しに来たような様子であった。よくよく話をすると、牧民の集落ではその日の前の晩に政府のやり方に不満を持った若者たちが声を掛け合い、次の日の朝から村の近くを通る幹線道路を封鎖しようということになったそうである。しかしこの見物客たちは警官隊と事を構えることは危ないと判断し、慌てて早朝から自分の息子たちを遠くにある草場まで放牧に行かせてしまった

という。そして男たちは自分だけ家に残っていたが、道路封鎖のことが気になったので近所の人たちで声を掛け合い見物しにやってきたということであった。その後、県を中心都市から派遣された警官隊が到着したものの、大きな衝突にはならず、牧民の代表者が警察官と話し会をしたのち道路封鎖を解いたため、けが人や逮捕者がでることはなかった。この顛末を見て私は一安心したが、見物客の一行は少し物足りなそうな顔をしながら丘を降りて行った。

おおらかな他者との付き合い方

両者が対立しているときに一緒になって酒を飲んでいた農民も、若者たちが団結して抗議活動しているときに洞ヶ峠を決め込んで警官隊との衝突を見物していた牧民もそれぞれの集団の中では少数派であった。大多数の人々はそれぞれ民族ごとに団結しあい、互いに対立していた。このため両者が対立している時期においては彼らのような少数派の行動が両民族関係に大きな影響を及ぼすことはあまりなかったように思う。しかし何らかの影響で両民族が歩み寄りをはじめたときは、対立行動に消極的だった少数派の人々が基点となって両者の交流が進んでいくことが確認されている。上述した人物たちについても、対立している時期においては彼らの存在は特に民族関係に大きな影

響を及ぼすようなものではなかった。しかし、いったん両者が和解すると少数派の人間関係が中心となり、それが広がってゆくことで農民と牧民が太いパイプでつながれるようになっていったのである。ちなみに当時牧民と一緒に酒を飲んでいた農民の男性は現在も農業を営む傍ら牧民と農民の集落を行ったり来たりしながら商売をしている。またその酒場にいた牧民の一人は両民族が歩み寄り始めるとすぐに、農民の集落に店舗を開業し今では支店を構えるほど繁盛している。さらに道路封鎖を見物していた牧民の男性はその後、村議会議員に立候補し両民族から得票を集め当選している。これはその人柄によることも大きいと思うが、やはり有権者から対立に積極的にかかわらなかった人物というイメージを持たれたことも当選の一因ではないかと考えられる。

私がこのフィールドワークで学んだことは、集団の柔軟性を維持するにはその集団内部の多様性が重要であるということであった。互いの集団が対立しているとき、どちらの集団に帰属する人々も強固な団結や同調した行動を求められる。そしてそれぞれの集団はより排他的になることで他の集団に対抗しようとするのである。

しかし本事例は互いの二つの集団内で多数派とは異なる行動をとる人の存在が黙認されていた可能性を示している。もちろん、酒を飲んでいたことを黙っていてほしいと頼むことや、息子を道路

封鎖に参加させず放牧にやってしまうといった行動は、自分の帰属している集団に対する配慮のあらわれでもある。これは自身の集団の行動に積極的に反対するのではなく、むしろ自身の集団に配慮した行動をとりながらも消極的に多数派に対して異を唱えている姿である。そのような配慮もあったが、しかし両集団の多数派がこうした少数の人々の態度に対して、それ以上追求したり非難したりすることはなかった。こうしたおおらかさは世界中の人々が学ぶべき他者との付き合い方である。

今、私がなぜアフリカでフィールドワークをするのかと問われたならば、アフリカ社会から学んだことをアフリカ以外の人々に知ってもらうためと答えるかもしれない。フィールドワークの目的は地域とそこに住む人々の姿を注意深く理解することであり、その情報はその地域にとって重要なものになることはいうまでもない。しかし、フィールドワークはそれ以外の地域に暮らす人々に対してもその社会がどのように進むべきかを判断するための有益な情報を提供しているということを私は再認識させられた。

フィールドワーカーによって紡ぎだされたフィールドの情景は、他の地域社会が進んでいく際の道標にもなるのではないかと最近強く思うのである。

加藤 太(かとう ふとし)

コロナ禍で生まれる新しい交流

新しい交流の形

2020年の年明けに、「新型コロナウイルスが検出された」とのニュースが出た当初は、外国のある町の話と思ったものの、あっという間に自分たちの仕事や生活のスタイルも変えざるを得ない状況となった。そのような中で、いつも研究等でお世話になり、気軽に足を運んでいた田舎の地域には、高齢者が多いということもあり、訪れるのを控えるようにしていた。仕事での会議や授業等はパソコンを使ってオンラインで対応できるが、70歳代、80歳代の田舎の知り合いの方とはなかなか簡単にそういう訳にも行かない。しかし、パソコンとまではいかなくとも、携帯電話や最近覚えて使うようになったというLINE等で近況報告などのやり取りをするようになった。「もう～つまらん」ではなく、果敢に新しいことに挑戦する田舎の方の好奇心と吸収力にはいつも頭が下がる思いである。ただそんな中で電話越しに、「人との交流が無いと、やはり生活に張り合いが無いでえ」と聞く農家の人の声は、やはり少し元気がなかった。

新しい交流の形ができたとはいえ、実際に足を運ぶこと、人と会うこと、お金を使うことは地域の活力や経済にとっても大事なことである。コロ

ナの感染の状況が幾分か落ち着き、ある程度動けるようになった時期に、代休と溜まっている有休を組み合わせて、国の制度も利用しながら「えい、やっ」と思い切って、旅行に出かけてみることにした。

旅の醍醐味とは

ちょうどいつも大変お世話になっている人たちが、和歌山に来る機会があったので、それに合わせて休みを取り旅行を計画した。人込みを避けて、行き先は田舎の方へ、体調を万全にして出かけた。山に行ったら山の美味しいもの、海に行ったら新鮮な海のもの、そして季節ごとに色んな果実を味わえるところが何より和歌山の魅力だと感じているのだが、今回は、田辺・白浜方面へ、2泊3日の旅行に行くことにした。

1泊目の訪問地は白浜であり、仕事ではなく旅行者として訪れるのは2回目であった。和歌山県の観光地、南紀白浜はリゾート地でもあり、白い砂浜やどこまでも続く穏やかな青い海は、日常を離れたリフレッシュに最適な地である。そんなロケーションに気持ちも癒され、バラエティーに富んだ食事や温泉に入りながら「非日常感」を思い切り満喫することができた。個別の棟タイプの宿泊や、部屋ごとの温泉、混まないように時間差での食事等、施設の方も密にならないよう十分配慮

しており、不自由なく快適に過ごすことができた。

さらにもう1泊利用した宿は、田辺市の上秋津地域にある都市と農村の交流施設『秋津野ガルテン』であった。ここは農家を中心とする地元の住民有志が、「食と農」をベースとしながら、何十年も前から地域づくりを行っている場所である。地域の将来を考え、子どもたちに故郷を残していくために、農地や農産物、廃校となった旧小学校の施設等、地域に昔からあるものを生かし活用している。活用の形態は、宿泊や農家レストラン、農作業体験やワーキングホリデー、加工品販売所、ICT オフィスなど様々である。この地域は外部の人の意見も取り入れながら、住民が主体となり、知恵を出し、力を出し、時には自腹を切りながら、多様な形で地域と農業と暮らしを守り継いでいる。私も仕事やプライベートで何度も滞在しており、顔なじみのスタッフの方にも「いらっしゃい」と声をかけていただき、落ち着くところである。施設自体は古い小学校の校舎だが、中はきれいに整備されていて、同行者も「なんか、懐かしい」と滞在を喜んでいた（写真1）。

またここは地域の人たちが、同窓会や研修会、家族旅行等の宿泊でも利用しており、地域に愛されている場所である。

明るいうちに到着できたので、車や荷物を置いて、少し離れた場所にある農産物直売所『きてら』を目指して周辺を散歩した。住宅や畑の中を抜け

ていったのだが、手作りの地図や看板なども整備されており、分かりやすい。直売所で買い物をしたり、川沿いのカフェでコーヒーを飲んだりしながら、農村で静かな午後のひとときを過ごす。



写真1. 地域の宝を活用する「秋津野ガルテン」

散歩をしてお腹を空かして…夜ごはんはそこから20分程の市街地の居酒屋へ。地元の人に「新鮮な魚がおいしいよ！」と連れて行ってもらった店で、大変気に入って、何度か人を連れて訪問している。美味しい食事を堪能し同行者も満足し、女将さんに会計をし「ごちそうさま！」と店を出ようとしたところ、カウンターの中で包丁を握っていた大将が顔を上げ、「有難うございました！あ、お嬢ちゃん、何回か見た顔やね〜！」と一言。「美味しかったです。また来ますね！」と気分良くあいさつし、再訪を心に誓った。

旅行は、行ったことがないところ、見たことがないもの、食べたことがないものを経験し味わえる楽しみももちろんあるが、なじみとなり、何度も足を運び、その地域の人と気持ちが通うということが、何より醍醐味なのかなと強く感じた。

人に出逢う旅：グリーンツーリズム

私が、そのような田舎の旅の奥深さにはまって約20年が経過した。「グリーンツーリズム」というものである。1990年代から国の事業が開始され、農水省で決められた定義はあるものの、私自身は、「人と出逢う旅」と捉えている。グリーンツーリズムは、農林漁家の農閑期の副収入として位置付けられており、農家に滞在する農泊や、農作業体験や農産物加工体験、農産物購入等、農業に付加価値を付けてお客さんに提供している。特に私が大学院生の頃から研究で訪れ、卒業後しばらく事務局員として働いていた、九州・大分県の「NPO法人 安心院町グリーンツーリズム研究会」では、この事業がなかったら出逢えなかったであろう多くの大事な方々と知り合うことができた(写真2)。自分の祖父母はもう他界してしまったが、「お父さん、お母さん」と呼び、色々話することができる人生の先輩方がいる。初めて、安心院を訪れた20歳過ぎの学生のころは、「知らない農家の人の家に泊まるなんて、大丈夫かな…」、「本当は迷惑なん

じゃないかな?」、と、カチカチに緊張してとても気を使い疲れたが、一緒にご飯を作ったり農作業をしたり、話をしているうちに農家の人の温かさに触れ、時間をかけて少しずつ馴染んでいくことができた。



写真2. 安心院町グリーンツーリズム研究会会長(右)と農泊の女性たち

安心院町で働いていた約10年間は、仕事で農家の人と接していたので、もちろん、なまなまの関係だけではいかなかったが、24時間仕事であり、また同時にプライベートでもあったように思う。

「あんだ、ちゃんにご飯、食べてるんかえ?」、「あんだ、ナバ(きのこ)採りに行くで」、「自然薯採れたから、食べおいで!」、「佐賀の関に魚釣りいかんかえ?」、「ウナギ取れたで!」、「あんだ、野菜持って帰らんかえ?」などよく声をかけてもらっていた(写真3)。



写真3. 笑顔で出迎えてくれる正春さん

有難いことに、安心院町への訪問客や問い合わせや行事等も多く、グリーンツーリズム事務局での仕事は日々忙しく、大変充実していた。しかし、あまりにも仕事が過多になった時は、意識的に事務所を離れ、なるべく携帯の電波が届きにくい、安心院の奥地の農家を訪問していた。農繁期や農作業中は、農家の人は真剣で話しかけることはとてもできないが、昼よこい（昼休憩）時や、農閑期には、ふらりと農家にいくと面白い発見が多々あった。

蓄積された技と勤の継承

「わしゃあ、年賀状は書かん。今日、お（逢）う

たもんが、みな友達やけ」と、そんな冗談をいって皆を笑わせることが好きだった義彦さん（当時81歳）。秋が深まったある日の午後にご自宅を訪問すると、家の奥の納屋で何かの作業中だった（写真4）。



写真4. ススキを集めて箒作りに励む義彦さん

何をしているか尋ねると、家の周りのススキを集めて、ススキ箒の製作中とのこと。「ススキが青い時に採ると、茎がしなやかで色はきれいだけど、穂を取るのが大変。年を取り過ぎると穂は簡単に取れるけど、枝（え）がすぐに取れてしまつてつまらん。その見極めが難しいんじゃ」。そんなことを言いながら、義彦さんは大きなごつい手で丁寧に箒作りを進めていた。聞けば義彦さんの箒作りの師匠は、近所の90歳の方であり、未だに先輩から技を盗んでいるとの事。農村の暮らしや文化は極めるのが難しいと感じた出来事だった（写真5）。



写真5. 軽くて便利なススキの箒

奥さんの恒子さんも、農家のおやつである「干し柿づくり」をしていた。「干し柿は仕舞い時が難しい。いつまでも干していたら、悪くならないけれど、実がカチカチになって美味しくない。柔らかいと食べやすくおいしいけれど、すぐにカビが生えてしまう。触ってみて長年の経験と勤で仕舞い時を見極めるんよ」と。美味しい田舎の食を守っていくために、経験と勤を身につけること、またその蓄積されたものを、伝えていくのは容易なことではないと感じた。後継者が少ない田舎での技の継承は、何も自分の子どもや孫たちだけに限らない。恒子さんは「近所の人や、都会から帰ってきて田舎に興味がある人や、教えてもらいたいと教えを乞うて来る人には誰でも教えてあげるんよ」と言っていた。そのようにして田舎の技術や食文化は地域の中で継承されていくのかもし

れない。田舎での仕事で、先達から多くのことを教えてもらった（写真6）。

人との交流から得られたもの

仕事で無理をしてしまい体調を崩し、病気で1年ほど安心院から離れた時があった。すごく落ち込んでいたときに、病床に届けられた、義彦さんと恒子さんから手紙を読んだ。「人生には色々な事があります。でも人の勝手に惑わされず、自分の道を行くのです。それが貴方に相応しい。ひとつ、ひとつ、のりこえて貴方の歴史を作ってください」と、万年筆で書かれた2枚にわたる長い優しい手紙。全てに自信を無くしていたが、その手紙をもらい半年ほど経ってから、また仕事に復帰することができた。



写真6. 農泊は、「一回泊まれば遠い親戚、十回泊まれば本当の親戚」

このように、学生時代から、グリーンツーリズムは、農村で人や人の生き方や地域の歴史に触れることができる旅ではないかと思って過ごしてきた。グリーンツーリズムや地域のことや人を知ることができたことで、自分の道に立ち返ることができたように思う。病気もコロナも都市農村交流を阻むには十分過ぎる大きな壁だが、それを乗り越えた先に、強いきずなが生まれるのではないか。しばらくは電話やメールで連絡を取りながらも、コロナが落ち着いたら、農家の方たちに会いに地域に足を運び、また新たな歴史を作っていきたいと考えている。

植田 淳子（うえだ じゅんこ）

魔法のことば

サビリ

ブワ語には、相手に許しを請うためのとっておきのことばがある。「サビリ」ということばだ。謝るときと、お願いをするときの両方に使われる。とっておきと言っても、サビリは日常的に使われている。たとえば普段はお金を借りない相手に「明日の仕事にどうしても必要だからお金を貸してほしい、サビリ！（お願い！）」と頼むときや、妹が姉に「男友達と遊びに行くから、その化粧品どうしても使わせて！サビリ！（お願い！）」と頼むときなど、本人にとっては譲れないお願いをする場面で活躍する。サビリを使えば、だいたいのことはこちらが願うように解決してもらえる。

その便利さに気が付いてから、私はサビリをここぞというときにだけ使う魔法のことばのように大切にしていた。村のひとたちも簡単にサビリを使わなかった。特に謝るために使われた場面にはほとんど立ち会ったことがない。今回は、自分がした経験から、謝るためにサビリを使うときの話をしてみようと思う。

日本語には「すみません」、「ごめんなさい」、「失礼しました」、「申し訳ありません」など、相手との関係や謝罪の程度によっていろんな謝り方があ

るが、ブワ語ではサビリしか言い方がない。そして今のところ、サビリは最上級の謝罪の場合にしか使わないことばだと私は考えている。

ことばを覚える

ブワ語は、西アフリカのブルキナファソ北西部とマリ南東部に暮らすブワという農耕民のことばだ。話者は約30万人と言われている。分類でいうと、ニジェール・コンゴ語族アトランティック・コンゴ語派ヴォルタコンゴ語群北部グル語派セントラルの北部グループということになる。

私はブワの人びとが暮らすブルキナファソの農村に2008年から2014年まで6回通い、合計19ヶ月ほどを過ごした。滞在時はいつも、20歳の長女（2014年当時）を筆頭にした6人の妹弟と父母の8人家族のボンビリー一家に、本当の家族のように受け入れてもらいながら暮らした。

ブワ語にはブルキナファソの公用語であるフランス語との辞書や教本はない。なのでブワ語は村に暮らし始めてから、ひとつひとつ教えてもらって覚えた。辛抱強く付き合ってくれる村びとには申し訳ないやらありがたいやら、せめて一度聞いたことは忘れないように、フィールドノートの背表紙の裏に初めて聞く単語や表現をメモし、すぐに使って覚えるようにした。2回目の調査では、滞在の通算が4ヶ月から6ヶ月に当たる期間を過ご

した。調査助手のチオに助けてもらいながら自分でブワ語を使って調査を進めたので、そこそ話せるようになってきた気がしていた。だから調査の終盤、お世話になっている家のお母さんに「あんたのブワ語は歌ってるみたいで何言ってんだか全然分かんない！」と半笑いで言われたときの衝撃はなかなかのものだった。

とはいえ無自覚だったとはいえ。私の質問を受けた誰しものが、不安げな顔で隣にいるチオに目配せをして通訳を求めていたからだ。ブワの人は相手は嫌な思いをしないように本当は嫌なことも承諾したり、遠まわしな言い方をしたり、空気を読んでくれたりする。まだ私への遠慮があったし、言葉を覚えようとする私に気を遣ってくれるのはありがたかったが、はっきり言わない相手と自分のブワ語に私は苛立ちを募らせていた。だから良くも悪くも面と向かって「分かんない」と言ったのはお母さんが初めてだった。

彼女の名前はテネ、当時36歳。村のなかでも特に歯に衣着せぬ物言いをする性格の人物でもある。実際に面と向かって言われてみると、どうしたらいいかまでは分からず、言われ損な気がして自分勝手にもテネを恨めしく思ったものだった。

ブワ語の極意

自分のブワ語がダメな理由がはっきり分かった

のは、滞在の通算が7ヶ月から10ヶ月となる期間を過ごした3回目の調査のはじめだった。ブワ語は、日本語の「雨」と「飴」のように音の高低で意味が異なることにやっと気が付いた。どうしてこんな簡単な決まりをだれも教えてくれず、話しているも指摘してくれなかったのかと心底謎に思ったが、おそらくそれすら分からないほど意味不明なことばを話していたのだろう。

ちなみにブワ語は音の長短でも意味が異なる。たとえば「フィンザ」は子犬、「フィンザ」は主食の練り粥を作るための長いしゃもじを意味する。音の高低に気が付き、長短の発音に気を付けるようにしてからは「ブワ語うまくなったね」「頭がいい！」と褒めてもらえるようになった。下ネタで絡んでくる輩をブワ語でやり返すと「もうすっかりブワの娘だね」と言われるのが、ブワになりたい私にとって最高の誉め言葉だった。インタビュー相手の顔も明るくなり、私もチオに頼らずに一人で調査ができる自由と喜びを噛み締めた。テネが言ってくれた本音は全く正しいことだったと、あの日のことは笑い話になった。

「ここではこういう風じゃない」

私が魔法のことばを初めて使ったのは2回目の調査のときだったと思う。テネが激怒したのだ。1泊2日で村に遊びに来た私の友人が帰った日の午

後にそれは起きた。テネや6人の私の妹弟、近親の女性3人にその子供たちといういつものメンバーで、庭の日よけの下にゴザを敷いてくつろいでいたときだ。



写真1. 庭の日よけの下での余暇

心当たりはあった。急に決まった来客で、事前にはテネに相談できていなかったのだ。急な来訪には事情があったがそれを説明して協力を頼めなかった上、畑仕事から帰宅し疲れているところにお父さんの指示で雨のなか鶏を焼いてもらうことになってしまった。テネは半笑いでおもむろに口を開き次のようにまくし立てた。

「ハドコラ（筆者の名前）が全部台無しにした！昨日畑から疲れて帰ってきて初めて会ったのに、もう早朝帰るって？ここではこういう風じゃない。『もうハドコラは調査を辞めた』って、あんたが調査してる人たちに言う。あんたの友達と仲良くって、お金を渡してその子が住んでる街でパー

ニュ（布）を買ってもらうこともできたかもしれないのに。全部台無しにした！」。予想と違うことばに私は困惑した。「台無しにした」の意味がよく分からない。

さらにテネは前回の調査のときと私の髪型が違うことを持ち出し、「これは別のハドコラだ。前来たときは髪が長くて真っすぐで、こんなことなんてしなかった。今は髪も短くて不細工だし、あんたは別のハドコラだ！」と続けた。はじめはテネが半笑いだだったので半分冗談かと思い、私もへらへらしながら言い返していたが、だんだん真剣に怒っていることが伝わってきた。

周りの妹や女性たちも冷たい目で私を見ているし、いつも意地悪な従妹は便乗して『白人』はお金持ってるんじゃないの？ないって言いながら持ってるんでしょ。昨日は市場で何を買ったの？」と、私が一番嫌がることばをわざと投げってくる。なにがテネをそこまで怒らせているのか分からなかったし、友人のせいなのに理不尽に責められているように感じた。あまりの剣幕と多勢に無勢で頭も心もぐちゃぐちゃだ。

なにを言っても非難はやまず、せめてもの意地で涙を見せないようにその場を去った。母屋に向かいながら、もう調査になんか来たくない、もう来ない、それで今日あんなに私を責めたことを後悔したらいい！などと考えた。

ブワの歓待

母屋で一人になり、言われたことや自分の気持ちをフィールドノートに書きだしながら頭と心を整理しようとした。テネが怒った理由はほかにもあると思った。

その頃、私は調査を優先して家族と一緒に畑仕事に行ったりおしゃべりをする時間を作れていなかった。それにも怒っているような気がした。とにかく私のすべてに怒っている。もう嫌われたし調査もおしまいだ、家族を大事にできないなら断らないといけなかった、テネになんて言ったらいいのかわからない、などとフィールドノートに書いて暗い家のなかに一人で座っていた。

しばらくするとだれかが母屋に入ってきた。テネだ。とにかく謝ろう。意を決してテネのもとに行く、彼女は私が口を開く前にニヤニヤし始め、「もう終わったからいいんだよ」と言った。予想と真逆の態度に、ほっとして視界がぼやけてくる。「もう仲直りもできなくて、この家を出ていかなきゃいけないと思った。テネのことが好きだから一緒にいたい」と伝えると、「えー！そんな風に泣かないで！帰るまで一緒だよ。一緒にご飯も作りし、見捨てなんてしないよ！だからそんな風に泣かないで、サビリ（ごめんね）」と抱きしめてくれた。テネを真似て「サビリ」と繰り返す私に、「もう、ハドコラらしいんだから」と困ったように笑

い、共感を示すことばをかけながらテネは私を慰めた。私が落ち着くと、「ゴザを片付けて一緒に夕ご飯を作ろう」と、みんなのところに連れ出してくれた。



写真2. ある日の夕食作り

この一件以降、家族のなかで「別のハドコラ」はすっかりネタになり、雰囲気が悪くなるたびに自虐的にも使われることになった。

今ならばはっきりと分かるが、家族と私の友人が交流する機会を持てるように気を利かせるのは私の役目なのに、それをしなかったことにテネは怒った。悪いのは友人ではなく私だ。客人には自分の分を与えてでも用意でき得る一番いい食べ物を出し、古くからの友のように歓談し、自分が堅い地の上に寝てもいい寝床を与えるのがブワの歓待である。客人がまるでホテルのように滞在するなんてもってのほかだ。私はブワとして振る舞え

なかった上に、家族の客人への歓待の気持ちを踏みにじってしまったのだった。

この一件ではテネの方から「サビリ」と言ってくれた。改めて釈明をする前だったのにどうしてそう言ってくれたのだろうか。

共感を示すことば

ところで、テネが私を慰めるために使ったことばは「フォーン」というものだ。相手に共感を示し、いたわりたいときに使う。泣く者、具合が悪く、怪我をした者、大変なことがあった者に対して、話の相槌に打ったり、フォーンと言った上でお見舞いの定例句を述べたりする。「お気の毒に」「かわいそうに」と訳せそうだが、それよりもっと親身になって心を重ねてくれているような温かさがある。ほかにも謝意を示すときや、ごく軽い謝罪にも使われる。

サビリの使用頻度が低いことに対し、フォーンは村びとに最もよく使われることばのひとつと言える。私も相手への共感といたわりをひとことで示せる点がとても気に入って多用しており、日本に帰国するといつもそれに相当することばがなく不自由な思いをする。

「見ないなあと思ってた」

サビリを使わなければいけないときが、ほかにも何回かあった。滞在の通算13ヶ月から19ヶ月を過ごした6回目の調査は、博士論文執筆前の最後の滞在だった。このとき、1回目以来挨拶に行けていなかった村の首長をやっと訪ねることができた。本来なら滞在のたびに挨拶に行くべきだったが、2回目、3回目と機会を逃して以降気まずくなり、すっかり足が遠のいていた。拒絶されることも覚悟して重い腰を上げ、友人と連れ立って首長の家に向かった。

用意してくれた椅子に浅く腰掛け、「ずっと挨拶に来れなくてごめんなさい」と切り出した私に、「見ないなあと思ってた」と首長は言った。予想外の柔和な態度で返答を受けたとき、アフリカ各地で首長や長老の権威が落ちて、ないがしろにされている話か頭をかすめ、私もまさにそれに加担してしまったことに気が付いた。思わず「サビリ」が何度も口をつく。すると首長は「死んだら『サビリ』も終わり」と柔らかい顔のまま言った。「死んだら『ごめん』もなにも関係ない、だから気にしないでいい」。そういう意味で言ってくれたと思う。ふいに示された人生観と、寛容な許しに心を打たれた。

その後、首長はパラコ村の成り立ちや、村独特の首長制が作られた経緯について、2時間に渡って話を聞かせてくれた。その間、私は友人に頼んでモロコシ酒（モロコシという穀物を原料に造る

地ビール)を買ってきてもらい、謝罪と敬意を込めて皆でたらふく飲んだ。



写真3. 村の開発会議に参加する首長

サビリを使う資格

この一件を聞いた日本の友人は、「逆に『死ぬまでは許さない』ってことじゃないか」と正反対の解釈をした。でもそうだとしたらきっとすぐに追い返され、村についての込み入った話はしてもらえなかったはずだ。

だれかに対して自分が怒っている場合、相手を許せるのはどういうときかと考えてみる。自分が感じた憤りや悲しみを理解してもらえたとき、あるいは相手が理解しようと努めたことが分かったときのように思う。

サビリと言われるとき、自分の心の奥深くにある本音を真正面から見つめられ、語りかけられているような照れくささと揺さぶりを覚える。サビ

リは、相手の怒りの正体を理解できた者、理解しようとする者だけが言うことができるし、だからこそ魔法のことばになり得るように思う。首長やテネが許してくれたのも、そういうことだったように感じる。

山になった質問

「別のハドコラ」事件と並ぶもうひとつのテネとの大きな喧嘩が起きたのは、6回目の調査のときだった。テネは私が調査をしている女性グループのメンバーだったので、特に詳しく話を聞いた者の一人でもあった。私が5回目の調査に行くと、テネはグループの集会に参加しなくなっていた。「女性グループのメンバーをテネがひどく罵った」とあらぬ噂が立ち、みんなの前で問い正されたというのだ。私はテネの手前、気まずさを抱えながらグループの調査を続けることとなった。

テネからの聞き取りはなかなかうまくいかない。基本的に調査への協力はしてくれるが、機嫌が悪いときじゃないとはぐらかされることもあった。家では既にお金の出入りや食事の調査をしており、私もそれ以上家族でゆっくり過ごす生活の時間に質問項目の決まった調査を持ち込むのは嫌だった。「改まった調査感」を出さずに、日常会話のなかでそれとなく聞き出すテクニックもある。その手も使った。残った質問は日常的に話題にしづらく、

不自然な会話になって私の狡猾さがあらわになり、
気まずい思いをしそうで、知りたいことをすべて
聞く勇気が出なかった。



写真4. 女性グループの集会

そうしてずるずると先延ばしにしていたが、博士論文執筆前の最後の調査ということで、6年かけてたまった質問をいよいよどうしても聞かなくてはならなくなった。家では難しそうだと判断し、酒造りの間に酒場で話をする約束をなんとか取り付けた。

「この村を忘れる」

しかし当日、テネは質問が始まってすぐに「こんなことをするのは好きじゃない」と怒り始めた。「6年も一緒に家にいて、隠すこともないのになんでわざわざ外で話さなきゃいけない？本当に人をがっかりさせるのが得意だね」と言う。私はそ

の頃、滞在も残り数える日数となり、うまくやりきれぬのか不安と焦りのなかで日々を過ごしていた。予想以上の強い拒絶に、知らないうちに涙がこぼれた。それを見たテネは「(そうやって泣くのも)本当に好きじゃない」と畳みかけてくる。私だって泣き落としなんて大嫌いだし悔しいが止められない。

「家のことは恥ずかしいことだって全部隠さず話してる。あんたは全部知ってるのに今更なにを話せて？同じ質問を何回もして、バカだと思ってるの？受け入れられない。同じ質問だったら答えない」と口は休みなく動き続ける。私は「バカだなんて思ってないし、今日はまだ聞いたことがないことを聞きたい」と言い、同じ質問をしてきた理由を説明したが聞き入れてもらえず、テネの口は止まらない。

なかでも一番堪えたのは「こうやってたくさん質問して、でもその後はこの村に何もしてくれないでしょ？この村を忘れるし、私たちを助けるわけじゃない。なんのために研究をしてるんだか分からない。私が何の野菜を作ってるのか、いくら稼いだかを私や娘たちに聞いてくるけど、それを聞いてどうするの？」ということばだった。研究の還元と研究の意義が一番痛い部分だ。「今すぐは無理だけどいつか力になれるように努力する。村のことは一生忘れるわけがない。野菜について聞いたことの意味は、今は私にもちゃんと分からない

いけど、きっと意味があるようにしたい」としか答えられなかった。

「本当のことを教えてくれない」

調査は相手の協力があって初めてできるし、相手が嫌がることはしないのは基本だ。だけどテネは質問されるのが嫌ということ以上に、私に対してたまった苛立ちをすべてぶつけているように感じた。テネは「こっちは全部本当のことを言うのに、こっちは聞くと本当のことを教えてくれない」とも言った。確かに後ろめたいことが言えない時期もあったが、テネに諭されてからは正直に言うようにしていた。何のことを指しているのか分からなかった。

「とにかくテネが嫌ならもう何も聞かない」と口にする、ここでテネとの関係も一切終わるかのようで余計泣けてくる。テネは半笑いで「だれかが見たら私が叩いたと思われるでしょ？ 勘弁してよ。最近私の評判が落ちてきてるんだから！」と言い、私が泣いたことをお父さんに言わないようにと私に同伴してきたチオに口止めしている。半笑いだけどたぶん真剣に怒っている。テネとの関係をこんなにしてまで聞く価値のあることなんてないし、正直もう何も聞く気にならなかった。出会った頃から家族として応援し、協力してきたはずなのに、ずっとこんな風に思っていた

のかと考えると急に辺りの景色が色あせて見えた。チオは「ここでは何かあったときは一緒にモロコシ酒を飲んだら終わりだから大丈夫」と励ましてくれたが、根本的な部分は解決できない。テネはもはや私のすべてを煩わしく思っているように感じた。サビリとは言えなかったし、テネが言うこともなかった。



写真5. テネが酒造りをする酒場

再会に向けて

最後の喧嘩からもうすぐ7年が経つ。あの後、出産し、育児をしながら長々と博士論文を書いていた私は一度も村に戻ることができていない。たまに村の家族に電話をするが、今でもテネの携帯にはかけづらいし、話すときには緊張する。こうして振り返ってみると、当時も感じてはいたが、信頼関係を全くうまく結べていなかったことを再認識する。いろいろ原因はあると思うが、大きな

理由は2つだろう。

ひとつは「別のハドコラ」事件ときっと同じで、最後の調査では家族と過ごす時間をあまり取れなかったせいだと思う。昼の一番暑い時間を日陰でやり過ごすときや夕食の準備のときは一緒にいるようにしたり、早めに帰る日を作るように心掛けたりしてはいたが、調査優先だったことは否めない。逆に4、5回目の調査は家で過ごす時間が長く、調査的には野心的な計画を立てずだらだら過ごしてしまったと反省するような滞在だったが、家族と喧嘩することもなく、満ち足りて過ごせていたように思う。ことばにして意識したことはなかったが、ホームステイをしながらフィールドワークをするときには、家族と調査のバランスを考えた調査計画を立てて家族との信頼関係を盤石なものにした方が、心穏やかなフィールドワークができそうだと。

もうひとつの理由は、女性グループと距離を置かざるを得ない立場に置かれたテネに、私が腹をくくって向き合えなかったことにあると思う。私がグループの集会やメンバーの家に行くときや、家でグループの話をするとき、テネは不機嫌になった。喧嘩になるのを避けたくて、私は自分からグループの話をするのを辞めた。今思えば、私が口をつぐみ、家を空けてばかりいる理由を、テネが「メンバーから悪口を聞いて避けているからだ」と考えたこともあったかもしれない。それが

喧嘩のときにテネが言った「本当のことを教えてくれない」の含意だった可能性がある。

テネは口喧嘩も気も強い。散々悔しい思いもしたけれど、私は裏表がなく毅然としたテネが好きだった。だから楽観視していたが、想像していた以上にテネはグループのなかで微妙な立場に置かれていたのかもしれない。グループの人間関係は日常生活の人間関係ともほとんど重なっている。その繊細なテネの立場への配慮が足りなかったことがテネを苛立たせていて、最後の喧嘩で爆発したように思えてくる。家の外で質問をすることが、私がテネを信用していないかのようにテネに思わせることも、周囲にそう映る恐れがあることも考えられていなかった。

テネは本心ではグループの活動に戻りたいと思っていたかもしれない。話すことから逃げた私は、こうしたテネの立場や気持ちにちゃんと向き合えなかった。テネほど本音をことばにして向き合ってくれた人はいなかったのに。

フォーンということばがあるように、ブワ語は共感を大切にする言語で、ブワは共感を大切にするひとたちであるように思う。口を閉ざせば相手の心も離れていくが、本音を見せれば本音に共感してくれる。本音への共感を通して相手が自分への理解を深め、絆も急速に深まるように感じる。謝るときに使うサビリは、相手への共感を示す最上級のことばであるように思う。

研究の還元や意義についてはまだもうすこしだけ待っててもらいたいが、今ならテネに魔法のことばを言えそうだ。月並みではあるが、そこには相手への深い想いも込められていることを痛感している。あのときの喧嘩を酒の肴にしてモロコシ酒を飲み交わせる日を、今日も首を長くして待っている。

神代 ちひろ（くましろ ちひろ）

Gorontalo on my mind - 発展と 人々の意識の変容-

北緯0°の記憶

駐機場場に立つと、僅かな日の名残が断片的な逆さの景色となって水たまりに浮かんでいた。綿のような湿気がぬるく身にまとわりついてくる。北緯0度32分、どんな場所であるかもたいして調べぬままにインドネシアのゴロンタロに初めてたどり着いたのは2012年7月のことだった。

元々、旅先のことは事前によく調べることにしていたのだが、あまり情報も集めずに旅をする癖がついたのは多分この頃からだと思う。飛行機から運ばれた荷物を乗せるバゲージクレームのローラーコンベヤーは2メートルほどしかなく、このレールに何の意味があるのだろうかと思いついた。飛行機から運ばれた荷物を乗せるバゲージクレームのローラーコンベヤーは2メートルほどしかなく、このレールに何の意味があるのだろうかと思いついた。

ごろりと落とされた自分の荷物を起こし、同行した研究室のメンバーと空港の外に出た瞬間、我々の荷物はあっという間に別々の黒塗りの車へと無言で持ち運ばれた。英語で話しかけても何も喋らないのだ。車の中へこれも無言で誘導されたが、海外旅行の一般常識からしてこれは乗ってはいけない危険なケースだと思わざるを得なかった。暗がりの車内の男たちに話しかけると助手席

の男が癖の強い英語でゴロンタロ大学から迎えにきたのだと言う。漸く半信半疑のような心持ちで車に乗り込んだ。ゴロンタロでは大雨が続いた直後だったとのことで、車は至る所で徐行しながら大きな水たまりを渡るように進んだ。街灯がない場所が多く、たまに行き交う車やバイクなどのヘッドライトだけが目に飛び込んできて余計眩しく感じた。車内の男たちとコミュニケーションを取ろうとしても、支離滅裂な英語を話す自称（後で確かめたら本当だった）数学者と話す選択肢以外なかった。コミュニケーションといっても、お互いわからなかったような相槌を打つものの、実は鼻屑目に見ても30%程度しか意思疎通できていないと思いつつ、いつどこに辿り着くのかもわからず暗闇の窓の外を見ていた。

その頃の研究室では、地質・岩石学の応用としてファイトレメディエーション（水や土壌の重金属汚染を植物で低減すること）テーマに研究するグループがあり、当時大学院生だった私はその調査旅行に奇しくも巻き込まれる形で初めてのインドネシアに来ることになった。ちょうどゴロンタロ大学からの短期留学生を研究室で受け入れた後のことで、ゴロンタロ大学の地質学教室訪問も兼ねてゴロンタロもフィールド調査の対象にすることになったのだと思う。

当時のゴロンタロには大したホテルもなかったが指導教官はホテルに、私を含む学生3名はゴロ

ンタロ大学の学長公邸に宿泊した。学長公邸と言ってもそこに学長は住んでおらず、JICAの日本人女性が部屋を借りて住んでいるだけだった。私以外の学生2人は女性だったのでトイレ・シャワー付きの広い1部屋をシェアし、私は歪んだシングルベッドだけ備え付けてある小部屋に泊まった。



写真1. 思い出の行水 (2012年)

私の部屋にはシャワーがないので、離れのトイレに行き、壁に止まった無数の蚊とそれらを狙う何匹かのヤモリを睨みながら手桶で行水をする毎日だった。ゴロンタロ大学はラマダン前の夏休みで、夕方のアザーン（イスラム寺院から流れる礼拝の呼びかけ）を聴きながらキャンパスを散歩してみても、閑散としていてほとんど人と出会わなかった。暮れゆく南国のキャンパスをぬるい風に吹かれながら散歩していると、自分が日本からと

んでもなく離れた異国の地にいることを実感できた。

夏休みとはいえ、岩石プレパラート作りの実習をする日には地質学教室の学生たちが沢山集まってきたが、岩石を切るカッターもなければ研磨するグラインダーもない。日本から持ってきた研磨剤を鉄板の上にふりかけ、ハンマーでできるだけ薄く割った岩石を磨いた。集まった学生たちは新入生1人を除き誰も英語を話せなかったのも、その時に伝えたことを彼らが理解できていたか怪しい。それでもあの時のことを今思い出してみると、学生たちは私の英語を集中して聞き取ろうとしていた気がする。

学生たちのために地質を調べる野外実習をすることになり、ゴロンタロ近郊の地質スポットを案内してもらい簡単に調査した。その夜、指導教官とゴロンタロ大学の学生に地質をしっかり教えて帰ろうという話になり、翌明け方から突貫工事で野外調査実習案内書を作り朝から始まる実習に間に合わせたのを覚えている。

帰りの機内で旅行中の様々なことを思い出しながら、日本から遠く離れたゴロンタロには今後一生来ることはないだろうと思った。というか、蚊だらけのトイレで手桶の水浴びは金輪際ごめんなどと思っていた。ところが2018年に私は再びゴロンタロの地に降り立つことになる。

ゴロンタロ再び

私は学位を取って地質・岩石・鉱物分野の博物館学芸員をしている。地域の地質についての研究を群馬県内の色々な場所で行うなかで、市町村や在野の研究者とのネットワークができてきた。そのネットワークのひとつが群馬県にあるジオパーク関係者との繋がりである。ジオパークという世界に足を踏み入れていたばかりに学生時代の指導教官から声をかけてもらった。期せずしてゴロンタロ大学で行われるシンポジウムで、ジオパークに関する発表をすることになったのである。

『嗚呼、学長公邸再びか…』と空を仰いで覚悟した。スプリングの傷んだ軋むベッドと離れのトイレでの水浴びの光景が臉の裏に浮かんできた。それでも私は心のどこかでまたゴロンタロに行ってみたいと思っていたはずだ。なぜならそのシンポジウムは、博物館が1年のうち最も忙しくなる8月前半に開催されるにも関わらず、私はシンポジウムで発表することを即決して、気持ちは年中真夏のゴロンタロに向いていたからである。渡航期間の予定はすべて前後に散らせるように手配した。特に、毎年必ず対応しなくてはならない大学生の博物館実習を同僚に任せて、自分は南国ゴロンタロでトロピカルフルーツジュースを飲む姿を想像すると心苦しかった。

ゴロンタロはたった6年で目覚ましい発展を遂

げていた。空港は小振りだが必要十分で、近代的に改築され清潔に保たれていた。空港のガラスにはUVカットの淡青色のフィルムが施され、炎天下の駐機場も涼しげに見えた。町を行き交うベンツ（ゴロンタロ特有の、バイクの前輪を2輪付きの二人乗りベンチに改造した乗り物）は変わっていなかったけれど、町にはおしゃれな（クーラーがキンキンに効いた別室もある）カフェやショッピングモールができていた。私は大学に隣接して建てられたというシンポジウム会場となったホテルの広い部屋に宿泊させてもらった。シャワー室もありお湯も出る。よく見ると窓に致命的な隙間がいくつもあり、夜に電気をつけているとその隙間から蚊などがエンドレスに入ってくるのだが、それでも歪んだベッドとうらぶれた離れのトイレを思い出すとありがたくて、またゴロンタロに来て良かったと思ったのだった。

研究ビザの取得

そして2020年1月、強く念じた訳でもないのに『またゴロンタロに来て良かった』が現実になり、私は北緯0度32分のゴロンタロへ行くことになる。「持続可能な高負荷環境汚染問題に対処する持続可能な地域イノベーションの共創」という大きなテーマに取り組む手段の一つとして、ゴロンタロにジオパークを立ち上げることに挑戦す

ることになった。地域住民の自然と文化に対する意識の変容と雇用の創出をもたらす研究を進めるのである。インドネシアでフィールド調査や研究を行うためには、研究ビザを取得する必要がある。研究ビザなしでフィールドをうろうろと調査したり、地域住民にアンケートをとったりなどしていると、最悪の場合、警察に捕まってしまうこともあると聞く。意外と不審者の通報や密告も多い。このような理由で私は研究ビザを取得するため、グロンタロを再訪した。

「研究ビザの取得」はそう簡単にはいかなかった。移民局のシステムトラブルという理由で、いつになったらビザが取得できるかわからない（「ビザが発行されるのは明日かもしれないし、3週間後かもしれない」と窓口で言われた）という一寸先は闇のような状態に陥った。全インドネシアの移民局のシステムに不具合が起きているので、インドネシアでビザ取得申請をしている全ての人と同じ状況で待っているとのことだった。硬い廊下に行く人がたてるコツコツとした冷たい音と、待合室に漂うインドネシアらしからぬ微かな緊張感が、不穏な空気を脚色して余計心配になった。この不具合がいつから始まったのか知らないが、広いインドネシアでビザの取得申請をしている人達が全員足止めを食らっていて、たとえシステムが復旧したとしてもすぐに認証されることはないだろうと思うと絶望的な気分になった。

私は県立博物館で働いているため、立場的には県庁職員である。インドネシアに渡航するにあたり、あらかじめ内部で申請・許可を得た2週間の「職務免除期間」を超えた滞在はNGである。「この期間をちょっと延長してくれる？ビザが取得できるのはいつになるかわからないので。」などということはまかり通らない。県庁的には、帰国日がいつになるかわからないという不透明感が一番まずいと思った。そして、海外で起きる不可抗力なトラブルを理解してもらえるような期待はできない。おかしな立ち回りをすると次回のインドネシア行きが職場で認められづらくなる可能性があるため、職場への伝え方は気を付けなければならぬと思った。

苦心の結果（とはいえ待っているだけだが）3週間でようやく研究ビザを取得することができた。先行き不明の3週間目には、諦めて帰国する案を職場からのメールで提示されたが、予定の期間外は年休を消化して対応しきった。一方、この予期せぬ待ち時間のおかげで、研究スタートの前準備は目覚ましく進むことになる。

グロンタロ大学の新キャンパスと研究の準備

グロンタロ大学の地質学教室は、以前訪れた古びたキャンパスの建物から、隣の県に建設されたピカピカの新キャンパスへ移設された。偏光顕微

鏡で岩石を観察するためのワークショップをして欲しいと依頼され、新キャンパスの実験室に行ってみると高性能の偏光顕微鏡が何台も導入されているのではないかと驚くべきは、鉱物の化学組成を分析する装置まで設置されていることだった（電圧が安定しないため電源には繋がっていなかったが）。後日、分析装置についての実習も行っている最中にふと気づいたが、集まった学生たちの英語能力は2012年の時に訪れた時の学生たちのそれと比較にならないほど高い。物怖じせずに質問もするので、学生の理解度を容易に確認することができる。後で聞いた話では、ゴロンタロ大学の地質学教室に進学すると日本に行けるという実しやかな噂が2012年以降少しずつ広がり、比較的優秀な学生が地質学教室に進学するようになったらしい。



写真2, リンボト湖で遊ぶ子どもたち

ところで、ジオパークとは、熱心に石を観察する公園のことではなく、ジオ多様性（岩石、土壌、水、地形、大気など）を背景として育まれた自然や文化を丸ごと楽しめる地域のことである。エコツーリズムを成り立たせるための第一歩は、自然や文化が豊かな場所（ジオサイト候補地）を選定し、その場所で自然や文化の繋がりを読みとることである。教科や分類体系などに捉われず、自然や文化の本質を読み解くことでエコツーリズムのストーリーやコンテンツを考える。ジオパーク活動では、地域住民と共に地域の問題を話し合い、ボトムアップの動きを作りながらそれを解決していく。この活動を継続することで、地域の自然や文化に対する住民の誇りを醸成する。活動で読み解いていく地域の自然や文化の本質を地域住民が自由に学べる場を創る。観光客の声をも地域住民に届けることで、自分の周りの自然や文化に感謝してそれを伝え守っていく。誰も自らが生まれ育った環境を当たり前のものだと思うのはごく普通のことだ。地域住民が読み解かれた自然や文化を少しずつ理解したり、観光客の声を聴いたりすることで、自分の周りの自然や文化に感謝してそれを伝え守っていく。このような正のスパイラルを生み出すのがジオパークである。

ビザが発行されるまでごろごろと寝ている訳にはいかないので、まずは出会った人々にジオサイト候補地となりそうな場所を書き出してもらおう

とにした。一度できあがった場所のリストは次に
出会った人に見てもらい、つけ加える情報があれ
ば書き込んでもらう。それを繰り返す一方で、リ
ストップされた場所をぶらぶら歩いて自然や文
化の豊かさを見て回った。



写真3. 黄昏のリンボト湖

ゴミだらけのゴロンタロ

ゴロンタロがゴミだらけだということに気づい
たのは2018年に参加したシンポジウムの巡検の
時だった。ゴロンタロ人の心の湖だというリンボ
ト湖の畔の村を訪れて住民たちと話してみた。板
塀に洗濯物が干され、にわとりを追いかけて回して
遊ぶ子どもたちのいる長閑な村では、ここのとこ
ろ大雨が降ると床上まで浸水する被害が起きると
言い、村人は困っていた。ちょうど床上浸水の被
害があったばかりの村中には、浸水した時の水位

が一目見てわかる泥の水平線で建物の外壁が汚れ
たままになっており、あらゆるタイプのゴミが散
乱していた。



写真4. 海岸に打ち上げられたゴミ

ビザ待ちをしているある朝、ジオサイト候補地
としてリストアップされた海岸の沿いの自然と文
化を見に行くため、車でゴロンタロの街中を抜
け、海岸へ向かっていた。ちょうど海岸線に出る
ところで、振り子のように反動をつけられた大き
なゴミ袋が青い海へ投げ込まれるところを見てし
まった。投げ込んだ住民からすればゴロンタロ湾
が日常のゴミ箱という感覚なのかもしれないが、
自然に対する住民の意識の程度を見せつけられた
気がした。街を散歩しても村を訪れても、人が沢
山住んでいる場所には至るところにゴミが打ち捨
てである。生まれ育った場所だからこそ客観的価
値が見出しづらいというのは日本でもよくある話

だが、豊かな自然を自ら損なう行動を客観視できない住民の意識は、何をきっかけに変容するのだろうか。発展を遂げた多くの国が過去に経験してきた環境汚染は、住民の意識の変容によってどの程度改善されてきたのか。他の国々の経験はゴロンタロでも通用するモデルなのか。さらに俯瞰して考えると、先進国やインドネシアの発展的大都市のツケがまわりまわった結果、ゴロンタロのような地方がそれを払っている可能性はないのか。



写真5. 地域住民によるデュランガビーチの清掃活

ゴロンタロは手軽にシュノーケリングで優雅に珊瑚礁を楽しんだり、海岸のすぐ近くでジンベエザメと一緒に泳げたりする観光資源はあるものの、インバウンドの観光客は年間一万人程度だと言われている。それでも外からの訪問者が少しでも入る村では、毎日海から運ばれ波打ち際に打ち上げられたゴミを自主的に掃除する住民の姿が見

られた。つまり、多少なりとも自然・文化の資源を客観的に評価されている地域では、住民の（少なくともゴミ問題に対しての）意識の変容はすでに起きている。ゴミが散乱している場所に観光客は入りづらいが、観光客が入らなければ地域住民の意識の変容も起きづらい、と諦めているのでは意識変容の波は広がらない。そこを「Beautiful Gorontalo」をキーワードにジオパークで拡げていこうと考えている。



写真6. オレレの珊瑚礁と珊瑚石灰岩



写真7. ボトゥパラニで回遊するジンベエザメ

コロナ渦で何ができるか

研究ビザが発行されたとの吉報が入ったのは、出発から3週間程経った日のことだった。発行が長引いたおかげで順調な滑り出しを見せたジオパークプロジェクトについて、ゴロンタロのF M局出演の打診があった直後だったので、後ろ髪を引かれる思いで出演をお断りした。

コロナウイルスが世界中に大混乱を引き起こす少し前のタイミングで帰国することができた訳だが、今後ジオパークを立ち上げるプロジェクトは現地の共同研究者らとリモートで進めていくことができるのだろうか。我々の研究は地域住民を巻き込んで意識の変容を生み出すボトムアップ型かつ研究期間が持続性を有する成果を目指している。ゴロンタロの研究者と住民の結びつきをリモートでサポートする上で痒いところに手が届かないストレスも多いが、研究期間終了後の持続性を高めるためには、いわゆるwith コロナの研究スタイルの方が適している面も多いのではないかと感じながら最適な研究方法を模索している。

2020年2月に研究ビザを携えて帰国する時、自分へのお土産で買って来たピノグ村の有機栽培珈琲はもうすぐ底をつく。ピノグ村とは、国立公園の入り口から約40km離れた珈琲の産地で、アクセスする車道がないため車で行くことはできない。オフロードバイクで約6~8時間（徒歩で約

12時間）かけてようやく行き着ける珈琲の産地である。ひとたび雨が降ると雨水で山道が恐ろしくぬかるみ、泥まみれになりながらオフロードバイクを押して歩かなければならないらしい。珈琲豆の入った袋を担いで歩く人もいる。コーヒーカップに珈琲の粉と熱湯を淹れてかき混ぜ、粉が沈殿する頃には私の部屋がピノグ珈琲の香りで満たされる。毎日が真夏のゴロンタロを思いながら、今日もパソコンの前に座りゴロンタロの人たちと繋がる。

菅原 久誠（すがわら ひさなり）



写真8. 暮れるアグロツーリズムの田園

南極での調査生活

南極と聞いて皆さんはどのようなことを思い浮かべますか？雪と氷の世界？極寒の地？吹雪？ペンギン？オゾンホール？最近「南極料理人」という映画がヒットしました。それを思い浮かべた方もいるかもしれません。私は、2020年初めに南極地域観測隊の隊員として南極に行ってきました。今回、その時の南極の様子や、現地での調査、基地での生活などを紹介します。



写真1. セール・ロンダーネ山地陸上生物調査チームの集合写真(右から、フィールドアシスタントの高村さん、埼玉県自然学習センターの田留さん、私)

南極地域観測隊

南極と聞いて、タロとジロを思い浮かべた方も

おられるかもしれません。タロとジロは第1次南極地域観測隊(第1次越冬隊)において、隊員が南極に連れて行った犬です。やむを得ず連れて帰ることができなかったが、1年後まで生き残ったことでも有名です。それ以降も南極地域観測は国家事業として続けられてきました。

私は第61次南極地域観測隊のセール・ロンダーネ山地陸上生物調査チームの一員として、2020年1月から2月にかけて、南極大陸で調査を行いました。日本から派遣される隊員の多くは昭和基地に滞在するのですが、私はセール・ロンダーネ山地にあるプリンセス・エリザベス基地(Princess Elisabeth Station)に滞在しました。残念ながら「南極料理人」の舞台となった昭和基地には行けませんでした。プリンセス・エリザベス基地と昭和基地は約1000km離れており、内陸(海岸から約400km)にあって、昭和基地が沿岸にあるのとは異なります。プリンセス・エリザベス基地の方がより内陸にあるため、平均気温が低く、乾燥しており、生物にとってはより過酷な環境であると言われています。

南極までの移動についても触れておきます。日本の南極地域観測というと砕氷船「しらせ」が有名です。昭和基地に滞在する隊員は、オーストラリアから「しらせ」に乗って海洋調査を行いながら南極まで移動します。「しらせ」での移動も日本の南極地域観測の醍醐味なのですが、こちらも残

念ながら乗りませんでした。

プリンセス・エリザベス基地へ行った我々のグループは、南アフリカから飛行機で南極大陸まで移動しました。飛行機と聞いて驚かれたかもしれませんが、私も最初はびっくりしましたが、実際に南極大陸の氷の上に空港があり、一般的な旅客機（ボーイングなど）が離着陸します。



図1. プリンセス・エリザベス基地と昭和基地 (Google Map より作図)



我々は、ケープタウンから一度ロシアの空港に移動し、そこからプリンセス・エリザベス基地の近くの飛行場（滑走路用に整備された場所）に移動しました。

南極の気候

セール・ロンダーネ山地地方の気候についてお話しします。私が滞在した1月から2月は南極では夏にあたります。これは、南極大陸が南半球にあり、四季が日本と逆になるためです。気温はだいたい -10°C から -20°C でした。もちろん場所によってはもっと低温になります。それでも例年より暖かかったそうです。非常に乾燥しており、新雪が降るということはありません。ただし、風が強いと積もっている雪が飛び、それが吹雪になります。空気中にほとんど水分がないため、新しい雪



写真2. ケープタウンから南極に移動した際の飛行機(左:ケープタウン、右:南極大陸のロシア飛行場)ケープタウンで飛行機に搭乗する時は半そでですが、降りる時には防寒着を着ています)

はできないが、氷点下を下回るため雪や氷が融けないということです。

また、紫外線が強く、日焼けに注意する必要があるありました。日焼け止めクリームを何度も塗っても、帰ってくる頃には黒くなってしまいました。日焼けよりも目への影響に注意する必要があります。外に出る時はサングラスが必須です。さらに、紫外線によるバッグやウェアの劣化も早いです。日中は雲がなければ非常に澄んだ青色の空が見られます。空の青と雪の白のコントラストが非常にきれいでした。高緯度（南緯71°）ですので、夏の時期は白夜に近い状態になり、夜中でも外は薄暗い状態でした。



写真3. 夜10時半(朝ではありません)でも明るい

南極での調査

私は、極限環境の微生物（主に細菌）の探索と

その特徴の調査という目的で観測隊に参加しました。私が実際に南極で行ったことは、微生物がいないような砂の採集です。南極では植生が発達しないため、皆さんが想像する一般的な微生物源としての「土」はほぼ存在しません。ですので、数mmから目に見えないくらい小さな粒子状の砂を主に採取しました。南極で微生物を培養して形質を調べて・・・、ということは難しいので、南極では採集のみを行いました。南極のような一面雪と氷の世界でどこに砂があるのか？と思われるかもしれませんが、南極には露岩帯という岩肌が露出している場所があります。南極大陸は厚い氷で覆われていますので、その南極大陸の山の頂上部分の岩肌が氷の上に突き出ている場所ということです。

そもそも微生物がいるのか？と疑問に思われたかもしれません。南極環境は、低温（平均的に氷点下）、乾燥、高紫外線照射という生物の生存には適さない条件がたくさんあります。

しかし、そのような極限環境でも微生物がいることがわかってきています。ですが、まだあまり調べられていないので、今回調査することにしたということです。特にセール・ロンダーネ山地がある地域は、沿岸地域よりもさらに厳しい環境であり、そのような極限環境にどのような微生物が生息しているのかに興味を持っています。また、あまり人が立ち入っていない場所が多いため、人の影響がない極限環境の微生物を調査することが

できます。

気温が氷点下の環境であっても、日光が当たる場所では氷が溶け、地面が湿っている場所があります。また、少し岩をどかしたり、表面の砂を掘ったりすると湿った部分が出てきます。そういった微生物がいそうな砂を採集しました。



写真4. 岩肌が氷の上に突き出た露岩帯



写真5. 雪が日光により融けて湿っている砂

さらに南極でも、岩の表面や砂の表面に地衣類という生物が生息しています。同行者は地衣類の専門家で、多くの地衣類を採集していました。専門家曰く、10種類以上生息しているそうです。



写真6. 生息している地衣類（オレンジ、黄色、黒色、繊維状の灰色の地衣類は全て別種）

確かに、色や形が異なる地衣類がたくさん生息していました。この地衣類がいる場所の付近や下の砂も採集しました。また、ユキドリトリデというところに行った際には、ユキドリという鳥とその巣を見ることもできました。ユキドリの糞は微生物の栄養源になると考えられるため、巣跡周辺の砂も採集しました。

この地域で見ることができる大型生物はこのユキドリと、それを狙うトウガモのみだそうです。ユキドリはよくもこんなに寒くて風の強いところ

に巣を作るなあと感心しました。他の鳥が利用しにくいところを優占的に利用するという生存戦略なのでしょう。

基本的に調査は天候が安定している時のみ行いました。朝にスノーモービルで出発してあらかじめ計画しておいた露岩帯へ移動し、現地で砂を採集して夕方に基地へ戻るというスケジュールでした。条件の異なる場所へ行き、異なる環境の砂を採集しました。



写真7. スノーモービルでの移動

採集した砂はできるだけ現地の温度（氷点下）を維持した状態で日本に持ち帰り、研究室の冷凍庫で保管しています。現在、持ち帰った砂から微生物を増殖させて、種類や形質を調査しているところです。地理的要因（斜面の向き、岩石の種類や割合など）や気象条件（日照の長さ、風向きなど）だけでなく、地衣類の有無、ユキドリの糞と

いった生物的要因が異なる様々な環境から砂を採取したので、それぞれの環境ごとに微生物の種類も異なるだろうと予想しています。

南極での暮らしの様子

ここから私が滞在したプリンセス・エリザベス基地を紹介します。プリンセス・エリザベス基地はベルギー人探検家のアラン・ヒューバートさん（Alain Hubert）が中心となって運営している基地です。越冬は行われず、南極の春から夏にあたる11月から3月の間だけ運営されています。毎年のように日本人研究者が滞在し（本年度は私を含めて8名）、日本の南極地域観測隊と結びつきの強い基地です。日本製のショベルカーやペールトイレなども利用されています。



写真8. プリンセス・エリザベス基地（左側では新たなガレージを建設中）

基地は写真にある通り非常に面白い形をしています。これは空気力学を考えて設計されたものだと思います。私が滞在したときは約30人が生活していました。半数が基地の運営や設営に携わる人で、残りの半分が研究者でした。私も驚きましたが、基地には寒冷地仕様のショベルカーやクレーン車があり、新しいガレージを増築していました。その様子は、地面が白いことと、全員が完全防寒装備で作業をしていることを除けば、一般的な工事現場と同じでした。

基地内は20℃程度に保たれており、快適に生活できます。食事はシェフが用意し、それをみんなで食べます。食事時にはみんな集まり、わいわい言いながら食事をとりました。週末にはみんなでお酒を飲んだり、ゲーム（卓球やテーブルサッカーゲーム）をしたり、映画を見たりしてすごしました。我々以外はヨーロッパの各国から来ている方でした。



写真9. 週末にはみんなでお酒を飲んで談笑している



写真10. 週末に卓球を楽しむ様子

基地では快適に過ごすことができましたが、唯一、水の利用（シャワーとトイレ）は制限されていました。これは、プリンセス・エリザベス基地では使用済みの水を基地内で浄化するシステムを用いていたためです。浄化槽があり、その容量を超えそうになると注意喚起がなされました。シャワーは2、3日に1回で、一度に利用できる水の量も決まっていました。トイレは、浄化槽の容量に十分な余裕がある場合は水洗トイレが利用できましたが、ほとんどの場合、ラップポイントイレを利用しました。ラップポイントイレとは、災害時に利用するような、ビニル袋に密閉して廃棄する方式（トイレの廃棄物を含め、全ての不要物は持ち帰ります）のトイレです。ちなみにそのラップポイントイレは消耗品も全て日本製のものです、非常に評判がよかったです。



写真 11. 基地のトイレ（正面は水洗トイレだが、ほとんどの期間使用できず、右のラップポントイレを利用）

基地の前にはテントがあり、個人的に興味があったので、そこにも泊まらせてもらいました。氷点下の環境でのテント泊ですので、寒くて寝られないなら基地に帰ろうと思っていましたが、非常に快適でした。朝起きると暑くて汗をかいているほどでした。寒冷地用のテント、シュラフ、マットレスを利用したことがその要因だと思います。ただし、夜中でも明るいのでシュラフに入るか、タオルをかぶらないと寝つけず、目が覚めた時も何時ごろなのかがわからなかったです。

南極の景色は非常に雄大で、露岩帯の頂上から見渡す景色は絶景でした。空気が澄んでいるため（塵などがいないため）、吹雪いていなければ遠くま

で見渡せます。また、ウインドスクープ（山肌の風上にできるくぼ地、大きい場合は深さ数十メートルに及ぶ）の底から見上げる景色も最高でした。吹雪いている時には外出できないので、採集中に見る景色はきれいなものばかりでした。外出できないときに基地の中から外を見ると、強風の中を雪が舞っており、ほとんど何も見えないので、南極環境の厳しさも垣間見ることができました。



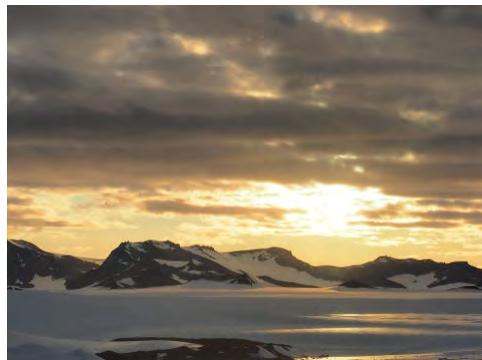
写真 12. 基地前に設置されたテント

最後になりましたが、第61次隊長 青木茂博士をはじめとする観測隊の皆様、国立極地研究所副所長 伊村智博士、セール・ロンダーネ山地陸上生物調査チームの高村真司さん（国立極地研究所南極観測センター、ガイドオフィス・モンターニュ）、田留健介博士（公益財団法人埼玉県生態系保護協会埼玉県自然学習センター）に、このような

貴重な調査及び経験をさせていただきましたことに御礼申し上げます。

林 昌平 (はやし しょうへい)

以下は、南極の雄大な景色の写真です (無題)。



おばあさんの灰皿

旅すること留まること

このエッセイを書くことになったある日、ふと浮かんだ問いに私はとりつかれてしまった。私はなぜこれほどにフィールドワークが好きなのだろうか。なぜ好きなのか。とってもシンプルな問いがゆえに答えに困ってしまったのだ。この問いに科学は正解を与えてはくれない。もちろん科学の言葉を借りて説明することはできるが、最終的には私という自分自身と向き合わなくてはならないからだろう。

旅好きだからか。私には映画や物語の世界に入り込んでしまう癖がある。幼少期はドワーフになって妖精の国を冒険したり、妖怪の友達と地獄から脱出したりした。テレビの旅番組も好きで、画面に映る「未だ見知らぬ」土地や文化に心を躍らせた。大人になってからは多くの旅をしてきた。つい最近も、ガーナでのフィールドワークを終えた帰路にアゼルバイジャンを訪れ、腐れ縁のスペイン人の旅仲間とふたり旅をした。アジアとヨーロッパ、資本主義と共産主義の狭間にある「未だ見知らぬ」出会いを求めて、私たちはもっぱら路地を歩き回った。朝は土地の人に倣い絶品の紅茶とパンを楽しみ、昼はソビエト製の自動車が走る

姿や町並みに残る社会主義国家の名残に興奮し、夜は欧州 N01 とされるワインに酔いしれながら店を渡り歩いた。

と、ここまで書き進めてみると、私がフィールドワークに通う理由に「旅好きだから」という答えがどうもしっくりこないことに気づく。私にとっての旅や冒険の魅力は「未だ見知らぬ」土地や人との出会いにあるようだからだ。どうやら、私にとって旅とフィールドワークの楽しみやよろこびは違うようだ。私にとってのフィールドワークとは、見知らぬ物事との出会いではなく、同じ土地や人に繰り返し会うこと、つまり同じ場に「留まり続ける」ことだからだ。同じ土地や人を繰り返し繰り返し訪問し、共に働き語り飲み食い遊ぶ。その繰り返しのなかで、その人やその暮らしに「近い」ところから世界を眺められるようになったとき、はじめて見えてくる世界がある。

留まり続けることで見えてくる世界のひとつに「虚言」がある。いわゆる「嘘」だ。なんでこんなに分かりやすい嘘をつくのだろうと素朴に楽しんでいる節もあるが、その虚言の奥にある真心に触れる時がある。虚言と真心。一見すると相反するこれらが結びつく瞬間。この瞬間は、フィールドワークでしか会うことのできない美しさのひとつなのだと思う。ここではあえて日本でのフィールドワークの話をしたい。私にフィールドワークのよろこびと奥深さを教えてくれた、ひとりのお

ばあさんとの出会いの話だ。



写真1. 松尾の風景

おばあさんの虚言

徳島県神山町というまちに松尾という小さなむらがある。鋭く尖る讃岐山脈の中腹にあるこのむらは、まるで崖に張り付くように点在する家々で形成されている。隣の家まで歩くと15分もかかることもあるほどの散村だ。季節ごとに移ろう色彩豊かな山々は美しい。この景色は、1960年代初頭から多種多様な花木をコツコツと山に植え続けてきた人の手で長い時間をかけて創られてきたものだ。現在では、その枝葉を摘み華道の材料や料理の“つまもの”として出荷することが松尾の生業となっている。かつては林業・炭焼き・養蚕や桑生産が盛んだったという。田んぼはないが、その

代わりに松尾の人々は山から様々な糧を得ることで暮らしを成り立たせてきた。そのおばあさんも山とともに生きた人だ。おばあさんが暮らす家は、庭と山の区別なく植えられた花木に囲まれている。その木々たちを、まるで我が子のように愛おしみ、「一本一本に思い出があってね、子育てと同じですよ。かいらしい(かわいい)ですよ」という。その笑顔は静かで温かった。ここで生まれ育ち嫁ぎ、子を育て、親と夫を看取り、山とともに一生を終えたひとだ。

その日は、晩秋にもかかわらず少し歩くだけで汗ばむ暑い日だった。瀬戸内らしい雲ひとつない真っ青な空が木々の間から透かし見える。私は、ひとり暮らしのおばあさんに会うために汗を拭きながら道を登っていた。道のほとりに、一部が欠けたり薄い緑や茶色に変色したりした五輪さんや無縁仏の石碑が目立つ。四国遍路の道がこのむらを通るからだ。生と死の間にあるとされるこの地を求めてやってくる白装束の遍路人を受け入れてきた歴史が垣間見える。むらの歴史は古い。

おばあさんの家は道路から右に下る分かれ道を少し進んだところにポツンとある。敷地に入ると、一気に視界が開け、壮大な青空と美しい山々が目に飛び込んでくる。思わず感嘆の声が漏れる。おばあさんは、その日も留守だった。山に探しに行ってもいいのだが、山は広いし行き違いになってもと思い、私は庭先を散策しながらおばあさんの

帰りを待った。しばらくして、おばあさんはかごいっぱい枝葉を背負って戻ってきた。簡単な挨拶を交わし、すぐに包装や箱詰めなどの出荷作業を手伝う。愛おしくように枝葉を一本ずつ丁寧に丁寧に扱う仕草が印象的だ。作業が一段落つき、お茶をいただくために客間に上がった。大広間は隅々まできれいに掃除され整理整頓が行き届いている。縁側の大きなガラス窓には、手入れされた庭と透き通った青空が広がる。その広間は、ひとり暮らしには無駄に大きく感じた。かつては、多くの家族で賑わっていたのであろう。

その灰皿は、その大広間の真ん中にある、これまた大きな座卓の上にポツンと置いてあった。卓上にあるのは、タバコの吸い殻の入った灰皿だけだ。当然ながら、その吸い殻だらけの汚れた灰皿は目立っていた。私は灰皿に視線を止めながら、ふと「あれ？おばあちゃんはタバコを吸われるんですか？」と訊ねた。するとおばあさんは、きまりが悪そうに「ああこれ。これは息子が吸うたんやよ。ああ恥ずかしい、ほかす(捨てる)のを忘れとったわぁ」と言いながら、その灰皿を手に取り台所へと持っていった。私は驚いてしまった。なぜなら、その言葉が明らかな「虚言」だったからだ。掃除は隅々まで行き届いている。しかも、灰皿は部屋の中心に置いてあるのだ。タバコの吸い殻を捨てることだけ忘れるわけがない。

ところが次の瞬間に、私の心は驚きではなく、

押さえ切れないほどの温かな感情で満ち溢れた。なぜなら、おばあさんは、吸い殻を台所に運んだにもかかわらず捨てることなく、さきほどの花木と同じように丁寧に扱っていたからだ。その顔は穏やかだが、目は感慨深げだった。その理由は2日前にあった。



写真2. 村祭りの風景

虚言の奥へ

私がおばあさんを訪ねた2日前は、年に一度の村祭りの日だった。神社のあるむらの中心には数件のテキ屋が並び、獅子舞や子供踊りなどが披露されていた。観光客もいない、無形文化財でもないが、松尾の人々にとっては都会に出た家族や親戚が戻ってくる大切なハレの日だ。おばあさんの家にも、大阪で会社員をしている息子家族が里帰

りしていた。息子と孫と一緒に、獅子舞を見に山を降りてきたおばあさんの顔は晴れやかだった。おばあさんはよく息子の話をした。自分が若い頃には想像もつかない人生を息子は切り開いたのだと。大学に進学し、大きな会社に就職し、都会に家を建てた息子が誇りなのだと。

祭りが終わり、大阪に戻る息子家族を見送る時、ひとり暮らしに戻った時、おばあさんはどんな気持ちだったのだろうか。寂しいという言葉では十分に言い表すことはできないのではないだろうか。次に息子らに会えるのはいつになるのだろうか。

そんな気持ちを抱えつつ、おばあさんは家の後片付けをしたのだろう。掃除機をかけ、食器を下げ、テーブルを拭く、息子が吸ったタバコでいっぱいになった灰皿も手に取っただろう。でも、息子の吸い殻はおばあさんにとって、そこらの吸い殻とは全く違う特別なものだったに違いない。だから、おばあさんは息子の吸い殻を捨てられなかったのだろう。というよりも、大切に残していたのかもしれない。

都会で活躍する息子の成長と幸せを喜び、木々(子供たち)の世話で忙しい豊かな毎日が確かにそこにはあった。でも、やはり息子や家族が恋しいのだ。もしかしたら木々をかわいがるのは、息子に帰って来てほしいという思いを押し殺すためだったのかもしれない。それも含めて、しかたのないことだと言いつつ聞かせていたのかもしれない。そ

んな入り混じった思いの現れが、あの吸い殻まみれの灰皿だったのだろう。

いまとなっては、おばあさんがどう思っていたのかはわからない。灰皿のことについて、勇気を出して聞いてみればよかったと思うときもある。でも、ひとつだけ確かなことがある。それは、気になって訪ねた翌日も、灰皿は吸い殻をそのままに台所に大切に置かれていたことだ。

おばあさんと私

息子の話をする時、おばあさんはこんな話を繰り返した。「孫もかいらしい(かわいい)。やけど、不思議なもので、やっぱり年を取っても、髪がのうなっても(無くなっても)、子どもは子どもなの。息子がかいらしい」と。そして決まって続けてこう言うのだ。「子どもは若いうちにつくったほうがええ。早う産めば産むほど、長う成長を見守れる。それは幸せなことよ」と。そう私に言い聞かせたおばあさんとあの灰皿のおかげで、私達夫婦は若くして子どもを授かることになった。その愛娘は多感な中学2年生になった。最近、素っ気なく怒りっぽい、それはそれで確かにかわいい。おばあさんの言うとおりで。愛する3人の娘たちのかawaiiさがどのように変わっていくのであろうか、いまから楽しみで待ち遠しい。そして、歳を重ねていく自分を両親に見せるためにも、し

ばしば帰省しよう。どうやらおばあさんは、人生
を豊かにする英知を私に授けてくださったようだ。

村田 周祐（むらた しゅうすけ）

アートに発見！世界の共感性

日本には家紋というものがある。女性は母親の紋を継ぐこともあるが、家柄と家業により代々受け継いでいく「その家のロゴ」である。それはもう無数にある。分かりやすいものでは水戸黄門の葵のご紋などのようにいかにも、というようなみんなが知っている歴史的なものもある。だが実は自分の代から新しく作っても良いという自由なものようだ。家紋には家業の内容を象徴するもの、家訓を示すものなど意味があるものが多い。でもどれもとてもカッコよくて完成されたデザインが多いと思う。

私は15年来、日本の伝統工芸の一つ、金属工芸の仕事に携わってきた。3年前に独立し現在、個人作品も制作している。昨年8月に作品のモチーフ探しにガーナのクマシを訪れた際、アディンクラシンボルというものを見つけた。これは前述の家紋とは違い、家系で引き継ぐものではない。だがこちらでもまたロゴのような紋様でデザインが素晴らしく、それぞれ意味を持っている。詳しくは後述するが、そこに込められた意味は格言のようなもので世界共通に大事なことであった。

思い返せば世界各地どこへ行ってもデザイン性の高いシンボルがあった。文化も、常識も違うのにそこには必ず紋のようなものがあった。人間は

文字やロでくどくど説明されるより、美しい形で得た感覚の方が心に刻まれるのではないだろうか。



写真1. ドアやゲートに飾られるレリーフ

(左上 NKYINKYIM、右上 DENNIMMEN、左下 GYENYAME、右下 HYE-WONHYE)

日本の家紋とアディンクラシンボル

アディンクラシンボルは、諸説あるもののコートジボワールのギャマン族によって作られた視覚的シンボルで、観念や格言を表すものようだ。ガーナのクマシ（アシャンティ地方）でも受け継がれており、今でも街で見かけることができる。もともと文字を持たない民族だったアシャンティの人々は、平和に暮らしていくためにこういったシンボルを作って子に孫に大事な教えを託してい

ったようだ。街を歩いていて一番見かけたのが、家のドアの上やゲートの中心に金属性のレリーフが飾られている *GYE NYAME* (写真1左下) であった(読みはジェナメ、英訳 *symbol of Supremacy*)。地元の方のお話ではこれぞクマシの人々にとって一番大事なシンボルらしく、「except for God」と説明してくれた。調べてみたら多くの訳で「symbol of the supremacy of God」とあり、神が実現を許す限りという意味。つまりは「全能」という意味のようだ。

帰国してからこのシンボルが日本の漢字「美」に似ていることに気づき、更にシンパシーを感じた。次に、調和を意味する *BI-NNKA-BI* (写真2下) というシンボルがある(読みはピンカビー、英訳 *symbol of harmony*)。このデザインは、日本の巴紋に似ているように思う。英訳で *Bite not one another*、つまり他者(他民族)に噛みつかない、すなわち共存を意味する。巴紋(図1、図2)は意味を多く持つが、そのうちの一つにまさに二者三者が一つとなり戦うさま。というのがあるので、意味もやはりそう遠くないように思う。面白い。また画像壁レリーフの多芸や多才を意味する *NKYINKYIM* (写真1左上、読みはおそらくンキンキム、英訳で *symbol of versatility*) は、何かに似ていると思っていたら香道(茶道、華道と同じく日本発祥の文化芸術一つ)の源氏香図のうちの若紫(図3)に似ていることに気づいた。

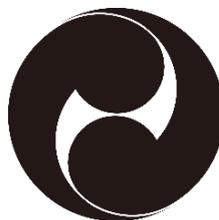


図1. 左二つ巴

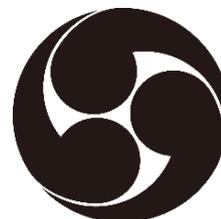


図2. 右三つ巴

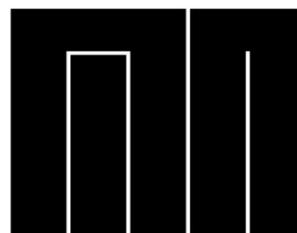


図3. 源氏香図 若紫下

これも芸つながりでシンクロしているのだ。他にもガーナには多数シンボルがあり、アフリカ圏ならではのものもあるけれど、人間の美しいと思うもの、感覚、気持ちを表現しようとした形は種族が違って自然と似るのかもしれないと思う。このデザインのシンクロを一つのシリーズとして、今後も世界各地行けるだけ行って作品として展開したい。文化比較をしつつ、現地デザインはきちんと押さえ、私のアーティストとしてのアレンジも上手に加え、作品(写真2)として並べてみたら面白いものができる気がする。



写真2. 筆者が制作したバングル
(上: GYENYAME、中: NYAMEDUA、
下: BI-NKKA-BI)

ガーナと日本の国民性について感じた事

大学時代、先生や先輩の多くがアフリカ土壤について研究されていた。しかし卒業論文のテーマがインドネシアの土壤動物だった私にとってアフリカはこれまで未知であった。いつか行きたいとかねてより思っていたので、2019年のガーナ行きはとても感慨深い旅となった。

この遠く巨大な大陸と島国日本に共通点などないと思っていたけれどガーナに関しては行ってびっくり。共通点がたくさんあった。例えばガーナの人々はすごく節操がある。行く前は男女が所かまわずくっついているようなイメージがあったけれど、そんなことは全くない。胸もお尻もビッグサイズな彼らだが少なくとも公共の場ではすこぶる品が良く、むしろ堅物感があるくらいだった。日本人みたい。子供たちに関しても、インドネシアに行ったときはカメラを向けると集まって来てしまい、いい写真の一枚もとれなかったりしたけれどクマシの村の子供たちは恥ずかしがって逃げて行ってしまう始末。

お母さんに「行きなさい」みたいなことを言われ、やっと来てくれた。こんなところも日本の子供たちと重なる。照れ屋というか表に出たがらない国民性のようなもの？

そして女の人が良く働く。赤ん坊をおぶって家事をし、モノを売り、とっても忙しそう。男の

人は道端でおしゃべりしてる姿が目立ったけど、それが仕事なのだとしたら失礼。どこの国でも今は女の人が遅いのだろう。



写真3. 村の子供たち

他民族と繋がるということについて

ガーナは人が親切だ。ただ、親切も含めすべてのことに関して基本お金がかかるのは私が外国人で観光客だからだろうか？親切だなと思ったら、あ、お金いるのね？ということが多々あった。道の案内をすることでお金をちょっともらう。それが狡いのか、普通なのか。もらえるもんならもらっとこうというのがぼったくりなのか、生きてく

知恵なのか。どうなんだっけ？それでちょっと傷つくのはお門違いか？だんだんわからなくなってくる。

でも子供がかわいい。人がみんないい顔してる。明るい。強い。健康そう。道端で売っている布のデザインがすごく素敵。へんな揚げ菓子も意外とうまい。それでよいのだと思う。

結局、どこへ行っても土地によって「当たり前」が違うから、行き違いは生まれるけど、土地の子供が可愛いらしかったらだいたい許せる。私の場合ローカルなデザインが素晴らしかったら尚良し。色々あってちょっと傷ついても取りあえず水に流す。流せたら笑えてきてだんだんなじんでいく。そして繋がり始める。

今回見つけたアディンクラシンボルに込められた教えも、つまりはそういう事なのだ。アディンクラシンボルでなくても、どこの土地にも同じような伝統継承はあって、たぶんそこにはだいたい同じようなことが伝えられているのではないかな。他民族間でなく同じ国の人間同士でも共存して繁栄していくためには他者の常識に対する理解と共感が必要だ。他者に噛みつくな。共存せよ。調和を大事に。ここがどこであれ、今が何時代であれ人間にとって大事なことは変わらないのだ。

そしてそれをどこの土地でもアートとして伝え、残っているのもまた意味深い。私はデザインすること、作ることが好きだけど、それもまた人間に

とって大事で必要なことなのだろう。強要するのではなく共感させるために、人間はアートを使うのかな。

そう思うと、それを仕事に出来ている自分を誇らしく思う。



写真4：村の子供たちと私

今後の目標

今思えば今回のアフリカ行は行き当たりばったりで非常にもったいなかったと反省している。次回また行ける機会があれば今度は目的を定めて人々に会い、より計画的な旅を目指そう。もう少し建物やシンボルの写真を撮って、イベントやギャラリーなどで紹介する素材も揃えておこうと思う。自分の作品というだけでなくこの「デザインのシンクロ」シリーズは文化の違い、「当たり前」の違いの面白さ、そこの人々の紹介にもなるだろうから。

クマシ以外の土地にも出向いてみたい。きっとそこには似たシンボルデザインがあるだろう。似た観念や格言が存在し、美しいデザインで表現されていることだろう。各地のシンボルをそこに込められた先人の想いや教えと共に並べてみたい。

何が見つかるだろうか？非常に楽しみだ。

これは今の私の目標であり夢だ。この先、この活動が続けられるように丈夫な身体を保ち仕事をして貯蓄し、いつでもスタンバイOKでいようと思う。

川尻 優子（かわじり ゆうこ）

地方での「アート」。その一年。

今回、「地方でアート活動を行っている人」ということで執筆の依頼を受けた。

実際、私は日本の青森県の青森市という「地方」に住み「アート」活動（自分の言葉で言うと「表現活動」）を行っている。そのため依頼された題目に当てはまる人間ということになる。しかし執筆と言われても論文の様に自らの論説を述べられるかという、そこまで確立した論説を持っている訳ではない。だが昨今の国内のアート界隈では「地方とアート」という言葉がトークイベントのテーマや書籍のテーマとして取り上げられている傾向があるのは承知している。特に私が住む青森県では2021年から五館の現代アート施設が揃うということもあり「地方とアート」についての論議は必要なテーマだとも認識している。

本来であれば、まとめの文章として最後に述べるべきことであろうが、先に私の「地方とアート」について記述したいと思う。

昨今「地方とアート」という言葉をよく耳にし目にする。その理由としては、「地方」という田舎に「アート」と呼ばれる都会的な言葉がミスマッチと違和感を感じさせるためテーマとしての話題性があるからだと思う。違った言い方をすると「田舎と言われる地方でアートが成り立つのか」とい

うことであろうと思う。

私は、「地方のアートを盛り上げるため」という意思がある訳ではない。と言うと嘘だ。ただ、「成り立つ」とか「盛り上げる」という言葉の定義自体が難しく、言葉そのものの解釈の範囲も広いため、これらは実感するには非常に難しい。しかし数字で表すと課題や成果は実感として分かり易いのかもしれない。本県は昨年の全国都道府県別平均所得ランキングは47位だ。さらには人口も減少傾向にあり、さらには県庁所在地青森市の人口も30万人を切り始めて8年が経つ。中心部の空洞化のスピードも増している。つまり「アート」と呼ばれる実態の見えない文化事業に予算を投じられるような県ではないということになってしまう。ところが、このような中で本県および本市はアート施設が増え、文化事業の予算が組まれ続けている。ということは、文化事業を牽引している行政側も「アート」に対する何かしらの期待があつてのことなのだろうと思う。おそらく、観光事業として「アート」を取り入れている側面は多分にあつたと思う。実際「アート」は世界共通のものであるため、観光事業としての活用は期待できるものであつた。もう一つは「地方」と「都会」の差を埋める為であろう。「アート」と言われる都会的でトレンド的なコンテンツを取り入れることで都会との差を埋め、いわゆる田舎の「遅れ」や「劣等感」を払拭したいという思惑があるのだろう。そして願わくば先々

への経済的発展へ繋げたいのが大きな理由であると思う。

私自身の話しに戻すが、実際のところ「地方」や「劣等感」という言葉に強いコンプレックスを持っているのは事実である（15年程、故郷を離れていたという理由もそれらを助長させている）。また、芸術と建築が幼少の頃から好きだった為これらの地方と都会の差異は強く実感していた。そして、なにを隠そうこの街で「アート（芸術、建築）」を使って、その差異を埋め、「地方」における「劣等感」を払拭しようとしている張本人が私である。

私は「アートは語るものではなく行動し形にするもの」だと思っている。以降の章では、個展やグループ展、行政主催のアートイベント、映像作品製作。そしてアートとは捉われないであろう農業や祭りなど、2020年に行った10個の活動とそれらにまつわる思想や考えについて記そうと思う。先述しておきたい事だが、私は「地球」と「人類」の真理のために表現活動を行っている。表現テーマは「それぞれがそれぞれの場所を愛する」である。「地球」や「人類」というマキシマムな視点と「地域」や「自分」というミニマムな視点を基軸に表現を行っている。書籍や歴史やディスプレイの情報よりも目の前の景色や、日々の現実、肉体で感じ取る皮膚感覚などの知覚的事実情報に重きを置いて自らの表現や思想を構築している。

1月『新年に歳またぎの個展を開催した、その理由』

2019年の終わりを迎える12月31日の深夜から青森市新町通り空きビルで歳またぎの個展を行った。タイトルは『一年の終わりと HA ジメの個展 END's of Begin START's of Begin』だ。タイトル名に自分の表現したい思想が含まれている。アーティスト名に『HA ジメ』という表記を使っている。現代アートというものは非常に局所的であり一過性である。世界各国、日本国中、素晴らしいアーティストは山のようにいるが。その中で自分を際立たせ、アピールし、存在価値を認めもらうには作品のクオリティーのほかに、「セルフプロデュースカ」も必要となってくると私は思っている。そのような理由でネーミングに特徴をつけた。

個展の目的とコンセプトだが、それは2019年から世界の動向を見据えながら、2020年へと切り替わる瞬間に世界に向けて自分の思想と表現をかたちとして残したいと感じた為だ。通常、年末年始は世界中日本中の美術館やギャラリーは休館している。しかし、「意思の表現」という観点から考えると、一年の終わりと始まりはとても大きなタイムラインであり、意思を表現する為には重要な時期と時間であると感じている。私は毎年、自分のアンテナで翌年を占う。来年、何が起こるのか。何をしなければならぬのかを想像する。その結

果、私は個展を遂行することを決めた。

個展を行うと言ってもこの街では簡単なことではない。展示期間を年末年始に絞ったことにより人目に付く繁華街で行いたかった。その為、まずは中心部の空店舗を探した。不動産屋を巡り、オーナーと交渉し、自分を説明し、納得を得て、そして、鍵をお借りし、場所を片付け、そして清掃し、設営を始める。ここに行き着くまでが非常に大変である。作品の製作や展示の設営を行う事よりも非常に大きな労力や算段、気苦労が強いられる。私の展示は、空間全体を装飾したインスタレーション作品を作り、そこへ平面作品を並べるといったものだ。このような手法を用いる理由は、国内外のアーティストと比較しても、この手法が珍しいという事と、私のこれまでの経験と特徴を伝える為に効果的でもあるためだ（写真1）。

コンセプトについて。私は10歳の時にノストラダムスの予言を知った。当時は世界中に終末論や滅亡論が溢れていた。環境問題や不安を駆り立てるニュースに囲まれ、世界は終わりに向かっているのだと信じてしまっていた。そして世の中が信じられなくなり世の中を疑いだし人間を疑いだした。それから時は経ち予言は外れた。幾つもの環境問題や社会問題も流行りの時事ニュースの様に見えてしまい、あらゆる情報に対する懐疑心が強くなった。事前に提示されるマスメディア情報のほとんどには何かしらの意図があり、世界共通の

情報が一斉に拡散される時は何かしらの目的があると捉えるようになった。アーティストとは、その隠された意図と目的というものを察知し予見した事を表現することが役割の一つであるとも思っている。私は2020年に社会システムの再構築の準備が始まるであろうと予見した。そのようなことから「2020年1月からの世界の変容と次なる形而上世界の表現」をコンセプトとした展示を遂行した。

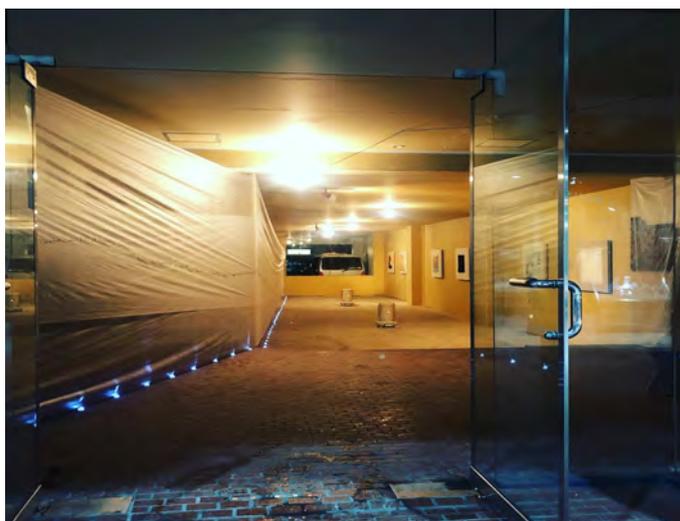


写真1. 「END`s of Begin START`s of Begin」

2月『街の文化を若者へ「雪と君と版画喫茶」』

2018年からA-Paradiseという青森市中心部で行われている音楽とアートのイベントの企画運営に携わっている。2019年2月には初の試みとして「版画喫茶」という版画を彫りながら温かい飲み

物が飲めるという一風変わったイベントを行った。2020年は私がプロジェクトリーダーとして2回目の「版画喫茶」を企画した。サブタイトルは「雪と君と版画喫茶」。《高校3年生の男女がデートでたまたま入った不思議な喫茶店》という、ひとつの物語を構築した上でプログラムを組んだ。青森の若者の多くには「版画」や「棟方志功」や「ねぶた」などといった地方特有のフレーズはダサいという認識がある。特に版画は「大変」、「汚れる」、「難しい」などといったマイナス要素が多いこともあり、街中で版画のワークショップを企画したとしても若者はなかなか興味を示さない。版画喫茶は、そのマイナスイメージを最大限に取り払うことを目指し若者が興味を持ってもらえるように工夫を凝らしたイベントである。空間イメージは2019年にデザインしたものを踏襲し視覚的印象を再度、植え付けるようにした。大文字ゴシック体で「HANGACAFE」と切り抜いた大きなパネルを会場に並べたものだ。一目で「HANGA」と「CAFE」が融合したものであるという事を分かりやすく示すものだ。「アートのデザイン」を取り込み若い世代に伝えることを意識した。「雪と君と版画喫茶」というストーリーは市内に通う高校生カップルが卒業前に東京と青森との遠距離が始まる2人の最後の思い出の一場面として作り上げた。そして、その喫茶店に遊びに来る客という設定で、実際に市内で活動しているデザイナーやアーティスト、学芸

員が喫茶店風に模した仮設舞台の上でトークを行うというプログラムを組み込んだ。最終日は、私が作家のHAジメさんという設定で青森市出身・在住の棟方志功記念館の宮野学芸員と「MUNAKATAとアート これからのAOMORIと版画」というタイトルでトークを行わせていただいた。世界を目指し、世界一を意識していた棟方志功さんの知られざるエピソードと、私から見た棟方志功さんの本質や感じ取る要素を絡め新たな視点で版画とアートについてトークセッションを行った（写真2）。



写真2. 宮野学芸員とのトークセッション

私は活動や表現に常に革命という要素を意識的に入れている。これまで無かったものをつくる。

世界に何があって、何がないか。誰もやっていない事とは何か。そのことを考えて実行すると、自ずと大なり小なり革命になる。私のジャンルレスな平面作品や展示手法も、このことがベースに

なっている。新たな事をする则皆が興味を示して喜んでくれる。それが若い世代にも伝わるようになればと思ひながら表現活動をしている。青森をテーマにした男女の物語と青森の文化を用いたワークショップ&トークイベント。そして、そこにカフェの要素を盛り込む。当初、成功できるか不安の多かった企画だったが、沢山の版画作品と沢山の笑顔を見ることができ、成功を実感することができた（写真3）。

5月『田んぼというランドアート、そして外出規制とアンチテーゼ』

2020年5月。コロナウイルス感染拡大防止の為、緊急事態宣言が発令された。外出自粛やステイホームといった事が強いられ、この先どうなるか分からない風潮が流れ始めた。

「アート」というものは、政治、教育、メディアから独立した存在であり、それがアートの役割なのではないかと思っている。つまり社会に対するオンプズマン的役割ということである。過去の芸術家やアーティストは、その時代に対する反感や意見、思想を作品として作り上げ歴史に残してきた。私はこのような観点を軸にして現時点で「アート」が行える事は何かと考えた。

その答えとして根源的な希望に対する表現をすることを決めた。この先ブラックアウトが起これ

電気も水道もネットも無くなり世界が180度変わっても人類が「生きていける」という希望を表現すべきではないかと思つた。そのことから始めたのが「機械も農薬も使わない田んぼづくり」である。3年間、放置していた休耕田を借り、備中鍬ひとつで田おこしを始めた。そして、それは「ランドアート」あるいは「アースアート」というアプローチで行つた。ランドアートやアースアートは大地をキャンバスと捉え大自然そのものに手を加え作品とするものだ。



写真3.「版画喫茶」全体風景

私は農業や建設行為自体、人類が「生きるために」行う「はじめの」破壊行為だと認識している。その為、農業という破壊行為と創造行為をするのであれば、創造物として作品化したかった。本来、田んぼは「田の字」というのが一般的であるが、

あえて大きなカーブをつけた田んぼを作った。「ご飯一膳分の田んぼ」という小さな円形状の田んぼも作った。そして、シロカキなどに使う田下駄やトンボといった道具も作品として製作した。例えばこの世界からあらゆる物が無くなったとしても、ゼロから作り出せるということを表現した。そして、もう一つ加えて表現したかったのが「地方」の魅力である。都会へ移り住んだ友や、故郷を離れた人々に対し「地方」や「故郷」の魅力や楽しさを伝えたかった。それは、すなわち「みんな帰ってこい」ということでもある。都会で未来に不安を抱えながら生きていたとしても、この土地では肉体さえあれば生きていけるという究極の「希望」を表現したかった。

外出規制がしかれたことに対し、「田んぼづくり」を始めた訳だが、私の人生はこのように社会に対するアンチテーゼを含みながら生きてきたとも言える。地元の高校を辞めたこと、日本建築の世界に進んだこと、アートの世界へ身を置いていること。これらの行動も社会に対するアンチテーゼが内包されている。アンチテーゼを掲げると、誰かを否定してしまうことにも繋がる。他者を肯定しながら自分の意見を表現することは難しい。「北風と太陽」で例えるならば太陽のような意識変化を生めるような表現をしたいと常に思っている。その様なことを念頭に置きながら「ユーモア」と「自虐」をエッセンスとして取り入れた新しい表現を

構築しはじめた（写真4）。

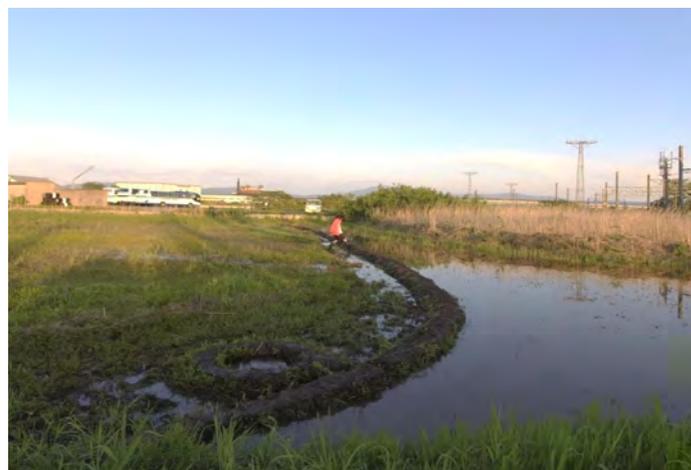


写真4. 機械も農薬も使わない田んぼづくり

6月『田植えという自分なりのグランディング』

土はこれまで灰になったものが地上に舞い降りて蓄積されたものだと思う。人類の歴史が何千年か何万年かは分からないが太古の昔から人類は何かを作り、そして壊し、燃やし、形づくっては破壊してきた。何かが消え何かが生まれる。分子は分裂を起こし何かと結合し何かに変わる。過去の動植物や過去の偉人たちも燃やされるか埋められるかし、違う物質へと変化した。首里城の灰やアインシュタインの髪の毛の分子もどこかの土か動物の一部になっているのだと思う。

この地球で生まれたものは、この地球のどこかで形を変えて未だに存在しているのだと思う。



写真5. 田植え

栄枯盛衰を辿ってきた過去の塵が土へと変わり、その土が生命を維持するための食物を作る。土に触れ、土を感じ、土を楽しむ。私にとっての「グラウンディング」。地に根を張り地球を感じる。電極同士のショートを回避する為に、マイナス極を地面に刺して「アース」という方法がある。「グラウンディング」とはこのことではないかと思っている。

これからの人類の「それぞれの土地」での生き方を模索しながら、近所の田植えで余った苗をいただき、四苦八苦しながら耕した土に植えた(写真5)。

7月『地元アーティストによるグループ展』

7月、地元アーティストを集めて道の駅ゆへさ

浅虫美術ギャラリーで現代アートの展示を行った。青森の芸術に携わる諸先輩方から地元の若手を集めた展覧会をしてみたらどうだという勧めがあり企画が始まった。このような企画は青森市では稀である。以前から自分自身もこのような地元アーティストを集めた展覧会は開催してみたいと思っていた為、前向きな気持ちで臨んだ。しかし、実際のところ青森市には芸術や美術の大学も無ければ、そのような専門学校も無い為「アート」の土壌というものは十分でない。そのためアーティストを集めることには苦勞した。人づてにお声がけなどをいただき、油絵、写真、立体、コラージュなどといった様々なアーティスト 11 名を集めることができた。

新しい試みの一つとして、アールブリュット(障害者アート)のアーティストも展示に参加していただいた。これまで分け隔てられていた障害者と非障害者の壁を撤去したかった為である。展覧会タイトルは『Casa By Show Case 表皮の内側/内在タブロー』と名付けた。展示ギャラリー自体がガラスのショーケースで区切られた空間になっており、その区切られたショーケースを一人ひとりが思い思いの展示をするというテーマを設けた。つまり「ケースバイケース」皆それぞれという意味である。そして、ガラスを自らの表皮に例え、その内面を可視化させるというコンセプトをつけた。

「内在」という言葉を用いたのは、2020年に入りこれまで想像していなかった社会が形成され始め「内在」に対する内観が重要なのではないかと感じた為である。コロナ騒動と同時に政府や国連等のオフィシャルコメントとして〈AIの社会進出〉〈マイクロチップの体内インプラント〉〈スーパーシティ構想〉〈ムーンショット計画〉〈グレートリセット〉などという言葉が上げられるようになった。外部の「情報」や「環境」というもので自己が確立されているとしたならば、今はそれぞれの「内在」するものを内観し可視化させるタイミングなのではないかと捉えた。

「それぞれ」という言葉と「個」という言葉をテーマにして作り上げた展覧会である（写真6）。



写真6. Casa By Show Case 表皮の内側／内在タブロー

8月『本質的な「ねぶたまつり」の確立』

青森市は今年ねぶた祭りを失った。「ねぶた祭り」は青森市の経済的支柱であり、ねぶた祭りを筆頭にした観光業がメインの産業であった。

私は毎年連日、ねぶた祭りに参加していた。八月一日から八月七日のナノカビまでが私にとって一年の本番であり、掛け替えの無い大事な七日間であった。私は数少ない「囃子跳ね」の跳人として参加していた。ねぶた祭りの盲点の一つに囃子と踊り手が一体になっていないことが挙げられる。この事は国内の他の祭りと比較しても非常に特殊なことであり、私は恥じるべき事ではないかと感じていた。そういった理由で私は囃子に合わせて跳ねる「囃子跳ね」を行っている。

2020年。ねぶた祭りが中止になった中で、私は「ネブタ祭り」を企画した。この「ネブタ祭り」は、「囃子」と「舞い」をもう一度、再構築する意味で行ったものである。そして、「きちんと祈りを込めた祭りを確立したい」という気持ちを込めたものである。観光用のイベント化した青森市のねぶた祭りには長い間、失望していた。その為、地元の間が祈りを込めて楽しく参加できる祭りの原点を現実化したかった。「ネブタ祭り」は青森市中心部にある神社の境内で六日間行い、初日には神前で御祈祷も行った。好きな楽器で奏でるお囃子と灯籠づくりワークショップを同時に行った。

私は青森市の観光産業に代わる新たな産業もアートのアプローチで提示できると思っている。《この地域はどんな場所で、どのようなものがあったのか》青森という土地は豪雪極寒の地。そのような土地には身を守る服飾文化があった。こぎん刺し、さぐり、裂き織。厳しい地理的条件の中で布を織り、服を纏うという文化があった。季節がら冬は雪で外仕事ができなくなり家内工業が盛んであった。メインの産業を服飾や繊維生産に切り替えた場合、冬の失業対策も可能になる。これまで海外生産主流だったアパレルも青森市に工場を構える事でメイドインジャパンとして売り出すことができる。また青森はファッションに敏感な人が多いのではないだろうかと思っている。かつての賑わいを失った青森駅近くの商店街も服飾産業の展開により復活の狼煙をあげることができるのではないだろうか。繊維生産、紡績、デザイン、販売までの流れがこの街に根付き「アートとファッションの街。AOMORI」というフレーズが定着するイメージを与えられ、具体化することができたのなら失望は希望に変わるのではないだろうか。

私はいつも難題を逆手にとるように心掛けている。「ねぶた祭り」が中止になったことも逆手にとることでプラスの想像に転化した。誰も想像していなかったことを想像し楽しいことやワクワクすることを想像するように努めている。そしてつまりは、この様な役目は政治や行政や商工会ではな

く「アート」やアーティストが担える部分ではないだろうかと考えている（写真7）。



写真7. ネブタ祭り

9月『映像作品と移動式ワークショップカー製作』

これまで野外イベントを中心に行ってきた A-Paradise だが、2020 年は全国的に厳しい情勢の中で、これまでのような集客型形式とはならないこととなった。そこで提案されたのが映像作品として A-Paradise を作ることである。A-Paradise はこれまで青森市の中心部で、開催場所を変えながらその地域を盛り上げるというコンセプトで行ってきた。2020 年の開催場所として提示されたのが浅虫地区であった。浅虫地区は青森市の東の海沿いに位置し、海水浴場と温泉街と水族館などがある。夏の避暑地であり行楽地であり観光地である。映

像作品はこれらをモチーフとして取り込み構成されていった。作品タイトルは『浅虫海岸物語』。実はこの物語は、2月に行った『雪と君と版画喫茶』の続編ストーリーなのである。《青森の高校を卒業した萌音（もね）と梧楼（ごろう）。梧楼は原宿のアパレルショップに務め、萌音は青森市に新しく開校された国際芸術大学に進学した。遠距離恋愛を続けていた2人だが、梧楼が突然、青森に帰ってきてくれた。そして二人は浅虫海岸へ向かい一日限りのデートをし、熱く短い時間を過ごす。》そのようなドラマがメイン映像になっている。

映像作品にアート要素も盛り込むことが発案された。ホテルを模した20cmくらいのネブタを作り、その彩色を地元の方にさせていただき映像作品に取り入れようと考えた。新型コロナウイルス感染拡大に配慮する必要もあり、ひとつの場所に多人数が集まることを避けるという理由と、商売を営われている方々の都合に合わせて、こちらから出向く形式の移動式ワークショップを実施した。今回、私はドラマの原作の執筆と移動式ワークショップカーの製作をした。映像の編集や監督業務は別のスタッフが行っている。そして、本稿の執筆時点では完成映像はまだ見ていない（※）。

今回の映像作品を作るにあたって、まさしく「地方とアート」、「アートとは」、「コミュニティアートとは」などといった問いに直面した。改善できない経済的問題、市全体の人口減少、街の衰退、

アートの必要性、自らの表現の目的、価値観や感性の違い、他者の否定と自己の否定、そういったあらゆる問いに直面することになった。街に活気を取り戻すには「アート」の力が必要だと強く思い込んでいた時期もあった。しかし、この映像作品の製作に伴いその思い込みも揺らぐことが何度もあった。「アート」を強いることや、「アート」の定義付けも不必要なのではと何度も思った。

そんな中で自分が出来る事として、まずは「アート」を可視化させることに注力した。そのことにベクトルを変えるよう強く意識した（写真8）。※本稿の執筆後、動画『A-Paradise2020 浅虫海岸物語～今、僕らが街にできること～』

<https://www.youtube.com/watch?v=1frCQzZ4jPI>が公開された。



写真8. 移動式WorkShopCar

10月『繋がり』と米文化』

稔るか稔らぬか分からないまま臨んでいた「機械も農薬も使わない田んぼづくり」だったが、想像していなかったほどの黄金色の景色を描き出し、待望の収穫の時を向かえることができた。

8月に行った「ネブタ祭り」の時に出会った人々や家族が稲刈りに来てくれた。みんな初めての体験ということだったが、大事な繋がりが生まれたことを感じ取れることができた。

日本において「田んぼ」という役割は非常に大きな意味を持つと思っている。地域の人々が結び付いて互いに助け合う。それぞれの田植えや稲刈りを手伝い、春先には皆で水路の掃除をしたり、特に田植えや稲刈りは一大イベントであり、赤飯を炊いたり、皆の「喜び」の場である。

戦後、米の大量生産が始まり農家は借金をして沢山の農業機械を揃えるようになっていった。それまでは冬のあいだは家の中で春までにできることとしていた生活も、冬は出稼ぎに出て借金の返済をしなければならなくなった。田んぼも、機械を使う為には土を固くしなければならない。土に必要な空気や栄養分が無くなるため肥料を使う。肥料を使うと雑草も増える。雑草を使うと除草剤が必要になる。コンバインを入れる為に早い段階で水を抜き、土を固くする。私は専門の農業従事者でもないのに現代農業における不条理を伝えたい

訳ではないが、長い間この国で永続的に続いてきた地域的「米」文化と社会の変容に伴う食文化の変容は、表現者として形にしていきたいと思っている（写真9）。



写真9. 稲刈り

アートアレルギー。この街でアートを行っていると、ひどくそのことを痛感させられる。「アート」という言葉を投げかけただけで嫌悪反応を示す方々がいるということだ。現代において「アート」という分野は非常に不明瞭で意味不明であり難解で不親切である。海外では「Art」＝「芸術、美術」である。しかし日本では「アート」と「芸術」と「美術」を分ける傾向がある。日本人はひとつの物事や言葉に対して呼称を感覚的に使い分け、その意味合いを確立しようとする傾向がある。その為か「アートとは？」という常套句も絶えない。11月17日から22日の5日間、12月から始まる青

森市主催の定期プログラムの PR を兼ねた展示を青森市民ホールギャラリーで行わせていただいた。その定期プログラムが『Re:あさって創造大学』というものであり4年ほど前まで活動していた「あさって創造大学」という地元クリエイターが講師を務めるプロジェクトの復刻版として再始動したものだ。私は今回その第0回目（実験的プログラムという意味合いと”元”という漢字に±0という概念があったため0回目という表記になった）の講師を受け持つこととなった。講師である自分自身の作品とこれまでの生い立ちを紹介する展示を行った。展示タイトルは「I Like Creation zero →から→you」。展示テーマは「建築」と「芸術」。幼少の頃から、これらが私のテーマであった為この2つを軸に展示を構成した。展示作品の中には「田んぼづくり」の映像や、そのとき作った道具なども展示した。そして移動式ワークショップカーの一部も茶室という見立てで空間の中心に配置した。展示の裏コンセプトとして「男性性」が盛り込まれている。男女平等という概念はもちろん大切であるが、男性と女性は肉体も精神も違う。男性の美意識や男性特有の言葉にしない審美眼や慧眼を表現の中に取り込んだ。

この展示はチラシと SNS 以外の広報をしていない。場所が駅前にあり内部の様子も外から見える会場であった為、通行人の集客がどこまで可能かチャレンジしてみたかった。しかし、建物の利用

者も通行人の方も会場内に入って下さる方は少なかった。今年の一月にいった新町通りの展示の際に感じたことだが、ためらいもなく会場に入ってくれる方は県外や海外の観光客ばかりであった。その観光客が呼び水となり通行人の方が入ってきてくれるというのは経験していた。

アートアレルギーの話に戻るが、私のまわりでも、「アート」なんて見てる余裕がない、生活するのが精一杯で「アート」なんていうのは二の次だという人が実際ほとんどである。確かにその気持ちは理解ができるものである。不親切で理解できない様な利己的な展示を見る精神的余裕や時間的余裕は「地方」の人間には少ないのかもしれない。

「地方」ではアートが存在する価値や必要性はなかなか聞くことができない。「地方とアート」という問題は簡単ではないと改めて痛感した展示であった。(写真10)。

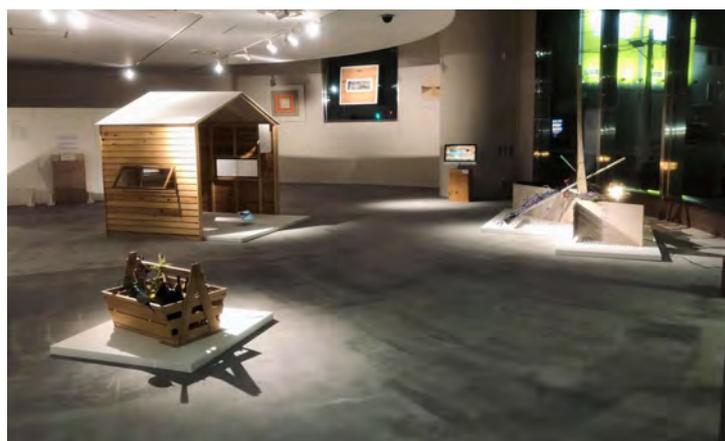


写真10. I Like Creation zero →から→you)

12月『Re:あさって創造大学の開校』

今年の春先に市が所有する公共施設内の多目的スペースの有効活用について相談を受けた。「Re:あさって創造大学」というプロジェクトはその企画段階で生まれたものである。この街にはクリエイターが育つための学校や環境がない。それを少しでも埋めようということから始まったものだ。この文章を書いているのは11月であって「Re:あさって創造大学」の開校前だ。私は第0回目の講師を務める訳だが現段階では、その授業内容はきっちりと決まっていない。二日間の講義の中でアートについての座学と作品製作を行うという方向性だが、どんな思想や目的を持った生徒が集まるか検討もつかないため生徒たちみんなの顔を見てお話しを聞きながら決めようかなとも思っている。何度かこの文章でも述べていることだが、現在の「アート」というものは漠然としすぎているし解釈も広すぎる。それでいて専門家の方々はどんどん難しい方へとアートの世界を伸ばしていく。実際、私も不可解な作品も作るし不可解な文章も書く。抽象的な表現をしていないつもりでも「意味が分からない」と言われ敬遠されてしまうこともある。そんな中で辿りついた解決策が、みんなが作る側にまわれば「アート」の面白さが分かるのではないかということだ。料理や建築も絵画も実際にやってみると見るだけとでは、感じ方や捉

え方、評価の仕方が全く変わってくる。そういったことを踏まえた上で、私はこの街にアーティストを増やす計画を立てた。第0回目の講義の目的も参加者全員にアーティストという感覚を持ってもらいアーティストになってもらおうと考えた。日本人はアーティストと聞くと芸術、美術系の大学を出た高尚な人という認識が強い。しかし、私が影響を受けたヴァルター・グロピウスの言葉には「芸術家は職人が成り上がったものでしかない。」という言葉がある。十代の時にその言葉を知り私はまず先に手工業の世界に進んだ。私はモダニズムと同時に日本の民藝にも影響を受けてきた。そのため20代の頃は「名もなき芸術。日常に眠る美。」という観点で作品名も作者名も付けずに、ただただ形という「美」だけを作り芸術の道を追いかけてきた。自の手を動かし、体を動かし、失敗と想像を繰り返しながら「かたち」を生んできた。

つまりは、芸術家とは誰しもがなり得る存在であって、重要なのは、自己意識にかけた制限を取り払うことなのであると思う。誰か一人が始めると、それに追随する者が現れ世界は広がる。この街は「アートの街」という言葉の他に「アーティストの街」と言われるようになれば良いなど思っている。そうすることで、市民のアートに対する捉え方も変わるのではないだろうか。

『最後に』

「地方」でのアートについてだが、課題として挙げられている市民とアートの乖離や、アートアレルギーなどといった問題の解決にはアートを扱う方々、文化芸術予算を管理する方々の新しい意識の拡張が必須であると感じている。アートが自治体の予算で運営されるものではなく、私設の美術館と民間の運営組織なのであれば、この課題は生まれにくいわけであり、他の県や地域では私設の美術館と民間の組織が運営し地域を潤し芸術の裾野を広げている例もある。

青森県は2021年に八戸市新美術館が誕生し、弘前れんが倉庫美術館、十和田市現代美術館、国際芸術センター青森、青森県立美術館の五館が揃い、他県では類を見ないアートがひしめき合うメッカとなる。そして青森市はそのハブとして位置付けられる。しかし、2020年の世界的な大きな社会変化により、これまでの観光目的としてのアートは通用しない時代になったとも捉えられる。このことにより青森市含め青森県はアートの本質を問い直すべき時期に入ったのではないだろうかと思っている。

冒頭で先述した事だが、私自身は「地球」と「人類」の真理のために表現活動を行っている。本心としては「人類」として「地球」を美しく未来へ繋ぎたいという思いがある。自らが生まれた場所を

自らが汚し自らの生命を危機にさらす「人類」。それはまるで自らの肉体を栄養源としながら蝕み、自らの肉体と共に滅びゆく癌細胞のようにも見える。人類はどのように生きて行けば、この地球に永続的な市民権を得られるのだろうか。この事は政治も教育もメディアも教えてくれない。「それぞれがそれぞれの場所を愛する」という言葉は、このような疑問と問いの中で生まれた。「地球」や「人類」という大きな課題と、それを解く「地域」や「自分」という最小単位の世界。それぞれが目への世界を大切にし、それぞれが目への世界を愛する。私は「地球」や「人類」の課題や真理と向き合う為に「地方」や「自分」という現実世界と向き合っている。目の前の文化や祀りや芸術を直視し肉体で感じアートというファクターを通して表現へと展化させている。そして、これらの表現により、この街（地球）を愛してくれる人が少しでも増えてくれること望んでいる。「それぞれがそれぞれの場所を愛する」という意識が伝播し、それぞれの「明るい未来」や「美しい世界」が、それぞれの中に創造されていくことを願っている。つまり、それが私の「地方」でのアートである。

田名邊 元（たなべ はじめ）

「屋号うた」のものがたり

怒田との出会い

「石山さん、高知に行くなら私の義父のところに行ってみたらどうですか？とてもおもしろい人ですよ」。こう言ってくれたのは、当時総合地球環境学研究所(以下:地球研)上級研究員(現早稲田大学人間科学学術院)であった佐野雅規さんであった。佐野さんと石山が所属していた研究プロジェクトスペースがとなりあっていたので、石山が「篤農家」研究をはじめたことを心にとめていてくれたのだと思う。かくして、高知をめぐる三人旅が始まった。同行者は、寺田匡宏さん(地球研客員准教授)と三村豊さん(地球研研究員)。

お祖父さんの田畑を受け継ぐために、アーティストから転身したトマト農家。味噌づくりと地域の活性化に飛びまわる港町の女将さん。活気あふれる日曜市。どれもが一行に新鮮な刺激を与えてくれるものであった。

この旅の最後に訪ねたのが、高知県の北東部、徳島県境に位置する大豊町の怒田(ぬた)集落であった(図1)。

怒田の景観的特徴は、谷の斜面に張り付いているようにみえる家と棚田にある(写真1)。四国の山中を鉄道や自動車移動していると、このよう

な風景に出くわすことが頻繁にある。怒田もそんな集落のひとつだ。



図1. 怒田の位置



写真1. 怒田の景観 (向こう側に見えるのは八畝(ようね)集落)

集落内の標高差は大きい。現在でも居住されているうちで、もっとも低高度に建つ家屋の標高は400メートル、もっとも高高度の家屋の標高は630

メートル。人口は84人、平均年齢は67.1歳である(2019年1月31日時点)。

佐野さんに紹介してもらった氏原学さんのお宅も、急斜面上のわずかな平地に建っている。他の屋敷と異なる特徴は、斜面に組まれた広大なテラスがあることだ(写真2)。このテラスから眺める谷の景観に一行は圧倒された。この時は自己紹介を含めて、意見交換をするにとどまったが、怒田で何かおもしろいことができればいいなど、三村と石山は考えはじめていた。



写真2. 氏原学の家とテラス

怒田に通う

「どのような活動が地域の人々のためになるのか？」という思考は、外部者が陥りやすい罠であるのかもしれない。実際、怒田の人々は、外部者が来ようが来まいが日々の暮らしを営んでいる。田畑や山での作業、集落の行事など、人々はそれ

らをあたりまえにこなしている。

限界集落とラベリングされようがされまいが、怒田で人々は毎日を生き抜いているのである。

それでも三村と石山は、ことあるごとに怒田を訪れ、氏原さんを起点として怒田を理解することにつとめてきた(つもりである)(写真3)。



写真3. 稲刈りを手伝う三村豊

忙しい農作業、山仕事、地域活動の合間をぬって、様々なお話、集落の案内を惜しみなくしてくれる氏原さんを頼って、三村と石山は時間を見つけては怒田に通いはじめたのである。元地球研プロジェクトリーダーで、高知大学地域協働学部教員となった市川昌弘さんも、たびたび合流していただき、怒田での研究、学生実習について多くのことを教えてくれた(写真4)。

ところで、氏原さんはこの怒田のご出身である。

高知の高校へは市内の下宿から通い(怒田から高知市までは通学が困難であった)、卒業後に就職。働きながら通った短期大学を卒業した後は、高知大学の事務職員として働いていた。



写真4. 稲刈りの合間に談笑する市川昌弘さん(中央)、渡辺伸子さん(右)、石山俊(左)

ご本人いわく、「怒田に戻るつもりはなかったが、父親(母親が先に逝去)の面倒をみるためにリターンすることを決めた」という。60歳の少し手前のことであった。

氏原さんいわく「すべてが逆算」なのだそうだ。身体がうごくのはせいぜい70歳まで(10年を区切りと考えていた)。60歳前に怒田に戻らねばすべてが後手になる。経済的状況も見極めた上での決断であった。「怒田に戻ってスローライフを過ごす予定だったが、住んでみるとそんな状況ではなかった」と、氏原さんはふりかえる。

地域資源の発掘とうたづくり

ある日、いつものように氏原家のテラスで話しているとき、氏原さんが放った一言が「屋号うた」づくりのきっかけとなった(写真5)。「怒田のうたをつくってみたい。最近では、集落の集まりのあとの懇親会はカラオケー辺倒になってしまった。やっぱりみんなでうたえる曲があるといいなあ」(実際は氏原さんの美しい豊永弁で表現された)。これが地域資源を題材にした「うたづくり」活動、「笑う怒田プロジェクト」のスタート地点となった。



写真5. テラスの一端に建てられた小屋での打ち合わせ(左が氏原学さん)

なぜ「笑う」なのか。これは、怒田の人のあるアドバイスがきっかけとなった。怒田の住民の大半は、高齢者としてくられるが、「若手」が60

歳代、「年配」は90歳代。その間には30年もの開きがある。好みや性格の違いももちろんある。集落のうたをつくる際にすべての人々の好みを反映させるのは難しいだろう。ただ、大事なことは「みんなが笑うこと」。かくして、プロジェクト名に「笑う」が冠せられたのである。

「笑う怒田プロジェクト」は次の4つのチームによって構成される：(1) 怒田の人々；(2) 高知大学地域協働学部の学生；(3) ミュージシャン(にしもとひろこ)、俳優・演出家(山口恵子)、地域アート・コーディネーター(川那辺香乃)で構成されるアーティストチーム；(4) 研究者(三村、石山および市川昌弘さんをはじめとした高知大学地域協働学部教員など)。

これらの4チームが参加する2回のワークショップが怒田でおこなわれた。第1回は2018年8月、第2回は2018年12月であった。

この2回のワークショップの成果としてつくられたのが次の4曲である：(1) 地域の人の語りをもとに高知大学地域協働学部の学生諸氏が詞をつくった「ナカダの恵み」；(2) 氏原さんから聞いたエピソードをもとに研究者、アーティストが作詞した「カンジャウネの唄」；(3) 怒田の女性が書いた「自身のライフ・エピソード」をうたった「方言」；(4) そして怒田の屋号を詞にならべた「屋号うた」。

すべての人々が満足するうたをつくることは困

難であると承知のうえで、ともかくも4曲のうたができた。

「屋号うた」ができるまで

第1回のワークショップでは、「探検シート」を用いた地域資源の発見に重点がおかれた。怒田の住人(この回ではごくわずかの参加にとどまった)、高知大学の学生、アーティスト、研究者が混在する6つのグループに分け、怒田集落内でそれぞれが地域資源の発見と共有をおこなった(写真6)。



写真6. 第1回ワークショップ(参加者がみつけた怒田の地域資源のマッピング)

外部者が地域資源を発見し地域の人々と共有する、というアイデアは特に目新しい方法ではない。しかし、三村と石山の考えの基盤にあったものは、目新しい特別なものをつくることではなく、怒田

の人々が日々の生活の中で築きあげてきた、「怒田ではあたりまえのもの」を活かしてうたをつくりあげていくことであった。このワークショップの最後には、「発見」した地域資源をもとにしてつくった、「即興民謡」をグループごとに発表した。

第2回のワークショップの目的は、4つの試作曲を怒田の人々に披露し、意見をもらうことにあった(写真7、8)(注1)。

以下、4曲のうちの「屋号うた」を中心に話をすすめていきたい。

なぜ屋号のうたなのか。これにはいくつかの理由がある。

1つめの理由は、三村が怒田の人々から屋号の重要性を指摘されたことに端を発する。それまでの研究において多数の地図を作成してきた三村と怒田の人々の関心が一致したのである。

2つめの理由は、氏原学さんが話してくれたエピソード中にも、しばしば屋号や怒田の人のみぞ知る地名が登場したからである。地名エピソードのひとつは「カンジャウネの唄」となった。ちなみに「カンジャ」とは「鍛冶屋」を指す。「ウネ」は「尾根」を意味する。鍛冶屋さんが住む(小さな)尾根が「カンジャウネ」なのである。

3つめの理由は、1ターンで怒田の住民となった方が「屋号」を覚えるのに苦労したという逸話を聞いたからだ。

最後の理由は、かつて福井の農村集落で4年間暮らした石山の経験にも通ずるものである。他の家を「屋号」で呼べるようになったとき、集落の一員となれた実感はじめて湧いたのである。ただし、石山が住んだ集落の屋号は以下に記すうちの人名屋号であった。



写真7. 第2回ワークショップ(怒田の屋号のマッピング)



写真8. 第2回ワークショップ(怒田の方々との屋号の確認作業)

屋号は、商家だけが持つものではない。農村においては、集落内の特定のイエを指す言葉である。屋号の分類方法で圧倒的に多いのは、「人名屋号」と「地名屋号」である。人名屋号とは、たとえば「〇〇兵衛」さんという名前を当主が世襲しているものである。これは東日本に多くみられる。地名屋号とは、屋敷の立地の地理的特徴を冠するものである。

怒田の屋号は地名屋号である。たとえば、「ナカダ(中田)」、「ナキャシキ(中屋敷)」、「タケノマエ(竹の前)」といった立地の特徴がつけられた屋号がある。中には「ムネナル」、「アノヂ」など、屋号の持ち主自身でさえあてる漢字がわからないものも散見される。

「屋号うた」の詞にとりいれられた屋号は、第1回のワークショップで記録されたもの、ワークショップ終了後に、氏原学さんと上村隆彦さんがリスト化してくれたものである。これにメロディーをつけたものが試作曲となった。

第2回のワークショップにおいて興味深かったことが2つあった。

1 つめは、試作曲を披露した後に、その中で言及されなかった屋号が人々から挙げられたことであった。試作曲に反映されなかった屋号は、かつては家屋があり、人が住んでいたが、今は空き地となってしまった場所である。こうした屋号は60歳台の人のなかにも「初めて聞いた」というもの

がある。建物や住人が不在となった場合、それに付随していた屋号が人々の記憶の中で薄れていってしまうのである。

2 つめは、試作された屋号うたに対する、二つの改善点が住民から提案されたことであった。

第1の改善案は、詞に登場する屋号の順番に関するものである。試作曲では、怒田の斜面を下から上に車道を上っていく順番に沿って屋号がならべられた。これは、学生諸氏、アーティストチーム、研究者、つまり外部者の感覚による怒田の空間構造が反映されたものであった。しかし怒田の人々は、「班」の順番に並べ替えた方が「しっくりくる」とのこと。一部の例外はあるが、怒田の集落は、北から南に向かうラインを軸にして、1から10までの班分けがなされている。うたに配される屋号も、この班の順番どおりの方が良いという意見が大半を占めた。

第2の改善案は、リズムと曲調に関するものであった。リズムは手拍子を合わせやすいものに、曲調はもっと「民謡っぽく」という意見が出された。

この時点で、わずかな不安が石山の頭をよぎった。作曲を担当していたにしもとひろこさんは、この「ダメだし」に対してどのような気持ちを抱くのだろうか。石山の危惧はまったくの無駄であった。にしもとさんは、「はい！」といともしなやかに、そして粘り強く「民謡度」を増した曲に

つくりかえていったのである。

盆踊りで披露するための振り付け

「うたづくり」の当初の目的は、氏原さんが提案したように、「みんながうたえて共有できるもの」をつくることにあった。しかしうたづくりをすすめていくうちに、振り付けをつけて盆踊りで踊る、という新たな目標が芽生えてきた。第1回のワークショップが終了し、第2回のワークショップにおいて「屋号うた」の試作曲づくりをすすめていたアーティストチームは、振りをつけることを意識しはじめていた。

決定的なきっかけは、第2回ワークショップに参加した女性の一言であった。「盆踊りで踊ったらいいのでは？」(これも美しい豊永弁で表現された)。

それをうけて、第2回ワークショップの最後に、高知大学生「鮭ちゃん」(鮭が大好きなことに由来するニックネーム)とアーティストチームの山口恵子さんが、仮完成版「屋号うた」に「お富さん」の振り付けをあわせてみた。「お富さん」とは昭和29年に発表された歌謡曲である。歌舞伎の演目をモチーフに、民謡調のメロディーをつけ、大ヒットした歌となった。

怒田の盆踊りは、50年の間途絶えていたが、1ターナー者が中心となって2014年に復活したものである。三村と石山が2018年にこの盆踊りに参加

したところ、すでに怒田からは転出したが、この盆踊りのために「帰郷」する怒田出身者とその子孫、親戚の方の参加多く参加していた。

怒田の盆踊りの楽曲に「お富さん」が使われることは、石山に少なからぬ衝撃を与えたが、その振り付けにも衝撃を受けた。身体をクルクルと回すだけでなく、ジャンプ(と石山には思えた)をも交える振り付けである。

第2回ワークショップが終了したのち、関西に戻った作曲担当のにしもとひろこさんが「屋号うた」の完成をすすめつつ、振り付けへの取り組みもはじまった。アーティストチームが選んだ方法は、すでにあるものをヒントにして、「屋号うた」の振り付けをつくりあげていくものであった。ヒントになった振り付けは、先の「お富さん」のものである。

「屋号うた」の振り付けが完成したのは、盆踊り開催の2ヶ月前の2019年6月であった。この振り付けを構成するのは、農作業や道路開削などをイメージした動作である。

残る課題は、実際の盆踊りで怒田の人々に踊ってもらうことであった。このプロセスに活躍したのが、高知大学地域協働学部の学生の皆さんであった。怒田の人々に振り付けを覚えてもらうために、「怒田集落ふるさと館」での練習会を企画し、盆踊り本番では、やぐらの上で見本を示す役も担ってもらった(写真9)。



写真9. 2019年8月におこなわれた盆踊

地域資源の可視化と可聴化の可能性

2020年の怒田の盆踊りはコロナ禍の影響で中止となった。その代替企画として、「怒田集落ふるさと館」での「秋の収穫祭」がおこなわれた。この企画の主催は、「NPO ぬた守る会」であった。「秋の収穫祭」の出し物として、日本舞踊公演、昭和40年代以降を中心とした「昔の写真」の鑑賞会などが企画された。

高知大学地域協働学部の学生グループ(地域協働学部東豊永班)が披露したものは、ダンス、怒田の人々が撮影した「昔の写真」のデジタル化・スライドショー化作品、さらに、怒田の女性とともに「屋号うた」の踊り(写真10)と、「屋号うた」とドローン映像(怒田の森一芳氏撮影)を組み合わせた映像作品などであった。

怒田を初めて訪れてから4年、笑う怒田プロジェクトがはじまって2年が過ぎた。盆踊りでの披露までこぎつけることができたのは、氏原さんをはじめとした怒田における地道な地域活動、市川昌広さんをはじめとした怒田での10年におよぶ研究・教育活動、採算度外視でおもしろがってくれたアーティストの皆さんに支えられてきたからであると思っている。

盆踊りでの「屋号うた」披露は、「笑う怒田プロジェクト」大きな成果であるが、これが三村と石山にとっての最終到達点ではない。これを契機に怒田での研究・地域活動を地道に継続させていきたいと、気持ちを新たにしている。



写真10. 2020年10月におこなわれた「秋の収穫祭」(怒田の女性と高知大学地域連携学部の学生が「屋号うた」の踊りを披露)

「笑う怒田プロジェクト」の手法は、地域資源の発掘と提示方法に大きな可能性を秘めている。

このプロジェクトのポイントのひとつは、屋号や語りという、目に見えない地域文化資源の可視化、可聴化したことである。もうひとつくわえれば、盆踊りの演目となることによって、「可踊化」にまで辿りつくことができた。この「可踊化」によって、盆踊りに参加する集落非在住者にも地域文化資源の扉を開くことができたと考えている。

最後に強調しておきたいことは、「笑う怒田プロジェクト」の方法論が、どこの地域でも応用が可能であるということである。地域によって、対象となる地域資源、その表現・表象方法は異なるであろう。ただ、地域住民が「当たり前」と思っている地域資源、地域においても忘れ去られようとしている地域資源を、外部者の発見を伴いながら、活かしていくためのひとつの事例ができたことが、「笑う怒田プロジェクト」の重要な成果であると自負している。

(注1) 第2回ワークショップを中心とした映像は、以下のアドレスで公開されている。

https://www.youtube.com/watch?v=Bkwp_PtRp7o&feature=emb_logo

石山 俊 (いしやま しゅん)

三村 豊 (みむら ゆたか)

ウガンダに学ぶ

遠くなったウガンダとの距離

東アフリカに位置する内陸国、ウガンダ。日本の本州程の面積に、4,000万ほどの人々が暮らす。1800年代後半、ウガンダにやってきたヨーロッパ人の探検家が、その豊富な緑と水資源の美しさに息を呑んだことから、ウガンダは「アフリカの真珠 (Pearl of Africa)」として知られている。ウガンダの玄関口であるエンテベ空港に到着すると、照りつける太陽の中、すぐそばにあるビクトリア湖を撫でる風が、魚と土の匂いを運んでくる。何度訪れても、エンテベ空港から首都カンパラまでの1時間ほどの道中、外の景色を眺めるのが私は好きだ。

新型コロナウイルスの影響で、1年に一度は訪れていたウガンダにそう簡単には行けなくなってしまった。新型コロナウイルス感染拡大防止のため、ウガンダ政府の対応は素早かった。1人も死者が出ないうちから国境を封鎖し、人々には外出禁止命令を出した。いわゆる「ロックダウン」である。当然ながら、今年予定していた2回のフィールド調査はキャンセルになった。10年来の友人たちはどうしているだろうか。調査地でお世話になっている人たちは元気になっているだろうか。時折

メッセージアプリで連絡を取り合うものの、「ウガンダはどう？家族みんな元気になっているの？」「日本は感染者数が多いと聞いたけど、あなたは大丈夫なの？」などと表面的な会話で終わってしまい、それがなんだか寂しい。メッセージアプリからでは、私の友人たちのまくし立てるような騒がしさも、調査地でいつも私のことを気にかけてくれるお役人の佇まいの穏やかさも伝わってこない（写真1）。こうなってくると、11,500kmという距離がとても遠く感じる。



写真1. 10年来の友人たちと

調査は忍耐との勝負

友人や知人の表情だけではない。私が今になって懐かしく思い出すのは、あのゆったりとした時間の流れかただ。調査は忍耐との勝負だと、初め

でのフィールド調査の際にひしひしと感じた。様々な、あるいは、全ての物事が、こちらが思うスピードでは進まない。まずは調査に必要な倫理審査。必要と言われた書類は事前に全て提出していたのに、いざ現地に着いてみると「あれが足りない。これもない。」と言われる。慌てて書類を作成し、大学内にある倫理審査機関に提出しに行くと、書類が全部揃っているかの確認に何日も待たされた。こういう時、人々は“*This is Uganda*”と言う。直訳すると「これがウガンダ」だが、「これがウガンダだもの、当然でしょ」あるいは「これがウガンダだもの、仕方ない」といった意味合いが含まれているように思う。同じく倫理審査を待っていたオランダ出身の研究者と、“*Alright, this is Uganda*”と言いながら笑い合った。

とはいえこちらも笑っているばかりではられない。私の調査期間は限られているのだ。私のような申請者が何人もいる中、手続きを後回しにされては困ると、倫理審査機関に毎日朝から顔を出した。大抵の場合は、担当事務員の執務デスクの横を陣取って座り、無言のプレッシャーをかけるだけなのだが、そのプレッシャーに負けたのか、最後には苦笑いしながら書類の山から私の申請書を引っ張り出し、手続きを進めてくれた。私の粘り勝ちであった。

ウガンダ到着からすでに3週間が経過していた。倫理許可が下りた書類を大事に抱えて、調査地へ

と赴いた。もちろんここでも忍耐との勝負だ。まずは県の行政官長から調査許可をもらうところから始まる。約束した日時に県庁に行ってみても、行政官長は当たり前のようにおらず、ここから県庁通いの日々が始まった。そして、ここには書き切れないほどの煩雑な手続きを経て、やっと調査をできる土台が整った。すでに疲労困憊だったが、一方で、「これで正々堂々とインタビューできるぞ！ やっとここまで来た！」とワクワクした気持ちも大きかった。

立派な時計と豊かな時間

ここで、10年前にウガンダで聞いた面白い小噺を紹介したい。それは次のように始まる。

「あなた方に聞いてみたい。特に先進国からやってきたあなた方に。なんのために働いているのですか？と。」

あなただったらなんと答えるだろうか。生きるため、家族のため、人の役に立つため、生きがいを感じるため。あるいは、稼いだお金で大好きな海外旅行に行くためなど、人によって理由は様々であろうが、そう簡単に答えられる問いかけではない。聞き手が答えを考えている間に、小噺は続いていく（写真2）。

ある日、世界銀行の総裁がウガンダにやってき

ました。ウガンダが長年の借金を返せない理由はなんなのか、この国を視察し、その理由を探るためです。そして総裁はウガンダの財務大臣と面会し、直接聞いてみたのです。



写真2. 小唄を語る男性 (Ndere Cultural Centre にて)

「アフリカの真珠と呼ばれるほど、水や森などの美しい天然資源がこの国にあるにもかかわらず、どうしてあなたがたは借金を返せないのでしょうか？」財務大臣は考えてから言いました。「ビクトリア湖に行ってみたらいかがでしょうか。ビクトリア湖は、ウガンダが誇る豊かな天然資源を代表する大きく美しい湖です。そこに行き、自分の目で確かめたらいかがでしょうか。なぜ資源資源に恵まれたこの国が、国際社会に対して借金を返せないでいるのかを。」世界銀行の総裁は早速ビクトリア湖に行ってみることにしました。2人が面会した首都カンバラからは車でたった1時間ほ

どの距離です。総裁は、海のような湖を眺め、湖のほとりの草むらの上に1人の男性が寝転がっているのを見つけました。総裁は彼に近づいていき話しかけてみました。

「一体何をやっているのですか？」男性は「特に何も。ただリラックしているだけです。」と答えました。次に総裁が男性に職業を尋ねると、男性は漁師だと答えました。

ビクトリア湖にはナイルパーチやティラピアといった魚がたくさん泳いでおり、ここで水揚げされた魚は全国へと届けられる。ナイルパーチは日本人が好むスズキ科の白身魚で、一時期には「スズキ」として日本へ輸出されていた。内陸国でも美味しい魚が食べられるのは、「アフリカの真珠」ならではの魅力だ (写真3)。

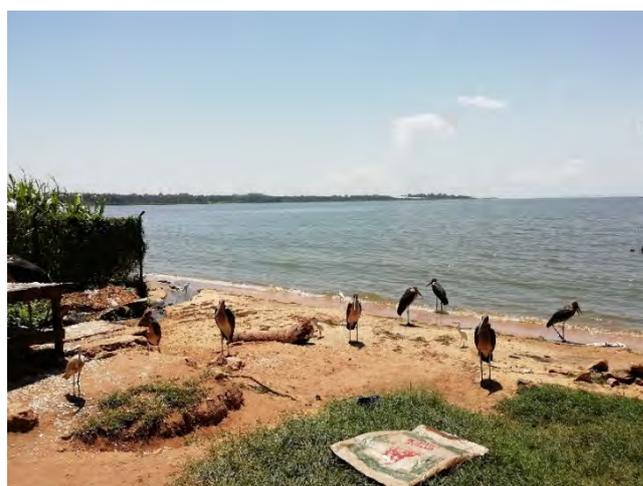


写真3. ビクトリア湖のほとり

「君は漁師か。なら魚も釣りに行かずにこんなところで何をやっているんだ。湖に行って魚を釣ってきたらどうかね？」と総裁は言いました。男性はキョトンとしながら、「えっと、3日前にもう釣りに行ったので」と答えました。3日前は何匹魚を釣ったのか総裁が尋ねると、「3匹」と男性が言いました。「その3匹は一体どうしたんだ？」「家族で1匹食べました。もう1匹はご近所にあげて、残りの1匹は今夜のためにとってあります。」「では、今釣りに行ったらどうかね？」と総裁。「今釣りに行ってどうするのです？」と男性は聞き返します。「もっと魚を釣るためだよ！」と総裁が言うと、「それで？」と男性。「もっと魚を釣って、それを売れば稼ぐことができるじゃないか。」「それで？」「そうすればもっとお金持ちになれる！」「それで？」「稼いだお金で遊んでリラックスすればいいじゃないか！」と総裁が言い放ったところで男性は言うのです。「今の僕を見てこらんよ、もうリラックスしているじゃないか」と。

ここで観客の爆笑を誘い、小唄は終盤へと向かっていく。

総裁は漁師の男性を説得することを諦め、国へ帰って行きました。そして、世界銀行の委員会の前で言うのです。「いいですか。ウガンダのことはもう忘れましょう。実際にウガンダに行ってみて分かりました。きっとあの国からは永遠に返済がありません。それでいいのです。」

この小唄の締めはこうだ。

「もう一度、あなた方先進国からやってきた人たちに聞いてみたい。あなた方はなんのために働いているのですか？稼ぐため？お金持ちになるため？それでどうするのでしょうか？あなた方先進国から来た人たちは立派な時計を持っているけど、私たちウガンダ人は豊かな時間を持っているのです。」

さっきまで笑っていた観客は、自分たちがはめている腕時計に目をやりながら「うーん」と唸ることになる。さて、私たちはなんのために働いていたのだろうか。そして、ウガンダで自分が思う通りの速さで物事が進まないことにイライラする必要があるのだろうか、と。

コロナ禍での調査の心構え

さて、話をフィールド調査に戻そう。初めてのフィールド調査。期待ばかりが膨らんでいた私は、10年前に聞いたこの小唄の面白さも深さもすっかりと忘れて、イライラしていた。ある日のこと、理由は覚えていないが何か急ぎの用事があった私は、調査地のとある村を急ぎ足で歩いていた。遠くから「ワキコ〜！」と呼ぶ声が聞こえ振り返ると、知人が私のことを走って追いかけていた。「ハロー」と声をかけると、「この村であんなせかせか

歩いているのはあなたしかいないから、遠くからでもすぐに分かった」と言われ、なんだか恥ずかしくなった。確かに見渡してみると、ウガンダの人たちはみんなゆったりと、悠々と歩いている。

ところで私は博士課程の学生だ。フィールド調査に行けないという事実は研究計画を大きく狂わせる。今年予定していた調査渡航を全てキャンセルし、今後この研究計画をどうすべきかと、この1年弱散々悩んできた。あんなに苦勞して手に入れた調査許可証は2021年7月で期限切れとなる。時間ばかりが過ぎていく中、焦らずにはいられない。しかし、今、このエッセイを書きながら思う。焦っても仕方がない。私が焦ったところで、新型コロナウイルスの流行が収まるわけではないし、私が立てた研究計画通りに物事が進展するわけでもない。調査は何もフィールド調査だけではないし、文献調査も同じくらいかそれ以上に大切だ。ここは一つ、ウガンダ人のように「私には豊かな時間がある」と割り切って、どーんと構えてみようじゃないか。日本でやれることにとことん向き合おう。今こそあの小瀬から、ウガンダのゆったりとした時間の流れから学ぶべきである。

大平 和希子（おおひら わきこ）

編集者と執筆者の紹介

田中 樹（たなか うえる）

摂南大学・教授、ベトナム・フエ大学名誉教授、任意団体「風人土学会」代表、一般社団法人「暮らしのモニター」理事。専門は、環境農学、地域開発論、土壌学。アフリカやアジアの在来知に学び、人びとの暮らしと資源・生態環境の保全が両立するような技術や生業を創り出す研究に取り組んでいます。

宮崎 英寿（みやざき ひでとし）

一般財団法人地球環境人間フォーラム・研究官。専門は、境界農学、環境土壌学。アジアやアフリカにおいて家畜糞尿を介した牧農共存のあり方に関する研究、国内外において雑穀研究、生業活性化に関する研究に取り組んでいます。

石本 雄大（いしもと ゆうだい）

青森公立大学・地域連携センター・専任研究員。専門は、生態人類学、アフリカ地域研究。アフリカ半乾燥地や日本の過疎地域において生業（なりわい）と地域社会を支える組織の研究に取り組んでいます。

千葉 智史（ちば さとし）

2015年から和歌山県・色川地区という山里に移り、編集業を軸に、本屋・図書室を併設した週3日の喫茶室の運営、多様な地域活動への参画等、複数のなりわいを重ねながら生活しています。研究という大それたものではありませんが、対話、協働のあり方、文化などをキーワードに、中山間地域でのコミュニティのあり方の研究は、具体的な実践を通じて深めていきたいと思っています。

中村 亮（なかむら りょう）

福岡大学・准教授。専門は文化人類学。東アフリカ（タンザニア、スーダン）や日本の里海地域で、漁民文化研究に取り組んでいます。最近の研究テーマは、アフリカ漁民社会における、経済互助組織を活用した地域振興と環境保全です。

関 真由子（せき まゆこ）

日本学術振興会特別研究員（東京農工大学）。専門は、土壌学、環境農学。南インドの畑作地における持続的な土地管理の実現を目指し、土壌改良資材のバイオ炭や堆肥の利用に着目した研究に取り組んでいます。

澤崎 賢一(さわざき けんいち)

アーティスト/映像作家。一般社団法人「暮らしのモンタージュ」代表理事。アジア・アフリカでフィールド調査を行う研究者の活動を記録した映像制作を行っています。彼らの主たる研究内容だけでなく、そこでこぼれ落ちる「余白」的なものも含めて、映像メディアの使い方を工夫した独自の創造性を追求しています。

庄子 元(しょうじ げん)

青森中央学院大学・経営法学部・講師。専門は人文地理学(農業・農村分野)。環境や社会の変化による食料の生産や流通の再編を、日本の農村やモンゴル、ナミビアで研究しています。記事への謝辞:調査にご協力いただいた蛭名郁子様と、西濱大祐様をはじめとする東北町役場の皆様に感謝いたします。

關野 伸之(せきの のぶゆき)

中京大学・大阪樟蔭女子大学非常勤講師、NPO 法人エトピリカ基金理事。専門は、環境社会学、アフリカ地域研究。西アフリカの水産資源管理やバリ島の水資源管理など10年の研究生生活を経て、現在はゲストハウス Tonton Nobu の経営やフランス語通訳ガイド、科研費コンサルタントをしつつ、野生動物と人の付き合い方についてフリーの立場で研究を続けています。

遠藤 聡子(えんどう さとこ)

外務省アフリカ部アフリカ第二課・課長補佐。専門はアフリカ地域研究。アフリカのプリント更紗「パーニュ」を用いた衣服とそれを作る仕立屋のように、アフリカの文化と、それを支える人の仕事に関心があります。

寺田 匡宏(てらだ まさひろ)

総合地球環境学研究所・客員准教授。専門は、人文地球環境学、歴史学。語り(ナラティブ)の視点から、「わたし(意識を持った人間という存在)」が「世界(認知された外界)」と関わる方法として「環境」をとらえたいと思っています。また、アンソロポシオン(人新世)や環境の未来の語り(未来史)に関心を持っています。

砂野 唯(すなの ゆい)

広島女学院大学生活デザイン学科・専任講師。専門は、生態人類学・地域研究・食文化。アフリカと南・東南アジア、日本の酒をはじめとする発酵食品に注目し、人間がどのように食物を生産し加工することで、環境に適応して栄養を満ちし味わうことを楽しむ食文化を形成してきたのか研究しています。

藤岡 悠一郎（ふじおか ゆういちろう）

九州大学大学院比較社会文化研究院・准教授。専門は、地理学、地域研究。アフリカやシベリア、日本の農村地域において、環境変化への生業適応、植物利用や採集文化に関する研究に取り組んでいます。

岸上 光克（きしがみ みつよし）

和歌山大学・食農総合研究教育センター・経済学部（兼務）・教授。専門は、農業経済学（農協販売事業論・地域づくり戦略論）。今後の農協の販売事業とともに、「現場の声」を基本とした地域づくりのあり方について研究しています。

山根 裕子（やまね ゆうこ）

名古屋大学農学国際教育センター・研究員。専門は地域研究、熱帯農学。アフリカの農村での住み込み型の調査を通じ地域の人々の暮らしや農業の仕組みを明らかにする研究に取り組んでいます。最近では、途上国の農業への適切な技術支援の在り方について考えることをテーマとした研究に取り組んでいます。

加藤 太（かとう ふとし）

日本大学生物資源科学部・准教授。専門はアフリカ地域研究・作物学。東アフリカのタンザニアや日本の農村部において農業や地域にかんする研究を実施しています。特にイネや雑穀などの主食作物の栽培や利用、ヒトとのかかわりあいなどに関心があります。

植田 淳子（うえだ じゅんこ）

和歌山大学 紀伊半島価値共創基幹 食農総合研究教育センター 特任助教。専門は農村社会学。農家の女性たちが取り組む起業活動やグリーンツーリズム、さらに、日本やドイツでの農家の後継者育成のための研修プログラム等に関心持ち研究に取り組んでいます。

神代 ちひろ（くましろ ちひろ）

東京外国語大学・世界言語社会教育センター・特任助教。専門は、アフリカ地域研究、文化人類学。アフリカ農村における女性住民組織に注目しながら、開発プロジェクトおよびマイクロファイナンスの、文化や社会関係との関わりを明らかにする研究に取り組んでいます。

菅原 久誠（すがわら ひさなり）

群馬県立自然史博物館・学芸員。総合地球環境学研究所・共同研究員。専門は、フィールド地質

学、ジオパーク学、文化地質学、アストロバイオロジー、博物館学。尾瀬地域のフィールド調査、玄武岩に記録された微生物活動の痕跡を探る研究、自然や文化の多様性を読み解き人に伝える研究など、博物館学芸員の視点で多様な研究テーマに取り組んでいます。

林 昌平（はやし しょうへい）

島根大学・学術研究院・環境システム科学系（生物資源科学部）・助教。専門は、微生物生態学、環境微生物学、共生微生物学。自然環境中での微生物の振る舞いや、他の生物との関わり合い、極限環境での微生物の生態などを研究しています。

村田 周祐（むらた しゅうすけ）

鳥取大学地域学部教授。専門は村落社会学、人と自然の関係論（農・林・漁・スポーツ）。蓄積された生活の知恵に学び、そこに住み立場から地域のこれからを考えるために、日本の農山漁村やガーナでの住み込み型の現地調査を繰り返しています。

川尻 優子（かわじり ゆうこ）

島根大学生物資源科学部卒。英国にてジュエリー制作を学び帰国後、伝統工芸に従事。

（株）竹影堂にて金属工芸に携わりながら Departure&Design というブランドを展開し、旅で出会ったモチーフを真鍮や銅素材に投影したものづくりをしています。

田名邊 元（たなべ はじめ）

楯烏枝 KITASAKU 代表。Extender/Expression 主宰。青森公立大学国際芸術センター青森技術員退職後、芸術家としての活動を本格化。宇宙、地球、人類の真理の探求と、芸術と哲学が描き出す地域の輝きをテーマに表現活動を行っています。

石山 俊（いしやま しゅん）

国立民族学博物館・プロジェクト研究員。専門は、文化人類学、環境人類学、アフリカ、アジアの乾燥地の農村で、農業、農民、文化とそれらの変容の研究をしています。4年間の日本の農村生活をきっかけに、地域活性化のキーパーソンとなる「篤農家」の研究もおこなうようになりました。

三村 豊（みむら ゆたか）

総合地球環境学研究所・研究員。専門は、建築学（建築・都市史）、環境芸術学。インドネシアのジャカルタ都市圏では地理情報システムや画像処理を用いて建造環境の特性や都市の歴史的変遷、土地利用の変化に関する研究、日本の中山間地域（京都・高知）では、地域資源の記録と

保存、その活用に関する研究に取り組んでいます。

大平 和希子（おおひら わきこ）

東京大学大学院総合文化研究科「人間の安全保障」プログラム博士後期課程。専門は、アフリカ地域研究、アフリカ政治。アフリカ農村部に暮らす人々にとって、また、国家にとって「伝統的権威」とはどのような存在なのか。その関係性に興味があり、ウガンダ西部ブニョロキタラ王国の研究に取り組んでいます。

フィールドで出会う風と人と土

編 者 田中樹 宮寄英寿 石本雄大

デザイン 田中樹

発 行 摂南大学

枚方市長尾峠町45番1号

発行日 2021年3月31日

© 2021 田中樹、宮寄英寿、石本雄大

ISBN:978-4-906785-08-7

